岩波菊治

―短歌に辿る一移民の心の軌跡―

清谷　益次著

サンパウロ人文科学研究所

岩波菊治

サンパウロ人文科学研究所

清谷　益次著

岩波　菊治

短歌に辿る一移民の心の軌跡

刊行のことば

移民のたどって来た足跡は、いろいろな型で残して行かなければならないとするのが、ブラジル日本移民を研究目的の一つとしている、私ども研究所の主眼であります。

七〇年代に刊行した半田知雄著「移民の生活の歴史ーブラジル日系人の歩んだ道」及び、先年刊行を見た「ブラジル日本移民八十年史」も、この趣旨に沿って上梓されたものであります。

「移民の生活の歴史」は半田知雄個人により、また「八十年史」は当研究所が編纂の中心になり完成したものでありますが、これらがいずれも日本移民の通史であったのに対し、ひとりひとりの移民がたどった足跡を追うこ

ともまた、通史をより具体的に補う上で、欠くことの出来ないものであります。

幸いにしてこの度、すでに刊行を見ていた移民文芸の先達の一人、歌人岩波菊治の歌集をもとに、当研究所関係者の清谷益次氏をわずらわし、残された短歌作品によって、一移民の歩んだあからさまな生活の姿、心の軌跡といったものを本書によって跡づけることが出来ました。

読者は、歌人と呼ばれる特殊な立場にあった者の生涯の記録としてだけではなく、戦前移民の多くの人々がたどったであろう姿を、本書から汲み取っていただけるものと思います。

当年六月をもって、ブラジル日本移民は八十五年の歴史を数えることになります。そのささやかな記念の一つとして、これを上梓できることを喜びとするものであります。

一九九三年六月

サンパウロ人文科学研究所

会長　山本　勝造

目　次

プロローグ……7
岩波菊治の短歌歴……11
一九二七年　いかづちの雲にかも似て…28
一九二八年　幼子を新墾原の……38
一九二九年　いささかも肥料はせねど48
一九三〇年　一年の乏しき収入……57
一九三一年　昨日の朝の霜に焼けたる・73
一九三二年　鋭心は失せしにあらね……90
一九三三～三四年　村建つる思ひに燃えて95
一九三五年　父がふきこみしレコードは…99
一九三六～三七年　行末ののぞみ失ひ……105
一九三八年　指導精神既に失へる…110
一九三九～四〇年　壁にかけて仰ぐ……128
一九四一年　たはやすく相対死も……131
一九四二～四三年　収録作品なし……149
一九四四年　デマ多き葡字紙は読むに……151
一九四五年　性欲に悩むことなく……164
一九四六年　老い母のなほながらへて……173
一九四七～四八　歌詠みて遂に終らむ……180
一九四九年　我が歌集がアララギ叢書の…190

一九五〇年　通俗雑誌今宵読みゐて……200
一九五一年　十年の後をたのみて……207
一九五二年　花作りに転向なさむと……219
晩年の叙景歌……228
妻とめの短歌……229
脇坂一の「岩波先生を想う」の歌……232
終りに……234
ブラジル語注釈　238

プロローグ

一九五二年十一月二十三日に、行年五十四歳で逝った岩波菊治は、生前「コロニア短歌の父」と呼ばれた。死後、かつてないほど多くの彼を悼む文が邦字新聞その他の刊行物に発表されたのだったが、「一生を歌に徹して生きた」とか「清貧に甘んじた」と言った風の賛辞がちりばめられていることが多いのであった。

私自身は、このような明快ではあるが単純な位置づけは賛成でなく、画一的なこれらの賛辞には寧ろ嫌悪感を抱いたものであった。

私はいま、岩波菊治の一介の移民としての生涯と心の軌跡を、その短歌作品によって辿ろうという、一種思い上った試みを始めようとしているのだが、小詩型短歌はその性格として、或る一人の実生活や精神生活の姿を追うのには、これほど手頃なものはない、とさえ言えるものを持っていると思うのである。ごく短い形であるために、幾らかでも作る方法を心得ていれば、そして心掛ければ日常の生活の有様や心の動きを、自らの言葉として記しとどめることの比較的容易な文芸なのであって、事実、多くの移民がそのような短歌作品を残している。

岩波菊治の一周忌歌会が開かれる直前に、私はパウリスタ新聞に上修六郎のペンネームで「岩波菊治の一周忌に」という一文を載せて貰った。この文は、私が一九八五年に出版した「遠い日々のこと」に収録しているが、

その中の幾ところかを抽出して「短歌作品に辿る一移民の心の軌跡」のプロローグとしたい。

『ー略ー生前から、岩波菊治を呼ぶ場合「先生」とか「氏」とか言ういい方が、どうも私にはぴったりとしなかった。あのたくまない、むしろはじらいとも見えるような表情に接していると、そういう呼ばれ方のために彼自身の心の底に潜るであろうものが想像され、またこちらが抱く親近感が、失われて行くような気持を絶えず持ったものである。事実、岩波菊治ほど、自分自身をハダカで置きたかったものは稀であるかも知れない。

また彼の人間を評する場合に、「一生を歌に徹して来た」とか「清貧に甘んじた」というような言葉を聞く時ほど、大きくいえば彼の「人間」を冒とくされたように感じることはないのである。空虚なこれらの言葉は、菊治五十数年の生涯の、その日その日の生活の、また感情生活の上での苦しみ、焦燥、悩み、或いは肉体的な労苦を思っても見なかった者のみの言えるものであるだろう。

菊治ほどの叡智の人が、人並にいや人並以上に心と生活のゆとりを欲しなかったと、どうして考えることができよう。あれほどの真剣さと努力とを持ち続けながら、不思議なほどに菊治一家の生活は経済の上で恵まれていない。古いことは知らないが、かかわりを持つようになったロッシンニア時代、スザノ、モジ時代を通じ、私の知る限りでの暮しは物心ともにぎりぎりのものであっ

たようだ。このことは悪くいえば菊治の世渡りのヘタさによるものであろう。種々の事情はあったろうが、彼に接する者にいの一番に深い印象となるかの「たくまなさ」が、経済生活の上では不利な条件に彼を置くことになり、いわば立ち遅れの状態にいつも置かれることになったのではないかと思う。彼の心の底にたたえていた強い願望と、それを実現する方策を持ち得ぬことに対する反省と自虐との葛藤によって、彼の性情は磨きがかけられたのではないかとさえ私には考えられる。アリアンサ時代にはむしろ闘争的であったといわれるほどの強いものを内蔵した彼のこのような変化は、精神の苦しみを経て育て上げられたもので、単なる善良さとか円満さではなかった。一見淡々としているようで、而も作品の底にただよう苦渋さをみれば、このことは肯かれるのではあるまいか。

ただ一つ歌詠むことを拠り処としこの国に生きて貧しかりし二十幾年この歌は、短歌を唯一無二、至上のものとしてこれ一つに総てをかけていたということではなく、尽きることのない生活との闘いに疲れて、ほっともらした息づきだと思うのである。

一略一桃の木に囲まれた家は全くの荒れ庭で、自ら名づけた「桃蔭山房」の名は美しいが、菊治自身このいぶせき様にはかなりひけ目を感じていたもののようだ。人に訪ねられても、ぽつねんと手持ち無沙汰の姿をして「ひどい家でね」と苦笑する彼に、いたましいものを感じ

た記憶がある。
それも晩年にはやっと新築をする算段がつきかけた模様で「何とか早くしたいが、なかなか大変でね……」とよくもらしもらししたものであった。ー略ー
いま、あれほど希望して遂に生前には実現しなかった家が遺族の手で出来上り、それも彼のこの上もない希望だった「新しい家での歌会」が開かれる訳だが、それは彼の予期もしなかった自らの「一周忌歌会」である。
私には、菊治があの〝ションダレ眉〟の微苦笑を浮かべながら、この集りを淡々と眺めるであろう姿が思われてならないのである。』

この一文が新聞に出た当時、「上修六郎」とは何者ぞ、岩波菊治先生の真価をないがしろにする独断的な言辞だ、とする声がコロニアの短歌界の一部にあり、反論が書きかけられた、という話が私には伝わって来たが、結局は何一つ現われなかった。今ふりかえってみても、言い直さねば、と思うところはない。それは岩波菊治と言う人間への、私の思いの変わることがないのと同じである。私の文章にひとところでも岩波菊治を貶める個所があっただろうか。

岩波菊治の短歌歴

後年、ブラジルの移民短歌の方向づけの役割を果たした岩波菊治は、一九一八年、二十歳の時に短歌結社「アララギ」に入会、島木赤彦に作品を見て貰うようになった。後で見るように、赤彦の短冊などをブラジルまで持って来ているくらいだから、かなり近しい接触があったのかも知れない。

「アララギ」は一九〇八年に創刊された短歌誌の名で、その源流は、明治三十年代初め頃に俳句と短歌の革新を目指した正岡子規の主張にあるが、それは一口に言えば、短歌を作る上での写実・写生を旨とし、とかく従来の短歌（和歌）に多くみられた〝飾り気〟とか美文調を徹底的に排し事象の真実の表白に徹しようとするものであった。

島木赤彦は岩波菊治と同じく長野県の人で一九一〇年代の初めから二十年代にかけて「アララギ」の編集に携わり、一九二六年三月に逝去するまで、「アララギ」の中心的な存在だった。

岩波菊治が「アララギ」に入会したのは二十歳の時だが、その当時の作品の幾つかを彼の死後一九五九年にブラジルで刊行された「岩波菊治歌集」から拾ってみる。

一　ぬば玉の闇の畷路独り行けば
　　水鶏淋しく水田に鳴きぬ

二　守矢嶺に夕日あかあかうすづけば
　　稲の葉末に露置ける見ゆ
三　一すぢに乙女も知らずはたとせの
　　月日をあだにすごしけるかな
四　垣間見に君の嫁ぎ行くを眺めけり
　　コスモスの花咲ける秋の日
五　空青み蜻蛉はしきり飛ぶこの日
　　君ははろばろ嫁ぎゆくかも
六　夕まけて野良ゆ帰ればひむがしの
　　岩山出づる月はまろろし
七　夕闇の迫り来れる納屋ぬちに
　　われひたすらに苫をあみをり
八　秋雨はしとどに降れば日もすがら
　　納屋に籠もりてわらじ作りす

「岩波菊治歌集」（以後「歌集」）は、その死後ブラジルで収集し得た作品三千数十首（「アララギ」、「椰子樹」及びブラジルの刊行物に発表されたもの、歌帖に残されていたもの）の中から一九九六首を採って編集されたものだが、一九一八年度分一三八首、一九一九年度分一一四首となっているのをみると、かなり多作だったことが窺われる。「アララギ」会員となって、作歌への気持が高揚していたのであろう。

作品に、これという独自な個性やひらめきが見られる訳ではまだないが、二十歳という年齢にしては、若さか

ら生じ易い浮き上ったところがないのは、資質によるものか、師として敬慕した島木赤彦の影響によるものだろうか。語彙も豊かである。赤彦は作歌における「鍛練」いうことを唱導した人で、「歌の道は粛（つつ）ましく寂しい一筋の道である」（「歌道小見」）と言っており、また「……その相触るる状態が事象の姿であると共に感動の姿である。左様な接触の状態をそのままに歌に現す…「。この表現の道を写生と呼ぶ」という文章もあり、「寂寥相」がその短歌作品が追求する窮極の姿であったとも恩われる。赤彦にあっては作歌は「道」であった。

みずうみの水は解けてなほ寒し三日月のかげ波にうつろふ

信濃路はいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ

のような端正な、格調高い作品が、当然のことながら岩波菊治の若い清純な心に、ひたひたと沁みて行ったのであったろう。

③は、何に「一すぢ」であったのか明らかでないが、若い心を賭けた一事があって、対象（愛の）とする乙女を得ることもできず、いたずらに年月を過ごしてしまった、という、純朴な青少年の誰もが持つ心情であろう。だが心を寄せていた乙女はあったので、④⑤はその乙女が嫁いで行った日の、作者の落ちつきのない姿と淋しさがにじみ出ている。

岩波菊治は・一八九八年十二月、農家の三男として生

まれている。出生地長野県上諏訪郡上諏訪市は、島木赤彦の生まれが長野県諏訪郡上諏訪町とあるところからみると（筑摩書房「現代日本文学全集・若山牧水　島木赤彦　中村憲吉　木下利玄集」）おそらく同郷といってよいのではなるまいか。

生家がどのような規模の農業を営んでいたのか不明だが、学歴は尋常小学校卒業だけであるところから推測すると、それほど豊かな家だったとは思われない。後に「第三種講習」を修了して、小学校準教員の資格を得ている（歌集年譜）から教育者を志していたのかも知れないが、教職に就くことなく、家業に携わっている。作品①②⑥⑦⑧には、どのような農業の明け暮れであったかを、窺わせるものがあると言える。

この時代の、家族を詠った作品には

榾燃ゆる炉ばたに吾と夜業する吾が父上の髪は白しも

還暦の齢に近き父なれど子の病む故に田打ちなどする

脊髄の病重りて歩むこと難しと言ふ吾が兄は痩せたり

老父とわれいさかひぬ声あげて父は泣きつつさとしたまへり

ねむたきをこらへて日暮弟の明日はく草鞋作らねばならず

などあるが、作品でみると、長兄は病みがちであったらしいし、妹の病とその死に際してのものもある。一九二三年、力行会の会員になった。長野県は早くから海外

移住に目を向けた県の一つだが、信濃海外協会は一九二二年の創立であるから、岩波菊治の生活の周辺にもその風潮は伝わっていたであろう。また力行会の第二代会長永田桐が同県諏訪郡豊平村生れであり短歌をたしなんで島木赤彦の添削を受けていた（永田稠歌集「新墾」）と言うから、或いは岩波菊治もその辺りからの接触が生じ、ブラジル移住に関心を持つようになったのかも知れない。キリスト教への入信も、永田稠との接触と無関係ではないのではないか。

その永田稠の歌に　これの世に未だあらざるうまし国を建てようからやまと国人　やまと人の新墾の村つづけかしアンデスの山アマゾンの辺に（以上改造社刊「新万葉集」）などがみられる。また「力行農園」がアリアンサに創設されたのは一九二四年であるからその辺りの情報は岩波菊治のブラジル移住への決心を強く促したのかも知れない。歌集「新墾」の永田稠年鑑によると「アリアンサ第一回入植者出発」は一九二五年となっているが、岩波菊治はその七月出発の第一アリアンサ先発隊の一員として、一区竹村安定の土地へ四年契約者（おそらくコーヒー栽培だろう）として入っている。

宮本とめと結婚するのは一九二四年で、菊治二十六歳である。当時の農村の青年の二十六歳での結婚は普通よりやや遅いのではと思われるが、これはブラジル移住のための〝必要〟上のものであったことが、一九五三年一月発行の「椰子樹」第三十三号「岩波菊治追悼号」（以

下「追悼号」と略稱）の穂屋野潔（同郷の友人）の文章「新婚時代の岩波兄」によって窺われる。とめの方が一、二歳上であったようだ。

新婚時代の作品を幾つか見ておこう。

吾妹子をまきてしねれば長さ夜も束の間のごとおもはゆるかも

生家（さと）に帰り心安らかになれるらし妻のおもわののびやかに見ゆ

叢に夜すがら高き風の音妻の家居にはじめていねし

一九二五年は渡伯の年だが、菊治は妻をつれて安房の海辺を旅行している。しかしこの旅行は若夫婦の楽しい旅というよりは、何か容易ならぬ病気をして、診察療養のためのものではなかったろうか。前記穂屋野潔の文には「渡航を前にして急に肋骨カリエスを病んで入院…」とある。

妻を率て遠く来にけり丹椿の花さはに咲く安房の国べに

うち揚ぐる浪の飛沫に濡れつつも少女のごとくよろこぶわが妻

などの作と共に

言あらげ妻を叱りぬ病みぬればかくも心のとがるものかや

一椀の粥さえ喉をすぎ難し梅干し副へてやうやく食す

も

幾夜さの看護に妻は疲れけむ枕はずして眠れるあはれなどがみられる。

さてこのような作品を生む状況の後で、いよいよ〝出日本〟となる訳だが、移住を決心する前後の作品というものが全く歌集には収録されていない。「アララギ」での修練も七年に達し、齢二十七歳。故郷を遠く離れて海外に生活の場を求める者としての感慨はなくてはならない筈だが、

外に出でて歩むことをば許されぬ幾日ぶりに立つひた土（土に の欠落か）

という歌が

束の間を結べる昼の夢にして故郷なる父のおん顔を見し（船中）

のすぐ前に掲載されているところから想像すると、病が癒えて間もなく乗船したのかも知れず、闘病生活と移住準備への気がかりで、歌を作る余裕がなかったのであろうか。

なお渡伯途上の作には次のようなものがある。

国離る思ひぞ探しアフリカの海の上なる七夕祭

赤道を越えて幾日夜毎に高くなりしよ南十字星

鳴きたつるいとどのこゑはふるさとの信濃の秋をそぞろ思はしむ（ケープタウン）

ここまで来れば、信濃はもはや「ふるさと」であった。

「ブラジル歌壇の父」と呼ばれることもあった岩波菊治の移住の前にも、もちろん移民の間で短歌は作られていた。おそらく短歌は俳句と同じように、移民の渡来と共に持ち込まれていたであろうが、それを発表する方法はなかった。一九一〇年代の後半に至って、幾つかの邦字新聞が刊行されるようになって、初めて発表の場ができたのである。

特に短歌の場合は、笠戸丸移民以前にブラジルに渡っていた鈴木貞次郎（ペンネーム「南樹」）は日本ですでに、与謝野寛・晶子主宰の文学誌「明星」に拠って作歌していたという話が伝えられており、邦字新聞の創刊のかなり前にサンパウロ市居住の同好者と語らって回覧誌を作り、短歌作品を載せていたと言われ、その頃の作という次の一首が記録されている。

山羊の乳をしぼる娘をぬすみ見つイペの花みつ吾ただならず　（一九一〇年代前半）

発表の場や機会を持たなくても、日本人は五七五或いは五七五七七の韻文に接し親しむことは多かったのだから、移民達の中には、ブラジルの生活が始まると同時に、その日その日の思いを短歌の形で、何かの紙切れにでも書き記して置く者はあったと想像される。従って、新聞が発刊されるようになると忽ち投稿されるようになる訳だが、投稿された作品には、そのような紙片に書き止めていたものもあっただろう。

邦字新聞の主宰者らが「移民文芸」に深く理解を示し

たことが幸いして、あらゆるジャンルのものが作品水準をあまり問われることもなく活字になるようになったのであるが、この「活字になる」ということが、移民たちの創作意欲を刺激したことは、想像を超えるものがあったのだった。

ここで、岩波菊治渡伯当時前後の作品の姿を見ておく意味で、一九一〇年代から二〇年代の、比較的に移民の心情を濃く漂わせているものに焦点を絞り邦字紙誌発表作品の中から紹介しておく。(歌の下の数字は一九××年を示す。カナ遣いは「新」に直した)。

一　常夏の国の初日は雲深くいかづちの音もとどろきにけり　１７　大野　綾子

二　その昔ブグレ住みしと人の言う山開かれぬ同胞の手に　１７　華潮

三　悪相の黒奴の顔にほほえみの見えてほのぼの明け渡る空　１７　孤独生

四　更け行けど暑さは止まず南球の夏十二月の工場の中　１７　同

五　この愁い消すべくもなし木によりて自ら捨てし心を笑う　１８　鈴木　南樹

六　こっそりとイペにとまりしトッカノは待てども鳴かず秋たそがるる　１８　同

七　珈琲の木の間かくれにくれないのレンソを見ては汝を思える　１９　奇山生

八　一条の莨の煙にまつわれる異国の夕の淋しさこころ
　　１９　　まさみき

九　二た月の航海おえし喜びかさざめきあえる船舷の群
　　れ　１９　　翁長　助成

十　おもたげに信玄袋背負いたる少女をなぶる熱帯の雨
　　１９　　同

十一　故里の生活難に追われたる男女の淋しき姿　１９
　　同

十二　古里の父を養うてだてなみ心ならずも消息を絶つ
　　２０　　同

十三　錦きて帰るを待つとのたまいし母のおもかげまざ
　　まざと見ゆ　２０　　ゆき子

十四　臨終の母の思いは一万哩隔てて吾の上にありけむ
　　２０　　同

十五　男の子ならば水夫ともなりて奥津城の土古りぬ間
　　に帰らむものを　２０　　同

十六　水の如き粥すすりつつ植民の成功急ぐを思うて悲
　　し　２０　　華潮

十七　南国の極暑のなかに鍬をとり淋しく生くる我を悲
　　しむ　２０　　同

十八　我一人フォイセを杖にたたずめば雪の如くに木綿
　　散り来る　２１　　川の　村人

十九　薄給の身をかこちいる故郷の友を安住のここへ呼
　　ばまし　２１　　仲間　美登里

二十　決断の鈍き男がつくねんと思い煩い立てる山畑

２１　まさみき

二一　生きねばならぬ己が家族を思いつつカマラーダする朝を出でゆく　２１　みどり子

二二　牛車逐う人はいゆきぬきしる音遠くなる野に陽炎の立つ　２１　みどり子

二三　渡伯して三年経にければ妹の草取る術に馴れていとしも　２１　山田　紫川

二四　土の香のたかきを愛でぬ生活の尊さを知る雨後の朝よ　２２　今井　白鴎

二五　くろぐろと蜀黍（ミーリオ）の葉波は丘ひろらゆたかに暮るるブラジルの秋　２２伊藤　掬

二六　五年はふるさとごとをくりつつも異郷の土に慣れしこのごろ　２２　同

二七　汗みどろの疲れしからだ鍬の柄に凭れてしばしみつむる太陽　２２　くれない生

二八　手塩かけし綿の花見事に咲き出でぬ稲の垂れ穂の色深き頃　２２　黒　猫

二九　愛し児の墳墓（はか）訪えば今日もまた十字架の上チコチコの啼く　２２　虎吼山人

三〇　サントスの港は嬉し日の丸の旗翻えし汽船（ふね）の入り来ぬ　２２　里美　はる

三一　安らかに眠れるごとしコロニアの戸毎に人の気配もなくて　２２　松風軒

三二　わが小ささされど尊き生を托（よ）するこのうまし国永久に栄あれ　２２　中島すみ子

三三　いと深う我ほど君を思う人あらばその時我を捨てたまえ　２２　ひろ子

三四　わが帰国楽しみ待ちし父は逝きさすらいの子は父となりたり　２０～３０　東野　暁風

三五　焼山の灰押しのけて二三寸あたま拾げし早蕨あわれ　同　同

三六　放浪の子は今日もまたふるさとの母慕いつつ夕陽見て居り　２２　福寿生

三七　うすぐらき大森林を貫きてゆたかに流るるピラシカーバ河　２２　魯毛生

三八　余念なくむしる珈琲の手をとめて牛ほゆるきけば昼近さかも　２３　川上　春吉

三九　コロニアに豚よぶ声のきれざれにきこえて秋の夕しずかなり　２３　川の村人

四十　妻も出よ子も出よ犬も猫も出よカフェの初実今日は摘む日ぞ　２４　児玉　正夫

四一　すぎにし日重なりし今は故郷のひとの面影忘れそめたる　２４　富岡　清治

四二　リオデジャネイロなみうちぎわにおりたちて「日本」と砂に書きても見たり　２２　同

四三　手向くるは同じ香のする菊の花異国にねむる君が墓前に　２４　同

四四　マラリアの熱にうなされうめきいし時のすぐればあとのさびしき　２５　里美　はる

四五　見渡せば綿の畑に草伸びて夕陽痛く眼に浸みにけ

り　２５　同

四六　南米の鬼と消ゆらんわが心きかさば母の病みもや
はする　２５　三太　世四

四七　山小屋の椰子の壁より流れこむ月の光に我が身は
冷えぬ　２５　松風軒

四八　棉摘みて今日も暮れ行く冬の日を枯木によりてな
がむる人妻　２５　鳥路資

四九　センセンのないて飛び去るカンポ中バルバチモン
よ汝も淋しき　２５　同

五〇　しとしととかや葺き屋根をうつ雨に牛車の音の遠
ざかりゆく　２５　前田　露路

五一　百頭の牛ひきて行くバイアノは水乞うひまも唄え
り恋か　２５　りら

五二　つまらないつまらないとくちぐせの若人は今日も
セルカの木を伐りており　２５　同

五三　ブラジルに六とせは逝きぬさはあれど我がスザン
ナを得たるよろこび　２６　紅楓生

五四　二十越して鍬とるすべも知らざりし身はブラジル
の農夫となりぬ　２６　三太　世四

五五　名も知らぬ鳥啼き去りし夕ぐれを柩を送りて帰る
山みち　２６　松風軒

五六　鍬取りて野もせに立てば生きがいのある身も軽く
日をあうぎけり　２６　鈴木　南樹

五七　情せまり倒れふしたる汝が上に手をのせも得ぬ吾
卑怯者　２６　同

五八　夕されば灯を入れしコジンニャにケイジョの匂い
漂よいにけり　２６　　Ｔ生
五九　先ず父の疲れを聞いて日本の昔噺せがむ子を抱き
しむる　２６　　久雄生
六〇　トントンと籾つく音の聞ゆなり時雨降る夜の同胞
の村　２６　　暮山人
六一　いだく子と共に初日を仰ぎつつ異郷の地にて七歳
の春　２６山田　禪單
六二　故国などさまで恋しく思わずと僅かに言いて口を
つぐみし　２６　　同
六三　大いなる木のきり口のみづみづと見えて淋しき開
拓の暮　２６　　同
六四　ぬれそぼつ青葉の中に身をおきて一人淋しく故国
したいぬ　２６　　耀　子
六五　山桜育たぬ国はなかるべし移し広めん御国のため
に　２７　　愛月
六六　正月に椰子の葉風をきくもよし梅咲く国を想うも
うれし　２７　　鈴木　南樹
六七　秋なれば夜毎に深かむ霧の中に灯火黄なりサンパ
ウロの町　２７　　すみ子
六八　緋の翼はろらにかけるアラーラの声あざやかに森
は晴れたり　２７　　同
六九　行き行けばパウダーリオの番鼻をうち森のうれい
は吾を囚うる　２７　　同
七十　白き牛黒き牛など草原に動かず暮るる汽車走りつ

つ　２７　　富岡　清治

七一　うら庭のバナナの枯葉かき集め足あたりよき草履つくれり　２７　　野崎　舟人

七二　朝戸出のむそじの父も路すがらボンディア一つ言い覚えけり　２７　　同

七三　山峡の痩せ地をよりて拓きゆく飽くことを知らずアレモンどちは　２７　　同

七四　野は広く空また広しセルトンに三里歩めど人に会わざり　２８　　輝生

七五　夕ばたけ鍬を止めざる親の手を見入る子供に黄昏深し　２８　　暮山人

七六　ルビオン　ジュニオール朝つきて日の暮るるまで汽車待つ徒然　２８　　正子

七七　此処に其処に誰が子が書きしあとかたぞ日本字を見て懐しと思う　２８　　同

七八　轟々とあたりのマットゆるがして火の粉吐きつつ夜の汽車は進む　２８　　モク生

七九　この国に来て早や六歳唐黍をかぐ手の指のかたくもなりぬ　２９　　大花きみの

八〇　つつましく土に親しむ一人をめぐりて鳴ける昼のこおろぎ　２９　　河南　節子

八一　録雲は遠さ牧場に小羊の群れ居る如く空に浮かべり　２９　　かつら子

八二　もろこしの枯葉のもとにそだちたる葵さき豆の脹らみのよさ　２９　　塩月修一郎

八三　暮れ迫るひろ野の涯に人動き空の下びに野火燃えさかる　２９　同

八四　馬とわれの影を夕日はうつしけり今耕やせる畑のうねりに　２９　遠山　湍水

八五　おちこちに白きパンノの見えつつも稲打つ音をきく日和かな　２９　徳尾　渓舟

八六　五頭引の馬車ゆるやかに蟻の巣の高く積まれるカンポ道ゆく　２９　遠山神刀

八七　ついに身を酒にそこないこの国にみまかる人の身の上ぞあわれ　２９　暮山人

八八　ひもすがら棉摘む妹子の黙しおれば貪しき吾のややにうとまし　２９　松本高信

八九　待ち侘ぶる母の手紙の音たえて堪えかぬる身に移民つきたり　２９　水木潤一郎

「九一〇～二〇年代には右に抄出したような作品が発表されていた。文芸としての水準ということではいろいろ論じることができるだろうが、①⑤⑧⑬⑮⑯⑳二一、二三、二九、三三、三四、三八、三九、四十、四二、四四四八、五〇、五五、五九、六二、七一、七三、七四、八〇、八二などにはかなりな洗練度もみられる。特に①⑮⑯二一、二九、三八、三九、四十、四二、四八、五〇、五九、六二、七三、七四、七八、八二は素材の切り取り方に秀れたものがあり、表現も的確と言えるだろう。この時代の移民生活の中からでなければ詠むことの出来ない

作品としての強味も持っている。ブラジルの日本人移民の短歌は、初期にあっては〝郷愁の短歌〟であったとは、よく言われた言葉である。

もちろん、移住後の異なる環境下の生活の中で、郷愁にさいなまれない者は少なかった筈だから、郷愁をそのまま言葉として連ねた、感傷的作品も多く作られた。いまふり返ってそれらを読むと、故郷恋し懐しの思いが表面的に流れている幼いものも少なくはないが、一万には、以上あげたような、移民の現実を直視し、率直切実に、〝異郷〟と言う環境におかれた己れをはじめとする移民というものの実体を捉えようとした作品群もあるのだ。「感傷の勝った郷愁の文学（文芸）」と、甚だ簡明ではあるが、安易に過ぎる断定・評価には与する気持ちになれないのである。それは何の気なしにいわれたものだったのかも知れないし、後に「写実」が尊ばれるようになってから、少し貶めての言葉であったかも知れないのであるが……。

当時の短歌を作る者たちには、短歌創作上の理論的拠りどころなどを持っているのはいなかったのである。いささか心得ていた五七五七七のリズムに、自分の情感を託したのである。

秀歌を、という意識などもなかっただろう。

岩波菊治の渡伯は前記の如く一九二五年であるが、「歌集」にはこの年の移住後及び翌一九二六年の作品が一首も収録されていない。この歌集は収集し得た三千余首の

うちの約二千首をもって編まれているのだから、切り捨てたものの中には或いはあったのかも知れないが、今は調べる手だてもない。一九二六年度の作品が一首も歌集に収載されていない点について、歌集出版後「椰子樹」の一会会員（光田寿男）がその理由をとめ夫人に質してみた折、「入植した当時病気した事があるから、そのためではなかろうかしという答がかえった、と記した未発表の文章が私の手もとにある。

この間に、一首の歌も作らなかったとはとうてい思われないのだが、覚悟の移住とは言え、想像外の生活環境の異なりと厳しさとで、心を作歌に向わせる余裕を持ち得なかったのだろうか。また、病気というのは過労から来たものだったか。頑健な体つきだった一方で、重い病を患うこともしばしばであったことが、全生涯を通じての作品から感じられるのである。

一九二七年　二十九歳

いかづちの雲にかも似て……

以上のような理由で、岩波菊治の移住後の作品は一九二七年以後のものとなる。「歌集」にあるこの年の最初の歌は

①いかづちの雲にかも似て遠空に山焼く煙高くあがれり　で、次いで

②澄み渡る朝の林に人むれてさやかにきこゆ斧のひびき
は

がある。いずれも原始林開拓時代の移民達の誰もが感動した情景であって、①遥かに上がる巨大な山焼きの煙に一種の戦きさえも覚えたのであったし、②爽快な斧の音の響き合いと、同時に伝わって来る多勢の〝山伐り人〟たちの話し声は、おのずから無限ともいえる希望を、開拓に挑む人々の胸に抱かせるものであった。いわゆる既成コーヒー耕地でのコロノ生活を経ず、開拓前線の地で直ちにこの情景に接した作者にとっては、感動は胸底（むなぞこ）をゆすぶる体（てい）のものであったかも知れないのである。

③あかときの山は静けし焼あとに烟は低くなびかひにつつ

④山焼の時も過ぎにし此の頃やさやかに空の澄み渡るなり

⑤たまさかの月夜を清み鳴く鹿の声とはるなり家居ま近く

⑥目の及ぶ限りは遠くつづきたり起伏はるけき珈琲畠

③の「山」は、山や川の山ではない、開拓地の原生林であり、原生林を伐採してこれから開拓しようとする大地のことである。森林を伐採して何十日か乾燥させ、火を放って焼くのであるが、その焼け具合の善し悪しが、後の開拓作業の難易に大きくひびく。焼けが良ければ、

倒された樹木の小枝や葉或いは蔓は灰や煙と化してしまうからそれだけ焼け跡の「枝打ち」作業などの手がはぶける訳である。

この歌は業火のように凄じかった前日の山焼きの火もうそのようにあとかたもなく、焼け山の朝は静まりかえり、ただ地表に沈んだ残りの煙が漂っている情景である。日本ではみることもなかったであろう壮絶で手荒い開拓の第一歩の山焼きと、その翌の日の早朝の異様なほどの静けさが、心を打って来る。いよいよ土を耕す一歩への、心のたかぶりもあっただろう。

山焼きの季節は、煙が天地に充満する。太陽も、終日光を放たぬ赤い円である。そのような季節がようやく去って、ものを蒔く頃になると空が澄んで来るのである。

④には、そのような季節への喜びが詠われている。

作者の生まれた信州は山岳地帯の占める割合が大きな地方ではあるが、それでも人家近くまで鹿が出て来て鳴くということは当時といえども、余程の山奥ででもない限り、なかったであろう。それが、たまの月明の夜に、家居に接近して来てよく透る声で鳴いたのである。

開拓地では鹿が畑を走り抜けることも多かった。不幸な鹿は、開拓者たちのこの上ない馳走にもなったのだった。

⑤の作品において、作者が詠っているものは、単なる明月と鹿の声の取り合せへの興味といったものではなかっただろう。

⑥ここに詠われているコーヒー畠は、自らが栽培して

いるものばかりではなかった、と思われる。既に記したように、岩波菊治は第一アリアンサ入植の先発隊の一員であったから、そして他者の土地へコーヒー栽培の契約者として入ったもののようであるから、これはおそらくこの地方での他者の既に成育しているコーヒー畠を含めて眺望しての感慨であろう。そして、自らの未来を思い、目前のコーヒー畠の雄大な景観に胸のふくらむものがあったと想像される。

⑦折々に猿も出づる山中に妻と我が住む家建つるなり
⑧おほかたは人の住むべく整ひぬなべて我が手に成りしこの家
⑨荒建の家にはじめていぬるなり寝つかれぬままに妻に物言ふ
⑩年月のめぐるは速し吾が蒔きし珈琲の木の蕾持ちにける
⑪わが蒔きし珈琲の木の伸びにのびてうれしきかなや蕾持ちにけり
⑫涼しげの日本の浴衣うちほぐし妻は作るも吾子の産衣を

原生林の開拓を始めるに当っては、まず住居を建てねばならない。時には猿の群が出て来るような山中であり、しかもすべて自らの手で建てるのである。全くの粗末なものではあるが、まあまあ住めないことはないくらいに

は整えることができたのである（⑦⑧）。

荒建ての家とはどんなものであったろうか。普通原生林開拓に入った当初は、先入者がいればその家の納屋などに、自分の家を建てる前の何日かを住ませて貰い家建てに取りかかる。山林のことだから、柱梁など木材に不足はない。壁は多く椰子を割ったものをたてに並べ、シッポ（つる植物）で各々を固定する。土壁にするのは少々後になる。屋根は多くセードロ（材木の一種）を割ったもので葺いた。周りにサッペ（ちがやの一種）があればそれで。土をぬりつけてない壁は、椰子割りの間が空くから、風も入る。日光・月光も入る。粗末なパンノ（反物の布）を手に入れ風防ぎ用として壁の内側に張りめぐらすこともあった。

その家に初めて寝る夜は家建てでの疲れからか、或いは家を建て得た昂奮からか、なかなか眠りに入れない。何事かを妻に語りかけないではおられないのである（⑨）。語りかけたのは、明日の仕事への段取りについてであったか、開拓生活への希望であったか。或いはまた、生まれて来る者や故郷の肉親への思いであったかも知れない。山国の人にありがちな、いささかくぐもり声の作者が、荒建の家の闇の中で、眠りに入ろうとしている妻に話しかける姿が想像される。夫婦の睦言ではなかった。一九二七年は、移住後三年目に当る。入植早々に植えつけたコーヒーは、よく伸びてもう蕾を持った。コーヒー栽培で大をなすのは移民の最大の夢であったから、蕾は

夢実現への確実な証とも言うべきものであったのだ。それと同時に、移住後の歳月の過ぎ往きの迅速さが思われるのである（⑩⑪）。

⑫は既に身ごもっている妻が、日本から持って来た浴衣をほどいて、生まれて来るものの産衣を縫っているのである。涼しい模様の浴衣で作った産着を着る初子は、男だろうか女だろうか。移民たちは、日本から携えて来た衣類を、次々とほどいて日常の仕事着を作ったのであった。そこには、日本とつながるものが一つ一つ失われて行くことへの淋しさも、当然のことながらあったのだ。

⑬さむざむと朝霧こむる草の山異国人のをかしき唄ごゑ

⑭異国に住むちう心つゆ湧かず村人はおしなべて同じ国人

⑮常夏の国とはいへどマンジョカの葉の枯れおつる時となりにし

⑯澄みとほる夜鳥のこゑにいくたびか耳そばだてぬあはれ我が妻

⑰みごもれる妻をいとほしみ朝なさな深井の水を汲み上ぐるなり

聞き慣れない異国人（日本人以外）の唄声も節まわしも笑いを誘うようなものではあるが⑬、外国に住んでい

るという気持ちは少しも湧かない。入植者のすべてが同国人だから⑭というのだが、特に同国人というのも同じ日本人だというのとは、ここでは少し異なるのであろう。第一アリアンサは長野県人が主であったから、同じ信州人としてのより親しみがあった訳である。同郷人と共にある、という心弾みがこの歌からは伝わって来る。

同じ条件下で、ブラジルで新生活を始める場会、同県人というのはえてして移民としての〝成功〟への競争相手でもあるが、何といっても他県人に比べれば気心を知り合っているようで頼りになるところがある。だが一端感情的にこじれると、同県人同士は〝終生の仇敵〟化することもあったのだ。

十五　は、ブラジルは常夏の国と聞いて渡って来たが、やはり季節の推移はあって、葉が枯れて落ちる植物もあるのだ、という感慨。いうまでもなく、故郷信濃の秋の風物が面影としてこの歌の背後にある。

開拓地では、とても鳥とは思えないような叫び声を夜半聞くことがある。ジャクーと呼ばれる鶏大の鳥の声などがそうであった。そうした鳥の、夜半の思いがけない叫びを聞いて、何度も妻が耳をそばだてて不安な面持ちになるのである。そして怯える妻が憐まれて来るのだ⑯。

開拓初期は概して井戸は深く掘らなければ水に当らない。「深井」とはそういう井戸である。後には見様見真似で巻き上げ式を作るが、初めの頃は石油の空缶に荒縄をつけて水を汲み上げるので、一日の使用量を用意するの

は重労働であった。夫は畠仕事に出かける前に、身ごもっている妻のために水を汲んでおくのである。妻へのいたわりなのだ⑰。素朴ながら若い開拓者夫婦の姿が鮮明に表出されている。ちなみに「追悼号」行方正治郎の文章によると、当時の井戸の深さは十三、四メートルだったようである。

⑱鳴く虫のたぐひぞ多しそのうちに我が知れる名は幾許もなし

⑲家建つと地均ししたる土の上に移しかり鹿の足あと

ブラジルでも、土や草生で鳴く虫は多い。だが、日本でのように、声を聴いて何の虫と識別できるのは幾らもないというのが⑱、十九　は家を建てるべく地ならしした所へ、夜中に近寄って来たらしい鹿の足跡が、移しい数で残っているのを朝みての驚きである。いずれも外国生活初期の新鮮な感動というべき歌である。

⑳落ちつきて妻とわが住む家居をばうつしゑにして故国に送らな

２１故国恋ふる心のありといはねども眼に入る山の無きを侘びしむ

２２国遠く行きても歌を励めよとのらししみ言忘るべきかは　（赤彦先生を思ふ）

２３　先生のみ前にありて天井を二つ頂きぬ田舎人我は
２４　からだいとへ歌は励めよとみ手づから書きて給ひ
たりこれの短冊

⑳自分で家も建て、ようやく落ちついて来た様子を、写真に撮って家郷に送り、案じているだろう肉親達の気持ちを安んじてやりたい、というのであり、二十一　は、それほど強く郷国を恋い慕うというのでもないが、山の姿を見ることが出来ないのは侘びしい、と言っている。この歌の「山」は、先にあった開拓地の「大地」ではなく、郷国信濃の雄大な山岳であろう。巨大な日本アルプスの山々を朝夕見慣れて育った者には、単調平坦な起伏だけしか目に入らないのは、時には淋しく感じられたのである。

二十二、二十三、二十四は短歌の師島木赤彦との親しい接触を詠っている。

後年、短歌の岩波菊治、俳句の佐藤念腹とよく比較されるようになった、ブラジル俳句の先達は渡伯に際して師の高浜虚子から、「畑打って俳論国を拓くべし」という強烈な餞けの句を贈られているが、赤彦の弟子菊治への別れの言葉は随分柔いものだったようだ。しかし岩波菊治は師の「歌を励めよ」と言う言葉を終生忘れることなく、異国で生きる上での心の支えの一つとしたようである。師の応接に恐縮しながらも、農夫の健啖ぶりを発揮して天井を一つまで、師の前で平らげたのであった二十

三。そして目の前で書いてくれた短冊を押し頂いて師のもとを去るのであるが二十四、後年第二次世界大戦の際に、この短冊はブラジルの警察の手で他の歌帳、日記帳などと共に押収され、再び帰って来ることはなかったのである。

いずれ後に触れることになるだろうが赤彦自筆の短冊が喪われたことは、消し難い心の痛手になったのだった。短冊に書かれた赤彦の短歌は何であったか、記録されたものはない。

二十五　月に一度は便りよこせとたらちねの母はのらすも假名の文にて心では思っていても、開拓生活の厳しさもあって、なかなか肉親への便りも書けない。とても月に一度といったことにはならないのだ。便りがないと、母の不安は切実である。假名文字しか書けない多くの母の、たどたどと綴った手紙は、移民の誰もの悔恨の思いを誘ったのだった。

註　「岩波菊治歌集」の年譜によると「昭和二年（一九二八年）、アララギ同人に推さる」とあるが、昭和二年は一九二七年なのでどちらが正しいのか。また「同人」については「準同人」という話も残っている。なお作者自身の歌にはこのことにかんするものは残されていない。

一九二八年　三十歳

幼子を新墾原の・・・・・

①黒々と横たふ木々の見えぬまで新墾畑に稲しげりたり
②珈琲の植並青く見ゆるなり刈り乾されたる陸稲畠に
③珈琲のうねりの丘に沈む日の大いなりけり燃ゆる許りに
④もろもろの獣の住みし原始林拓き植えし珈琲の実を持ちにけり
⑤鳴きわたる夜鳥の声の鋭声さへ慣れて三年の山住ゐかも

開拓三年ともなれば、畠も形を成して行きなお焼け焦げた肌をさらして横たわっている木々を、おおいつくすほどに稲も繁るのだ①。②はその稲が刈られると、稲がおおっていた期間にもすくすくと伸びたコーヒーの若木が、美しい青葉の列を作って続いている情景で、稲の捻りも、コーヒーの伸びも、開拓者の心を潤し、弾ませる。広大なコーヒー園がうねり凄く大地の東に沈む太陽も、びっくりするはど大きく、そして真紅である③。

④⑤に詠われているのは一応開拓生活への目どがつき、環境にも慣れて来た安堵感である。

他者の土地へコーヒー栽培四年契約で入植し、コーヒーの間作に米を作るなどして三年間頑張った甲斐が

あって、岩波夫婦は念願の「我が土地」を購い得るまでになった。第一アリアンサの中央に近いところであった。三年間働いて、三十町歩の土地を持つまでになったというのは、かなりな〝スピード〟で夫婦の働きぶりを思わせるものでもある。

⑥新墾の畠に米作り三年経ぬ原始林購はん資本得んため
⑦三十町歩の原生林買い得しと告げまさば父母は如何に
　か喜ばすらむ
（註この場合「まさば」は明らかに誤りなので、歌集編集の整理段階で誤記が生じたのだろう。岩波菊治は作歌で文法の誤りは殆どおかしていない。「告げやらば」或いは「知りまさば」となるところだろう）。
⑧父母よ喜び給へ我が生まれし村の広さの山求め得し
⑨我が生まれし村の広さに相似たる山買ひ得たり三とせ
　の間に
⑩妻と共に三年働きて求め得しこの山の広さ三十町歩あ
　り
⑪珈琲を三年培ひし金をもて原生林買ひにけり我が住ま
　む所を
⑫我が山を拓かむ手だて思ひつつこの夜の更けを目ざめ
　我がをり
⑬新墾の畠に米作り三年経ぬわれも妻子も健かにして
　日本ではとうてい思いも及ばぬ広い土地をわがものと

し、そこへコーヒーを育て、財を成すことは移民すべての願いであった。三年間の、すべてに不慣れな生活環境の中の重い労働に耐えて、岩波夫婦はその希望の最初の地点に到達したのである。⑥～⑬の作品は、その到達へのプロセスと、喜びが手ばなしで詠われている。

三年間で、三十町歩の原生林を自分のものにしたと、郷里で息子の安否を気づかっている父母に告げてやったら、どんなに喜ぶことだろうか、というのが⑦であり、土地の広さはと言えば、驚くなかれ、自分が生まれた村の広さとほぼ同じなのである。三十町歩というのは換算すれば約二九万八千平方メートルになるから、アルケール（二万四二〇〇平方メートル）にして十二アルケール強となる。或いは三十町歩というのはおおよそのことで、十五アルケールほどであったかも知れない。当時は十、十五、二十アルケールといった広さを規模として多くが購入した。三十町歩の土地持ちというのは日本ではそうざらにあることではないから、これは故郷の人々に十分誇ってよい訳だった。

⑪の「我が住まむ所を」には、ブラジルに理想的な農村を作ろうという希望を抱いて移住して来た作者にとっての、万感の思いがこめられているだろう。いよいよその一歩を踏み出そうとしているのだ。まず己れの土地を理想的な農園に造り上げよう、という沸々たる思いが感じられる。そうして、自分の土地となった原生林の伐採や開墾のやり方や順序をあれこれ思案して、夜が更ける

までなかなか眠られないのである⑫。だが、幸いに、妻も、この地で生まれた初子も健やかなのである。ブラジル移住は、決して誤った道ではなかった。理想は徐々に実現しようとしているという、感謝の気持も生じていたのではあるまいか。力行会員として、コーヒー耕地のコロノならぬ、計画開拓の移住地への入植であり、もちろん永住と心を決めた地でもあったのだ。

⑭恙なく山伐り終へしうらやすさ吾子と列びて朝寝せりけり

⑮二番鶏の声ほがらかに聞ゆなり起きよ吾が妻いざ働かむ

⑯醤油も味噌も我が手に作りつつこの国住みも三年となりぬ

⑰我が家を建つべきところ定めんと繁山ふかくわけ入りにけり

⑱木をけづる仕事もややに慣れにけり我が家の木取り日毎なしつつ

⑲ほととぎすひねもす鳴ける山中に木をけづりをり我が家建つべく

⑳新墾の畠うちけぶり降る雨に濡れて蒔きおり陸稲の種を

いよいよ開拓の初作業で、気にかかっていた原生林の伐採もどうやら無事に終った。後はよく乾くのを待って

火を入れるのだが、山伐りのすんだ一安堵で（うらやすさ）、今朝はいつになく子と並んで朝寝してしまった⑭。そうかと思えば、⑮では、二番鶏が鳴いて夜明けも近いぞ、さあ妻よ起きなさい、今日も精出して働こうではないか、と心勇んでいるのだ。

山の仕事と家事、育児で妻が疲れていることはわかっているが、予定している開墾作業は一杯あるのだ。元気を出せ（出してくれ）という歌である。

作者は、元来頑健であったせいでもあろうが、実にこまめな性格でもあったようだ。普通は妻がやるような家のあれこれの仕事も、せっせとやったもののようである。醤油も味噌も、妻よりは作者が手がけて作ったようである。花などを培うことも上手で、念を入れてやる、という風であった。このこまめさから来る器用のため、開拓地で家を建てることなども、比較的手ぎわよく行ったもののようである。

⑲に詠われている「ほととぎす」とはどんな鳥なのだろうか。日本で「時鳥・杜鵑」と書かれる鳥がブラジルにいるとも思えないのでブラジルの動植物に詳しい橋本梧郎氏に質してみた。

氏の話では、日本のほととぎすとは種は異なるが、俗稱「アメリカ・ホトトギス」というのがブラジルにもいるから、恐らくそれを詠んだものだろう、とのことであった。ブラジルでは、「パッパ・ラガルタ（毛虫喰い、とでもいうか）」、南リオ・グランデでは「ククー」と呼

ぶのだそうである。どこか鳴き声がほととぎすと似ていたのだろうか。また「百舌」を詠った作もあるが、これはブラジルにはいないそうだ。別に「ほととぎす二つゐて鳴くそのひまに何鳥ならむその鋭声はも」という作もある。ほととぎすに似た声で鳴く鳥を、本物のほととぎすでないことは知りながら、あえてほととぎすという言葉を使って歌にしてみたかったのだろうか、といった想像も可能なようだ。

なお購った土地は第一アリアンサ七区で植え付けたコーヒーは五千株余であったという（「追悼号」その他）。

２１　わが家にはじめていねしうらやすさ板戸のすきゆさす朝日影

２２　倒れ木に日除を吊りしその下に昼餉食すなり妻子と共に

２３　ひとり立ちに立ち得し吾子よ嬉しからむうち笑まひつつ吾を見上ぐる

２４　一かどの大人のごとく振舞へり食器かかへて飯食す吾子は

２５　焼灰の中に一日働きし夕はいたく蹠ほてる

２６　黒こげの木を片づけてよごれたる身をば洗ふなりくり抜き風呂に

２７　軒並べ地主と吾と住まひつつつひにうちとけ物言ふ時なし

このような、妻と共の重労働の明け暮れの中で」生活は徐々に落ちついて行き、初児（長男）も健やかに育っていたのであるが、そのまな子が赤痢で急死するのである。

２８　亡き吾子を思へば悲し夕ぐれてひとときしげき蜩のこゑ

２９　幼子を新墾原のま日中に日々連れ行きし事を悔ひをり

購った原始林を拓く妻との共働きであるから、幼子も畑へ連れて行かねばならない。暑熱を幾らかでも避けるために、あり合せの布切れで日覆いを作り、その下で食事をし二十二、昼寝する子はその日覆いの下に置いて親は働くのである。初児の死を赤痢だったといっているのは「追悼号」の細川ったえさんの文である。この女性は、以前この子が食卓から落ちて脳震盪を起した時、九日ほど看病をしているのであるが、赤痢にかかった時は自分たちの仕事の事情で手が離せず、このことで「後々まで奥様に恨まれた事があります（註、看病に行けなかったため）」と記している。奥様とは岩波菊治の妻であろう。

細川さんの文によると、長男は「美ちゃん」と呼ばれていた。「美」は、どういう名前の一字だったのだろうか。岩披菊治の遺児（三女）に質したところ、字は知らない

が「みすず」という名であった、ということである。三女の語るところでは、父は子供の名は皆漢字は使わずひらかなだったということだが、それでは前記「美ちゃん」は何なのだろうか。それはとにかく、「みすず」と聞いた時、つと胸をうたれるものがあった。「みすず」は「信濃」の枕言葉「みすず（水鶏）刈る」から採ったものと解してはぼ間違いない、と思われる。生粋の信濃人である父親が、望郷の思いを託して、ブラジルで生まれた初児（長男）につけたものであったろう。二十八，二十九　は痛恨の想いが詠われていて、側々と迫るものがある。特に二十九は、新墾地のかんかんと照りつける太陽の下に、幼い子を連日つれて行ったことが、死に至らしめる原因になったのではないかと悔い嘆いているのだ。二十二で詠われているように、陽除けはしてあっても、それくらいでは、まだまだ軟らかい幼い肉体が暑熱に耐え切れないことは生じ得るのであった。トタン屋根であったために、日中に焼けた空気が夜中まで屋内に籠り乳幼児が脳膜炎で死んだ話もある。赤痢というのも、暑さで弱った体を一挙に襲ったのであったろうか。

開拓地では、病気のはかには栄養失調でも幼い者が死ぬことは多かった。時代はやや後になるが

秋たけし共同墓地のさややかな墓標を読むにすべて幼し　　清谷　勝馬

黒人の児等と並びて逝きし吾子の異国の土は余りに暑し　　河村哉太郎

人家なきこの山里に逝きし吾子箱ごと我は担ぎてぞ行けり　同

などの作もある。

ブラジル日本移民史料館建設の計画が進んでいた頃、私はソロカバナ線アルバレス・マシァード地方へ資料の収集に赴いた。そこにある「日本人墓地」は、今では日系社会唯一の日系人だけを埋葬してある墓地であるが、その御堂にある「過去帳」をみた時の感動を次のように書いている。

「……そこに見たのは移しい幼児の死であった。一枚一枚に一人の死者の名前と死亡年月日が書いてあるのだが、めくる毎に出て来るのは一歳だとか、二歳だとか、三歳だとか、殆どと言っていいくらい幼い死者なのである。そして長じているといっても二十代、三十代の死者が多いのである…。」。

人間の悲しみの中で、〝逆縁〟の死（特に親子の）ほど深いものはない、と言われる。開拓初期の移民ほど、この悲しみを多く味わった集団はないのかも知れない（戦争の場合を除いては）。

二十七　この歌を作ったのは、一九二八年代でも初期に属し、まだ自分の土地へ入らない時期のものであろう。作者は初めコーヒー栽培四年契約でアリアンサに入っているが、三年で土地を購い原始林の開墾を始めている。契約の放棄は地主とのこじれが原因らしいが、それは地主と契約者（四年契約、六年契約）との間で、常に起っ

た問題であった。因みに、岩波菊治が購めた土地は、エスピゴン（土地の背稜部）に接して居り「地区のまん中をコレゴ・ムッソリーニという小川が横切って流れ……」ていた（「追悼号」、行方正治郎）。

三十　板壁に師のおん歌を掲げつつマテ茶の濃きを注
　　ぎてまゐらす
三十一綿の花咲く日となりぬふるさとは今が桜の花
　　ざかりならむ

師は言うまでもなく島木赤彦。歌はどの作だろうか。そのことについて語るのを聞いたことはない。本物の茶はなかなか手に入らぬ時代だから、注いで供えたのは野生で自家製でも茶に代えることのできたマテの葉を焙じたものであった。赤彦の死は一九二六年三月二十七日であるから、勿論岩波菊治は知っていて命日かなにかに短冊を掲げて茶を供えたのであろうか。

三十一　の「棉」はパイネーラであろう。パイネーラの花はブラジルの花の中で色が最も桜に似ているものだ。遠目にこれが咲いているのを望み、移民は故郷の桜を偲んだのである。

一九二九年　三十一歳

いささかも肥料はせねど……

①我が山に移りて未だ日をたたねあはれ死なせぬ吾が一人子を

②現し身の命は悲しおのれ書く吾子の墓標に涙落ちたり

③道のべの高木を渡る風もなし真昼をい行く吾が子の柩

④おのづから湧き来る涙すべもなし吾子の墓辺に草むしりつつ

⑤亡き子ろの声かと思ふ夜ふけて軒近く鳴く鶉の声は

⑥我が家の装ひならば妻子らと写真とらむと思ひしものを

子を悼む歌は一九二九年にも続いているがそれはおそらく発表された時期の差から来ているのではあるまいか。これらの作品は、ブラジルの新聞歌壇に載ったものではなく「アララギ」に送られたものと想像される。時間を置いての追憶の歌ではない、切迫した父親の息づかいが感じ取られるからである。

①は、希望実現の第一歩である自分の持ち物となった原始林に移って来て、いざこれから一家の生活を築くのだという時に、初めての子を死なせたのである。「死なせ

ぬ」という言葉にこもる万感の思いを汲むべきであろう。

肉親の死を葬うための諸々の〝作業〟は、多く隣近所の第三者にやって貰うのが普通で、自らはなるべく手をかけないものだ。しかし開拓地ではそうはいかない。自分の子の、墓標の字を書かねばならない現身即ち生きている自分というものが「辛い」と言っているのが②である。墓標といっても山の生木を削ったものであったり、板ぎれの表面に鉋を当てたものであったりした。前出河村哉太郎の作品に見るように、柩（棺）の形のものも作り得ないで（もちろん買うこともできないで）、あり合せの木箱にそのまま幼児の亡骸を入れて、父親自らが肩に担いで行くようなこともあったのだった。

しんとして風もおさまった真昼、わが子の柩を送る数人の列が開拓地の道を行き③、共同基地に埋葬される。親は、新墓の周りに生えている雑草をむしり除りながら、涙を落すよりはかないのだ④。まだ原始林を伐り開いた荒々しさの残る中の共同墓地である。

わが子を、その荒々しい風景の中の共同墓地に葬って帰った夜の更け、軒近くまで来て鳴く鶉の、素朴幼稚な声を、死んだ子の声のように聞くのである。或る種の野鳥の声は、何か訴えかけるような、直截な韻きを持っている。それを自ちの思いに引きつけて感じ取る、人間の自然の情であろう。

開拓地の家が、人の住むのに些かでもふさわしい形を整えることができたら、記念の写真を撮ろうと心を踊ら

せていた。その写真の〝主役〟はもちろん開拓地で生まれた初子の男児であった。写真は単なる開拓生活の記念のためのものではない。かく新生活を築きつつあることを、ふるさと信濃の親たちに告げると言う、念願をもこめるものである筈だ。それが、子の死によって、空しくなった。孫の顔を親に見せてやることができなくなったのである⑥。

⑦わが齢たけしと思ふ中々に覚え難なきこの国の言葉
⑧ふるさとの行きつまりたる百姓と比べて思へば安けし吾は
⑨好めると言ふにあらねどふるさとのキネマと言ふを妻と見に来つ
⑩わが村に活動写真めぐり来ぬ幾年ぶりに見つるにかあらむ
⑪一人手間は忙しといへどわが村の区長の職に選ばれにけり
⑫生業は忙しけれども選ばれし区長の職やもはらつとめむ

開拓地で初子を喪うという悲傷事の中にも幾らかは自分の心を振り返る気持の余裕は、次第にできて来る。オレの頭も、齢がいってかなり固くなってしまったか、ブラジルの日常語さえもなかなか覚えられないではないかと患ったり⑦、この厳しい生活も、故郷の行き詰まって

しまった農業者のそれに比べて思えばまだしも将来への希望も持てる七、第一、周囲に気兼ねしなければならない窮屈さもない心の安らぎはある、と考えるのだ⑧。第一次世界大戦後数年間の好況時が過ぎると、日本はひどい不況に陥って行く。農村のそれは正にどん底状況で、小農家育ちの作者はそれを十分過ぎるほど味わった上でのブラジル移住であった。

そうしたところへ、年に何回かの「巡回シネマ」が訪れて来る。サンパウロ市（或いは地方の主要都市）には、それを営業とする「シネマ社」が幾つかあって、植民地の青年会などと契約して日本の映画を小学校舎で上映した。移民にとっては至上といってよい楽しみであった。それを妻と共に来て⑨、活動写真をみるのも何年ぶりのことだろうか、と感慨を催すのである⑩。

第一アリアンサに入植して五年、岩波菊治は自己の営農以外に、移住地という団体の運営に関りを持たされるようになる。理想家肌で農業に精励、移住地の公けの事柄にもかなり積極的な発言をしたらしく、また小学校準教員の資格も持っていただけに、自然に入植者の間で押し上げられる存在になって行ったのであろう。⑪、⑫にはそうして一つの区の長に選ばれたことが詠われている。特に⑫の「もはらつとめむ」には、作者の真っ正直さ、心の気負いが強く出ている。と同時に、理想的な移住地を作り上げねばならない、という責任感のようなものも窺

うことができるのだ。

⑬荒建ての吾家の中はさながらに真昼の如し光る稲妻

⑭山伐りの仕事をはりぬこの頃は涸れたる井戸を掘り下げてをり

⑮案じつつただにありしが我が山はただくろぐろと良く焼けにけり

開拓初期に建てる家は一時しのぎのつもりのもので、建築材料など満足にある筈もないから、すべて原始林にあるものが利用されるのだ。壁は、椰子の木の幹を縦割にして芯の部分を取り除いたものか、細い丸木を並べて、山の蔓か、あれば針金でつないで立てかけた形のものであるから、光も風もそのまま屋内に入って来る。稲妻が走れば寝ている家族も雑然と置かれている家具類も、瞬間的に昼のように照らされる⑬。

原始林を伐り払うと、地下水が深く沈んで行くのが普通で、今まで浅いところから出ていた井戸水が滴れてしまうのである。そこで山伐り仕事が終り、それを乾燥させて火を入れるまでの間の何十日間の時期に、井戸を掘り下げて、沈んだ地下水まで達しなければならない⑭。

伐り倒した山（原始林の樹木）全体が十分に焼けるか否かは、号の後の開墾作業の進捗に大きく影響する。焼けが良ければ一雨来ればすぐ蒔きつけのできる状態になり、暫くは（ひこばえ）も雑草も出ないが、不焼けにな

ると、片づけに何層倍もの労力が必要になるのである。だから「焼けしの如何は、開墾作業での最大の関心事なのだが、それが申し分なく、後には青いものが一つもない程に黒々と焼けたのだ。幸先が約束されたようなも」のであり、両手を上げて叫びたい気持ちになるのだった⑮。

⑯山住みも久しと思へくさぐさの菓子つくることもいつかおぼえし

⑰配り来し経済調査書にわが家の資本二十コントスと書き入れにけり

⑱飼料のミーリョ悉く尽きしかば惜しと思へど豚売りにけり

⑲穴掘りて吾が行く後より屈（かがま）りて生姜の種を植ゑ来る吾妹

⑳雨止みし背戸の畠に妻と采て南京豆の種蒔きてをり

２１　山畑に植ゑにし茄子二た年を生りつづげつつ未だ衰えず

２２　いささかも肥料はせねど畑っ物なべてみのれりうましこの国

２３　わが心足らへる如し珈琲の蒔付すみし畑見廻りて

自分の所有となった原始林を伐り拓いて畑に仕上げて行く心身ともに労苦の重い生活の中で、愛児を喪うとい

う打撃まで受けたが、それでも二年目ともなれば仕事も軌道に乗った感じになって来る。ブラジルでの暮らしも五年目である。

⑯で言っている「山住み」は、まだ周辺は原始林で囲まれているような、いわゆる「新墾」での明け暮れのことであろう。契約農期間の三年を含めれば、「山住み」も既に久しいという感慨も湧くのだが、その間に、開拓地で手に入れることのできる材料を用いて、いろいろな菓子を作ることも、いつの間にか覚えた。菓子を作ることを覚えたのが妻ではなく作者自身であったらしいところにこまめであった性格が出ているようである。

⑰の「経済調査書」というのは、アリアンサ移住地入植者の事業状況の調査を、移住地の事務所或いは村会（日本人会）などが行ったのだろうか。〃自然発生府的植民地においても、日本人会もしくは青年会が植民地の現勢を調査することはあったのだ。

その調査書に「資本二十コントス」と書き入れたのである。一九二九年当時の伯貨「コント」と日本貨との換算はどのくらいであったのだろうか。一九四一年刊行「ブラジルに於ける日本人発展史」によると、笠戸丸移民が着いた一九〇八年当時は一ミルレースが六十銭であったとあるので（「日本移民八十年史」四〇頁）これによって二十コントスを円に換算すると一万二千円になる。一コントは一千ミルレースであるから　６０銭×１．０００×２０＝１２０００００銭＝１万２０００円）。

笠戸丸移民から二十年を経ている時点での二十コントスの正確な円での価格はわからないが、一移民にとってかなりな金額であったことは間違いない。

「経済調査書」に資本二十コントスと記入した作者が、日本金にしたらなにほどになるのだろうかと思わなかった筈はあるまい。「書き入れにけり」には、ああ、かなりなものだぞ受いう心の弾みが窺える。

⑲⑳は新墾での生活のささやかな姿であり、二十一、二十二、二十三はブラジル讃歌、自らへの讃歌とみることができるだろう。四季がはっきりしている日本では、一年草の茄子が冬を越えて翌年までもなりつづけることはないだろうが、この国では二年目になってもまだ衰えすらみせていないのである二十一　。全く肥料というものは施さないのに、蒔いただけの畑の作物はきれいに稔った。何という褒むべき、良き国土であることか、というのが二十二　である。そうして、己が土地へ自らがコーヒーを蒔きつけ終えたあとを見まわっていると、ここまでやり遂げたか、という思いに心が満たされるのだ二十三。「足らへる如し」と言いながら、はっきりと強い自負が出ているのを汲みとるべきであろう。

２４　道の上に鮮やかに残る足型は今朝通りけむ貘の足あと

中国の想像上の動物貘は、奇怪な形をしていて人間の

悪夢を食うとされ、その名は日本人にもかなり親しい。だがブラジルの貘、アンタはむしろ愛橋のあるずんぐりした体型で、しかもアンタは「貴方」のあんたに通じるところから移民たちの間では笑い話の材料にもなった。棲息数が比較的少ない動物だったのか開拓地で姿をみる機会も多くはなかった。それが畑の中の道に、今朝通ったらしい足跡を残しているである。体躯に比べて脚裏は大きい方だから、足跡はいろんな想像を誘うのであった。

一九二九年十二月十四日付の日伯新聞（第六五〇号）は、紙上に歌壇を設け、岩波菊治を選者に依頼したことを報じる。作品募集の広告は次のようになっている。

「和歌募集　予てから本社文芸部の懸案でありました日伯歌壇も此の度アララギ派の岩波菊治氏にお願いいたしまして、一般同好者のために選者になって頂きここに生れ出ることになりました。広く皆様の投句を待ちます。規定　課題随意　締め切り毎月五日　一人二十句以内。宛名は日伯文芸部とする事。現住所姓名は明記の事。日伯杜文芸部」この広告はこの後二回（当時は週刊）続けて掲載され、計三回となっている。

岩波菊治が、それ以前の日伯新聞に自作短歌を発表していた形跡もみられないのだが、選者に推された経緯はどうだったのか。

アリアンサ移住地に短歌俳句を主とする文芸誌「おかば」が謄写版刷りで創刊されたのは一九三一年であるが、

移住地にはそれ以前から俳句の木村珪石（貫一郎）、佐藤念腹ら、後年のブラジル俳句興隆の中心的存在となる（特に佐藤念腹）実力者が移住しており、岩波菊治との文芸上の交流は深かったと想像され、文芸活動は既に緒についていたし、加えてその他の知識層も多かったから、岩波菊治の短歌上の経歴や実力は、いつとなく日伯新聞編集部に知られるところとなっていたのであろう。

一九三〇年　三十二歳

一年の乏しき収入（みいり）

日伯新聞一九三〇年一月一日号に、岩波菊治の「日伯歌壇に寄す」という一文が掲載された。

「小生今回日伯社の歌壇を受持つことになった。小生もとより浅学不才その任に非ざるべきを慮りつつ、尚本歌壇振興のため敢て引受けることにした。本歌壇をして歌道の道場たらしむべく、お互に作歌に精進したいと考える。

頃日、応募された第一回の作歌に接することを得た。始めての故か人も歌もすくなかった。

そして良いものもすくなかった。元より始めからすぐれたものを望むことは無理かも知れぬが、もっと一生懸命に作ってもらいたいと思う。それについて現在歌を作

りつつある人や之から歌を作って見たいと思う人のために参考にと思って少しく書いて見たい」。

と抱負を述べ、以下「歌を作す第一義」、「写生」、「歌の調子」、「単純化」、「表現の苦心」等の項目による記述があるが、これの内容は、文末に岩波菊治が「以上述べた所は小生のうたの師島木赤彦先生の説かれた所の幾分を伝えたにすぎぬが……」と断っているように、島木赤彦が一九二四年に発表した「歌道小見」の中の所説の幾つかを紹介したものである。「歌道小見」は会話体で書かれているが、岩波はこれを文章体に直し、僅かながら文の省略化も行っている。

そうして文末は「日伯歌壇の標準も、なるべく高いものにしたいと思っている。それ故出来る限り良い作を寄せてもらいたい。自信ある作を捨てられた場合でもあったら、どしどし言ってもらいたい。どこまでも真剣に論議したいと思っている」と結んでいる。

「日伯歌壇を標準の高いものにしたい」という考え方と方針は、新聞歌壇だけでなく後年創刊される短歌専門誌「椰子樹」の作品の選においても貫かれた。投稿すればたいていのものは活字になる、というのが当時の新聞発表作品だったが、移民生活から生まれる作品という状況への当然の思いやりはありながらも、選には厳正を期したのであった。そのためか「日伯歌壇は温か味がない」という声もあったのだった。

日伯歌壇の第一回発表は一九三〇年一月三十日付で、

次に作品の一部と選後評を掲げてみる。

八州男

夜な夜な鹿の来るらし我庭のマモンのかげにしげき足

跡　　ほか五首

信山

うららかに夏の朝日の照る丘に草なぎ倒す鍬光り見ゆ

ほか二首

評　恋のうた甘し、挽歌も平凡なり。

無名氏

風落ちて夕日に映ゆる牧場の静もる中に鶉鳴きをり

ほか二首

評　口語未だし。名を書き給へ

冬子

何鳥か鳴きつれすぎて夕せまる庭辺に遠く吾子をおもふも　ほか二首

評　子供のうた　むっとつきつめてうたはれたし

伊勢

移り采ていづくに遊ぶすべをなみうた作る事覚えけるかも　ほか二首

評　子供のうた前評と同じ、ペンで書き給へ。

若渕

幼子に新しき服着せながらひとりごちつつほほえむ我が妻　ほか一首

評　大いに勉強を乞ふ。

選者吟

乏しかる収入の中ゆ塩からき年越魚あがなひにけり
暮のうちに引きたる風は癒えずして遂にこやりぬ元日

二日

岩波菊治は、作品批評に多くの言葉は費やさなかった。移住地の生活の繁忙さからでもあったろうが、常に評言はぶっきらぼうな感じを与えた。指導力云々、と言われることがあったのも、そのせいでもあったろうか。生涯を通じて自己の歌論、作歌論を発表したことはなかったのである。紙上での論争もない。にもかかわらず、ブラジルの〝移民短歌〟の方向づけに大きな影響を及ぼしたのは、その質実な、写実を旨とする作風と、ぶっきらぼうなようでありながら他を包む暖かさがその人柄にあった故と患われる。たくむことを知らない人間性、と言ってもいいだろう。とにかく〝指導者的言辞〟を得意としない性格であった。

①日曜日にもがむと思ひしジャボチカバの実は尽く猿に食はれぬ
②只一つ生りしコンデ　フルッタの色づさゆくと日毎待ちをり
③日にけにつのる暑さや弁当に水うちかけて昼の飯食す
④マンガの実熟るるを見れば覚束なここに住みつきて六年となりぬ
⑤試みに蒔きたる小麦あなあはれ丈低くして穂に出で

にけり

⑥米売りて帰る夕べや吾が子ろにそこばくの菓子購ひ
にけり

⑦一房のバナナを切りて抱えつつ二百本ありと妻の言
ふなる

ジャボチカーバはいかにも南国らしい果物の一つだ。今でも栽培されているものは僅少であるが、当時はたいてい原始林の中に生えているのを、伐採の折に残したものであった。花梗（果柄）というものが殆どなく、樹の太幹の地に近いあたりから枝先にまでまぶれつく形に密着してなり、熟せば黒紫の果実（ぶどうの太粒大）は、核を包む真白い果肉が独特の甘さを持っていた。

そのジャボチカーバがうれて来たのを眺めこの日曜日辺りにもいでやろうかと思っていたのに、すっかり猿に先手を打たれて食い尽されてしまったのである。開拓地の農作業は繁忙で、日曜日と言えども午後の半日を休むのがせいぜいという生活だから、折角熟れたのを見ながら、日曜日までほっておいたのがいけなかった。余談になるが、猿はジャボチカーバのたべかすを蓄えて酒を作るという言い伝えがあった。①は多少の口惜しさを含みながらもユーモラスな思いの漂う作である。

②で詠われているコンデも、日本人には珍しい果物だった。樹もまだ幼く、たった一つなった果実が色づいて行くのを、毎日眺めながら待っているのである。開拓

地では、こんなつましいことも喜びの一つとなる。

④のマンガは、原始林に生えている果樹ではないから、自分の土地に入ると同時に苗を手に入れて植えたのであろう。古くから開かれた土地には、どこにでもある果樹で、成樹は食べきれないほど実をつけた。地上に落ちた巣は豚の好物だった。マンガは苗を植えて三、四年すればなり始めるのだが、その熟れた実を見ると、この土地(アリアンサ)に住みついてからもはや六年になったことがつくづくと思われる、というのである。「覚束な」という表現が注意を引く。これは開拓地生活に変りない自信を持つ者がもらす言葉ではあるまい。六年の生活の跡をふり返ってみて、何がなしに「心もとない」ものを感じ出していることを表わしているように思われるのだ。

岩波菊治は、実にこまめにいろんなものの栽培を試みた人のようだ。当時はまだブラジルの日本人問では珍しかったであろう生姜も植えているし(前出)、後に出て来るように蕎麦も蒔いている。

小麦の栽培は、一九九〇年代の現在ではその北限はミナス、ゴヤス、マトグロッソ州などにも及んでいるが、一九二〇～三〇年代は国の南方に位置して比較的冷涼な季節の多い南リオ・グランデ、サンタ・カタリーナ両州から、パラナ州南部の一部にかけて栽培されているに過ぎなかった。もちろんサンパウロ州にはなかった。

岩波菊治はそれを暑いことでは有名なサンパウロ州北西地方のアリアンサで試みに蒔いてみたのである。種子

は生えたが、品種が気候と土壌に適さなかったものか、草丈が十分に伸び切らないままで穂を出したのだ。蒔かれれば不適当な自然条件の中で、それなりに稔りを見せようとした小麦に、不憫な、という思い（いとしさ）を覚えたのである⑤。

⑥は収穫した米を責り、幾らかの金を得て町から帰る夕方、家で待つ子への土産にと、あれこれ取り混ぜて菓子を買ったのである。家で手に入る材料で菓子を作ることを覚えた父親であったが（前出）、町で買う菓子は幼い子供には宝物のようなもので夢を与えた。

畑へ持って行く弁当に、水をかけて食べることは、コーヒー耕地のコロノ生活でも常に行われたことである。暑さが厳しい季蘭には、ご飯に塩のきいたフェイジョン（豆）をかけたものに、木樽（コロッテ）の水をじゃぶじゃぶと注いで、〝流し込む〟といった形で食べるのだった③。木蔭に置いた木樽の水は、冷たいとはいえないまでもフェイジョンの塩気が加わりて来て、労働で渇いた喉に快かった。

サンパウロ州で栽培されるバナナは殆どが「ナニカ」種で一本一本の果も大きく、房も大きい。女の力では抱えきれない重さの房もある。ここで妻が言っている「二百本」は、一房についている果が二百本もある、ということであろうか。新しい開拓地では市場に出すための栽培は少なく総てが家庭用であったから、二百幹のバナナとそれになった二百房がある、ということではあるまい

（バナナは一幹に一房なる）。それにしても台湾から輸入されるバナナをたまに買う程度だった日本と比べて、二百本もの実のついた一房まるごとは、一家に豊かな気分を与えるものであった。妻はその一房を抱えて、心底からの悦びの声をあげたのであった（7）。

⑧乏しかる収入の中ゆ塩からき年越し魚購ひにけり
⑨塩からき鰛（註　鰯）を焼きてこの国に五ッ度目なる年となりにけり
⑩一年の乏しき収入（みいり）思ふとき嘆きの心無しと言はめや
⑪借金は何時返すべき当てもなし思ひあぐみつつ年暮れんとす
⑫コーヒーの値は下押して底を知らず蚕飼ひの事に思ひ及ぶも
⑬銭なくて経たる幾日の金策に行くべきあても今は無くなりぬ

一九三〇年の作品には、明らかに貧窮を嘆くものが多くなる。前年には「わが足らへる如し（前出）」という作品があるのを思えば急な変化である。

既に多く語られているように、一九二九年一〇月に起ったニューヨーク株式市場の大暴落は、一挙に世界的な経済恐慌を引き起したが、外貨獲得の殆ど唯一手段と言ってよかったブラジルのコーヒー輸出は、この影響を

受けて極度の不振に陥り無残な値下りとなった。だが、世界恐慌のほかに、ブラジル産コーヒーの価格下降の因は国内自体にもあったのだ。

一八八〇年代の後半辺りからの好況に刺激されてコーヒー栽培が急速に広がり、中でもサンパウロ州での生産量の著しい増加もあって、一八九〇年代の終り頃から一九〇〇年代の初頭にかけては、既に生産過剰を来たす状態になり世界余剰ストックの殆どをブラジルが抱えていた。政府のコーヒー防衛政策により、一九三年から景気は立ち直り、再び〝ブーム〟と呼ばれる状況が起ったのである。これが一九二九年の恐慌で息の根をとめられた形となり、コーヒー産業の不振は第二次大戦後の一時期まで続くのであるが、一九二八年には未精選コーヒー一俵七〇ミルレースだったものが、一九二九年には一五ミルレースまで下落し、さらに一九三〇年には八ミルレースまで落ちるのである。

コーヒーがようやく成樹の姿を見せ始め、年毎の収量増加が期待されるようになっていたアリアンサの開拓者たちに与えた精神的物的打撃は計り知れないものであったろう。もちろん、アリアンサに限らずコーヒー栽培による〝成功〟に夢を賭けていた移民の多くにとっても同様であった。農産物価格の下落はコーヒーだけではない。コーヒーが収穫できるようになるまでの年々の収入の支えだったミーリオ（玉蜀黍）やフェイジョン豆、その他の雑作物も一様に「地を払う」ほどに値下りしたので

あった。

コーヒーの値下りはなくても、移住地での家庭の経済はまだ豊かではない。しかしそれはそれとして正月ともなれば、心ばかりではあるが何か形をつけねばならない。日本では年越し魚といえばさし当りブリなどだろうがブラジルでは手に入れるべくもないから、塩漬鰯の缶を、乏しい金の中から買ったのである⑧。そしてその儀を焼きながら、ブラジルで正月を迎えるのもこれで五度目かと感慨を催すのだ（9）。三十町歩の土地を所有するまでになったとは言うものの、今のこの金銭的宜しきは思いがけないものであったろう。考えてみると、これほど農産物の値段が落ちてしまったのでは、一年頑張っての収入も些細なものだ、先行きはどうなるのか、ブラジル移住は、或いは取り返しのつかない失敗だったのではないか、と弱気も湧くのであった。不安と心弱りは、殆ど嘆きと言っていいほどのものであるというのが⑩である。初めての移住生活での挫折感と言えるものだったのではなかろうか。一九三〇年の歳末が近づく頃になると、岩波一家の困窮は極まって来る。これまでに借りられる金は借りてしまって、それを返す方策は全くない。繰り返してみても仕様のない考えをつづけながら年が暮れようとしているのであるが⑪、返す当てがないどころか、今は一文の金を得る方法もない、絶望的な状況になって来た（13）。

だがコーヒーの値はどんどん下って行ってとどまると

ころを知らない。コーヒーだけを営農の頼りにしていては、これはとんでもないことになるかも知れない、養蚕を取り入れてはどうだろうか、という一つの考えに到達するのである⑫。

養蚕は日本人にとってなじみの深い産業だった。特に長野県はその最重要中心地の一つであったから、信州人岩波菊治がコーヒーの大不況と言う想像もしなかった事態に陥って、養蚕のことを真剣に考えるようになるのは、自然の成り行きとも言える。

養蚕をやってみては、という考えを持って移住して来た者は笠戸丸組の中にもあったし、イグアッペ植民地の創設者青柳郁太郎も、州政府に頼んで桑の苗を入手したり、イタリアから蚕種を入れたりしている。専業としたのは一九一九年頃のパウリスタ線ガルサの日本移民数家族だった、と言う記録もあるが、アリアンサ移住地にはまだなかった。「蚕飼ひの事に思ひ及」んだ岩波菊治も、この時は考えただけに終ったのであろうか。養蚕にかかわる短歌作品はしばらくない。こうして

⑭不景気は人並み事と諦めつ乏しきままに年暮れにけり

の歌をなす。移住地の者の殆どが、程度の差はあれ、皆不況の中で貧しかったのである。

⑮不景気は極まりにけり村費さへ滞る人多くなりぬる

⑯酒を飲み煙草くゆらす金はあれど村費と言へど怠る

人あり

⑰納むべき金は集まらずひたぶるに憤ろしき心動けり

⑱ひたぶるに憤ろしき心湧けり村費滞る人多くなりて

⑲不景気はおのおの身にこたへけむ新年宴会は沙汰止みとなりぬ

⑳納むべき金は必ず払ふべし家の生計は苦しかりとも

２１　滞りし会費のことに思い及び余裕なき今の生計悔しも

２２　辞職せば心安しと思ひつつ村の役目にたづさはりをり

２３　村の掟審議なしつつ夜は更けぬ一番鶏の鳴き出でにけり

２４　わが事を貶せし記事を読みたりし夕べの床に眼冴えたり

２５　箱庭的主観とけなしし人の言の葉に我がこだはりて幾日経にけむ

２６　相別れ便りは聞かずすごしつる友の歌草しみじみと選ぶ

移住地の不景気はいよいよ深刻なものになって来て村費（移住地の日本人会々費であろう）さえも、払わない人が多くなって来た。子供の学校の授業料などもこの中に含まれていただろう。これはどこの植民地でも起っていたことであった⑮。ところが、見ていると酒を買い、煙草を買う金にはこと欠かないらしいのに、移住地自体

の各種事業を行うのに大切な財源である村費となると、払おうとしない人がいる。それも少ない数ではない⑯。

作者は理想家肌で篤実な性格であったから、酒は結構呑み、毎日煙草の煙をたてながら村費となるとなるべく払うまいとする他者に憤りを抑えることができないのである。而も作者は選ばれて一つの区の長となっている。村費が集まらないと、区内の諸行事も進められない、という責任も生じて来るのだ⑰⑱。

かくて、村の年中行事の大切な一つである新年宴会さえもが、それをやろうと積極的に言うものがいなくて、沙汰やみになってしまったのである。考えてみると、この不景気がこたえているのは自分だけではない、みんながそうなのだと思う⑲。

他者の村費不払いに憤りを感じていた作者も、ついに会費がたやすくは払えない状態に立ち到る。例え家計は苦しくても、村費だけは何としても滞ってはならない⑳と思っていた作者も、ついに何ヵ月分かの会費を滞ってしまうのだ。他者の滞納に憤ったことがあったのを思うと、この余裕のなさは悔しくてならない二十一　。

区長という役目を辞することができれば、幾らかは気が楽になるだろうと思いながら、責任感が強いだけにそれもならず、結局は村の仕事を先に立ってやっている、やっている限りは心身ともに開放されることはないと、とつおいつ考えている姿が二十二であろう。

これほど不況が深刻になって来ると、会則も一部見直

しをしなければならなくなる。だが余裕のない各々の生活からは、これと言う解決案も生まれて来ないのだ。ああでもないこうでもない、と議論をつづけて、一番鶏が鳴く更になってしまった二十三。

性格上、作者は村内（区内）のいろいろな事柄に対して、積極的な発言を行ったようである。純粋な農村出身であったから、移住地の将来、現在のあるべき形に、一つの理想像を抱懐していた。積極的な発言はそこから出たものだるが、目の前の深刻な不景気の中にある移住地の人々からは、いろんな批判が出るのも当然と言えた。「貶せし記事」はどんな発表機関に載ったのだろうか。移住地内に「会報」か何かがあって、それに岩波菊治を悪しざまに言う（貶す）記事が載ったのだろうか。とにかく、その記事を読んだ宵は、いろいろ思事めぐらして目が冴え、なかなか眠りが来なかったのだ二十四。

記事では、作者岩波菊治の考え方を、「箱庭的（何かに捕えられた狭い）」独善的な考え方だと評していたのであるが、これは岩波菊治に相当こたえたのである二十五。アリアンサ移住地の理想的な姿での完成を常に思い描き、自己の能力をそれに傾注したいと考えていた作者にとって、全く相容れない考え方が存在することを思い知らされた訳であった。そのことにこだわり続けて、何日も過ぎた時点で、この歌は作られた。純粋な気持、理論だけでは、移住地の現状を変え将来を形作っては行けないのだ、という思いが、この時作者には生じたのではなかろ

うか。岩波菊治のその後を辿ってみるとき、このことは第二の挫折感ではなかったか、と考えざるを得ないのである。「主観」の如き、哲学用語を用いての他者非難が、村の会報か何かに載ったところは、当時としては移民の中の〝知識層〟が多かったと言われたアリアンサらしい。そして、その語の意味するところが理解できた作者には、余計こたえたのであったろう。

そうした重苦しい状況の中にあって、この年から担当者となった日伯新聞歌壇の作品選は、多忙の日常では軽くはない仕事であったが、それでも、家庭の事情、移住地のいざこざに煩わされることのない、純粋に己れに籠ることの出来る貴重な時間であったと想像される。歌壇投稿作品の中に、別れて久しく消息を聞くこともなかった友の、歌稿がまじっていたのだ。この時ばかりは、日常の、心に重いあれこれを離れて、しみじみとした気持ちで投稿作品に対うことが出来るのだった二十六。自らの作歌営為と、ブラジルの移民短歌の水準の向上のために、力を注いでみようかと言った想いが生じたかも知れないのだ。

２７　父母に贈らむものと珈琲を遠行く君に托しまゐらす

２８　仰ぎ見る朝明の山に鳴く鳥は雁にぞ似たり列なして飛ぶ

２９　列なして鳴きゆく鳥は雁金に似たりと思ひ見送

りてをり

３０　雪かつぐ駒ヶ高嶺の廻りたる君が家居は忘らえなくに

自分には到底かなえられない、日本への旅をする人が身辺にあったのだろう。或いは、移住者ではなく、移住地を訪問した人が日本へ帰ったのかも知れない。それに、自家生産のコーヒーを託して、父母へ贈ったのだ二十七。「遠行く」には、万感の想いがこめられている。

二十八　の「仰ぎ見る朝明の山」は、伐り残されている原生林の梢（樹木の突端のあたり）のことを言っているのだろう。今、その上空を雁に似た鳥が列を作って飛んでいるである。信濃の古里の上空を秋になると飛んだ雁の姿を強烈に思い浮かべたのだ。「見送りてをり」は郷愁そのものと言っていい表現である二十九。

「君が家居」の君は誰なのであろうか。いずれにしても、ブラジルの地に長く住んでも忘れることの出来ない印象を作者に残している人のことであろう。その人の家居は、駒ヶ岳連山が囲むようにしている土地にあったのである。今もそれは変ることなく残っているのだろうと作者は思う三十。

一九三一年　三十三歳

昨日の朝の霜に焼けたる……

①暑き日の山の昼餉は水かけてからき味噌漬をそへてわが食す
②色黒きこの国人と隣りあひ住める親しさ四年となりぬ
③この国のくらしも慣れつ朝なさな熱きカフェの濃きをたのしむ
④霜降らぬ三年は経つつふるさとの諏訪の寒さは忘れし如し
⑤昨日の朝の霜に焼けたる珈琲の稚芽はあはれ黒ずみてをり
⑥幾年培ひし苦心も空しけれ珈琲はあはれ霜に焼かれぬ
⑦うつろへる夕日の色は淡々し霜枯れしるき珈琲畑
⑧霜枯れし芭蕉の葉群とよもして昨日も今日も吹く春嵐

畑の昼餉で、弁当に水をかけて食べるのはコーヒー耕地にコロノとして入った移民の間でも、毎日のように行われたことである（一九三〇年代作品③）。汗でぐっしょり濡れたシャツを乾かせば、噴き出た体内の塩が布を隈どって白く残るほどであったから、体は塩分を要求する。味噌漬の辛いのは格好な塩分補給源であったろう。また開拓初期の乏しい生活の中では、それほど他のおかずがあった訳でもない①。

②の「色黒きこの国人」というのは黒人の日雇労働者か請負労働者の家族のことであろう。言葉は十分には通じ合えぬながら、つき合ってみれば誠に気のおけない相手である。集団地の日本人同士の、どこか〝張り合った〟ところのある関係とはちがった、安らいだものが成立するのである。そのつきあいももう四年になる、という感慨であって、こういう経験は誰にでもあった。

物質的にはまだ乏しいが、もうブラジルの日常生活にも慣れて、朝毎に飲む熱いコーヒーは楽しい、というのであるが③、時の経過は否応なく人を環境になじませていく。そのことを作者は言っているのであって、単なる「楽しみ」ではないだろう。

霜を見ない比較的暖かい冬が三年続いてふるさと諏訪の寒さは忘れたような気がするとふと思うことのあった正にその年④、厳しい降霜に遇うのである。

陽が昇らない時刻には、霜を置いたコーヒーの葉はまだ青々としているが、日光が当たり始めると忽ち黒く変じていく。それが幼い葉ほどが激しく焼かれるのだ。「焼かれる」というのは葉の組織が低温で破壊されて黒変する状態を言うのだが、実際に火に焼かれたような姿になってしまう。一望のコーヒー畑が焦げ茶色になるのである。強霜に襲われたコーヒー樹は幹の部分から枯死するに至り、新しい芽が土際から出て成樹を形作るまでには数年を必要とする。もちろんその間の収穫は零に近い。

コーヒー園の育成に希望を託して、苦しみながら培っ

て来たものが一朝で無に帰すのである⑤⑥⑦。強霜豪霜で、ようやく結実するまでになったコーヒー園を焼かれ、挫折感を抱かざるを得なかった経験は、サンパウロ州パラナ州の奥地の開拓に携わった者の殆どすべてが持っている。それは岩波菊治がコーヒーを焦茶色にされて嘆いた一九三一年ばかりではない。ブラジルの南部地方は、殆ど毎年のように霜が降りるが、農作物に大被害を与える大霜には十年前後の周期性がある、というのが通説になっている。もちろん降る時期にはずれがあり、被害の地帯にも程度にも差があった。

或る資料によると、一九三一年の霜はそれほど強いものではなかったようだが、それでもまだ若木であった岩波の畑は、被害がかなり大きかったのであろう。

霜で枯れるのはコーヒー樹ばかりではない。バナナ（芭蕉）も霜には弱い植物で、葉も茎も茶褐色に変じる。そのバナナの葉を音高く鳴らして、昨日、今日と毎日春の強い風が吹き過ぎていく。春に近い季節とはいえ、霜後の、住居の周りの光景は粛条たる趣なのである⑧。

⑨乏しきに慣れて一杯（ひとつき）の年ほぎ酒にわが酔ひにけり

⑩不景気も慣れては安し新粟の餅をつきて年ほぎにけり

⑪たまさかは良き衣着たき事もあらん貧しき生活に堪ふるわが妻

⑫妊れる妻や幼さ子ろを率て陸稲の小稲刈りいそぐなり

⑬亡き子ろのみ墓の垣を作らんと常思ひつつ未だ果さず

⑭食欲の減るぞすべなし昼の飯に熱きマテ茶をかけてわが食す

⑨⑩は霜の降った年の新年の作。不景気で何彼と乏しい生活だが、慣れてしまえばそれなりに心も落ちつく。まして元旦とあればピンガの一杯も口にし、新しい収穫の粟で餅をつき心祝いをするのである。霜で頼みのコーヒーが焼かれるなど、予想もしなかったことであった。（ピンガ＝甘庶のしぼり汁を蒸留して作るアルコール度の強い地酒）

⑪には、貧しい生活に堪えて働く妻も、きれいな着物を身にまとってみたいと思うことがたまにはあるだろう、と憐んでいるのであり、⑫は幼い子供までひき連れて、妊っている妻と丈低い（小稲）陸稲を刈り急いでいるのである。農作業のすべてを、家族だけの労働で行わねばならないのだ。稲の取り入れも遅れがちになっているのである。

そのような乏しくまた忙しい明け暮れであるために、この開拓地で死なせた初子の墓の垣を作ってやらねばと思いながら、なかなか果たせないのだ。そして根をつめた労働の中で、食欲が減り、健康に不安を覚えるように

なって行く（「術なし）⑭。

⑮刈入は早く片づきてゆとりあり仲間の歌を謄写に附する

⑯を指さへあらはに見ゆる破れ靴を素足に履けど恥とし思はず（注　ママ）

⑰ランプの石油切れし術なさよみさしの本ふせおきていねんとすなり

⑱四季の変化すくなき国に住み慣れておのづから心の呆けし如し

⑲幾年ぶりに出で来し町か夕暮るる広場を歩むをみな見てをり

⑳幼子にやらまく思ふ玩具さへ買ふ金を無みただに嘆かふ

２１　購ひて子ろにやるべき金を無みわが手作りのおもちゃを与ふ

２２　背戸畑に胞衣埋むると下り立ちし寝足らはぬ眼に朝日まばゆし

２３　きほひ心失せしとあらね世の事にかまけて歌は久しく作らぬ

２４　稲打ちの激しき仕事のつづきつつ妻と寝る夜も無くてすごしつ

２５　稲打ちてかすむ眼は見はりつつ今日とどきたるアララギを読む

２６　わが妻の厨仕事によしと思ひ芭蕉の皮もて草履

を作る

⑮についてはやや詳しく触れておく必要がある。ブラジルの日本移民の間で文芸作品が多く発表されるようになるのは、幾つもの日本語新聞が順調に発行されるようになった一九二〇年代の後半頃からで、新聞が紙面をさくことを惜しまなかったからである。惜しまなかったというよりも、新聞はいわゆる殖民（移民）文芸を奨励したのであった。

岩波菊治がこの歌で「仲間の歌を謄写に附する」といっているのは、アリアンサ移住地で「九三一年に創刊された文芸誌「おかぼ」に掲載する作品のこととみて間違いないと思われる。この頃になると、各地の日本人集団地では俳句を作ることが盛んになり、大きな句会では謄写版刷りの機関誌を出すようになっていた。

アリアンサでは特に早くから盛んで「九二七年には「おかぼ」と呼ぶ同好者の集まりが作られている。俳句作者の中心的な実力者は木村桂石、佐藤念腹、中島簾女などであったが、岩波菊治も「掬二」の俳号でこの仲間に加わっており、この「おかぼ会」を母体として前記のように「おかぼ」が創刊されるのである。「おかぼ」は、木村圭石、佐藤念腹その他の俳句作者と岩波菊治との交流の中から生まれた短歌俳句の合同文芸誌だったが、編集から原紙切りまで岩波は〝引っかぶって〟行ったようである。既出の「追悼号」で行方正治郎は「……（岩波氏

は）未明から起きて開墾の荒仕事を日暮まで続け、夕食後昼の疲れも忘れた如く一心に原紙を切り、謄写版を動かしていた姿を今も思い出すことが出来る」と記している。

並の意気ごみではなかったことが想像されるのである。

アリアンサ移住地における短歌作者として岩波のもとに集まったのは、行方正治郎、武本由夫、中江克巳（盛治）、脇坂一、住吉光雄、樋田陽荘、同美沙子などであったが、いずれも後年「コロニア短歌」の中堅作歌者としての一時期を持つことになる。因みに「おかぼ」は後日、コロニア最初の活字印刷による文芸雑誌となった。

ところで、「おかぼ」の発行に殆どひとりで携わりながら、岩波菊治は「移民の短歌」ということをどう考えていたのだろうか。またその将来性などについて考えたことがあったのだろうか。さらには自らと移民短歌の指導ということではどうだったのか。行方正治郎が言っているような姿は、持ち前の責任感からだけのものだったのであろうか。

理想家肌で責任感は強いながら、何事によらず強力に派手な旗を振るようなことは不得手の、地味な性格は生涯を通じてのものであったと想像されるが、後年俳句短歌と異なる分野ながらそれぞれの第一人者としてよく比較されることになる佐藤念腹が、ブラジル移住に際して師の高浜虚子から「畑打って誹諧国を拓くべし」という餞けの句を贈られて、当初から俳句を生涯の業として志

していたのとは自ずからちがったものであったのではないか。だが、一種強烈な念腹の俳句への執念と行動力に些かの刺激も受けなかったとは考えられない。或る時期考えたことがあると言う「全伯歌行脚」などがそれであろう。

⑯⑳二十一　は当時の貧窮生活を率直に打ち出している。靴も買えないのはまず心の持ち方次第で何でもないが、幼子に玩具を買ってやれないのは流石に辛いのだ。「ただに嘆かふ」はちっとやそっとの思いではないだろう。

⑰の「石油切れし」も、単に一個のランプの石油が無くなった、ということではないかも知れない。「術なさ」には、その蓄えがなくなったのではないか、と想像させる響きがあるように思われる。

日本と異なり、ブラジルの四季はそれと気づかぬままに移って行くことが多い。そんな環境の中で慣れてしまうと、いつの間にか自分の心までが、何かしまりのないものになって行くようだ、と言っているのが⑱であり、⑲は町に出ることもなく数年が過ぎ、今、日暮れの広場を歩む女達をみて、やはり新鮮なものを感じているのである。

二十三、二十五は短歌にかかわる嘆きである。二十三は仕事や移住地のことがいろいろ重なって、久しく歌に心を向けることが出来ない、といっている。多く作って作品の水準を上げ、納得のいく表現を、という勢い心が

無くなったのでは決してないのに、である。一つの焦りと受けとることもできるだろう。二十五は、一日中稲打ちの激しい労働をして境や疲れでかすむような状態になった目を無理に開いて、今日、日本から着いた歌誌「アララギ」を読む、というのである。そこには岩波自身の作品も載っていたかも知れないが、忙しい仕事や世事への心労のために「久しく作らしなかったのだから、欠詠になっているのかも知れない。だとすると、当然のことながら「アララギに盛大に発表されている同人誌友の作品に、羨望を覚えないではいられなかったのではあるまいか。激しい開拓地の労働の中で読む「アララギ」は、心に潤いを与えるものであると同時に、焦りをもたらすものでもあったろう。

二十二　は夫である岩波自身が、妻の出産を介護したことを窺わせる。出産は明け方近かったのであろう。胞衣（えな）を家裏の畑に埋めようと戸外に出て行くと、一晩中妻を介護して眠られなかった眼に朝日が射すように眩しいのである。無事の出産を悦ぶよりも、一夜の疲れの滲み出た作である。コロノ時代、開拓時代を通じて、多くの夫が自ら妻の出産に手をかしたのだ。

二十四は日々の稲打ちの激しい労働のため、体力を消耗して、妻と同衾することのない夜が続いている、といっているのであり、二十六はバナナの枯れた茎の皮を細くはぎとって、妻の草履を作るのである。バナナの皮は軽くて強靭なので、草履を作るのには好適な材料で

あった。激しく、つましい生活の歌である。

二十七　新墾の裾辺の低処しろじろと蕎麦花咲けり風に揺ぎて

二十八　この頃の日ぐせとなりし夕立の霽れまを出でて珈琲の補植す

二十九　枯れそめしきびの畑中珈琲の青き植並くきやかに見ゆ

三十　墾原の芽ぶく木々の中にして茗荷に似たる草を見出でつ

三十一　つぎつぎに熟るるバナナの食ひ切れず腐りかけしは豚に与ふる

三十二　紅の羅（うすもの）纏ふこの国のをとめは物を戴き歩む

三十三　夏草の繁みに生ふる荒畑に色づきそめぬ珈琲の実は

三十四　馬曳きてトルコの商人来りしが金無きままにただ帰らしむ

三十五　山伐りは昨日の如く思ひつつカフェの花は既に咲きそむ

開拓地でいち早く蕎麦を蒔いたところは、如何にもそば好きの信州人らしいが二十七、しろじろと咲いた花が揺ぐのはさぞ郷愁を誘ったことだろう。また茗荷に似た草を見つけた時も同じであったろう　三十。

コーヒーに関する二十八、二十九、三十三、三十五は時期的には霜の歌の前に作られたものと思われる。

「豚に食わせるほどある」というのは、食べ物があり余って粗末に扱われる時に言われる言葉だが、実際にブラジルでは、家族では食い切れぬほどにバナナがなり、熟れ過ぎたものは豚に投げ与えた。また豚がバナナの幹を押し倒して勝手にちょうだいしてしまうこともあった

三十一。

三十二　は日本の風俗では目にすることの少ない、女が重い物を頭に乗せて歩む姿への感興であり、三十四は、日本人の集団地に時々訪れて来るトルコ人の行商を、金の余裕がなくて何も買わずに帰らせたという歌。馬を曳いて集団地をめぐる、というのは行商の中では資力のある方で多くは二つの鞄に雑貨を詰めて両手に下げて歩いて来たのである。また行商はトルコ人に限らず、日本移民の中からも比較的早く現われた農業以外の職業であった。この歌からは、お互いに余裕に乏しい、きつい日常生活をしている者への共感が汲みとられる。

三十六　国恋ふる心のありと疑はず七十路近き父母を思へば

三十七　彼岸会の頃とし思へば故里の老父母の切に偲ばゆ

三十八　鳴きわたる鶉の声は身にしみて遠けき故国の父母のこほしき

三十九　空低く並び合ひたる北斗星はるけき故国を恋ひわたるかも

四十　籾殻（ぬか）の上の雪かきわけて掘りたりし独活（うど）の香りさへも忘れ果てしか

いずれも望郷歌である。何度も触れることだが、岩波菊治はブラジルに理想的な村作りをする一点としての覚悟を持って移住した。言わば郷国を断つ決心である。そうであった筈であるけれど残して来た七十歳に近い父母を思うと、自分は疑いなく古里を恋い慕っている、というのが三十六でこの苦い思いはどのような雄心を抱いて移住して来た者にもあったのではなかろうか。

鶉の鳴音声は、岩波菊治にとってよほど胸にしみるものだったのだろう。初子を喪った時にはそれを子の声かと思う、とまで詠っている三十八。「独活」は、冬は籾がらなどで覆って雪から守るのであろうか。時期が来て、雪をかき分けて掘り取った独活の新鮮な香気さえも忘れてしまうほどにブラジルの生活も長くなった、という嘆きが　四十　の歌である。ふるさと信濃のあれこれを思う時は、流石の雄心も萎えることがあったのだ。

四十一　年々に村の役目に携はり閑もなくてすぎゆく我か

四十二　身ぬちに思ひ漲りきほひ立ちグランド拡張工事を区長に謀る

四十三　暇なき吾にしあれど珈琲の組合理事に選ばれにけり

四十四　村費の集り悪し止むを得ず徴税委員とふ役目を設けぬ

四十五　もっともらしき屁理屈ならべきほひ立つ人の多きに今更驚く

四十六　新しく村を建つると遠く来しその望みさへ何時遂ぐるべき

四十七　意気地なき若者共よ面と向ひ罵らんほどに憤ろしき

四十八　村人の心荒みてある時にたのみと思う我が師を迎へぬ

一九二五年にアリアンサ移住地に入った岩波菊治が「第一回草分移住者の一人(前出行方正治郎追悼文)」であったとすると、一九三一年はまる六年を経た時期となる。四十一から四十八　までの八首は、岩波個人にとっても移住地にとっても大変重要な時期であったことを物語っていると言えるようだ。

四十一、四十二、四十三、四十六は作者自らに関わる思いだが、他は移住地の容易ならぬ状況が詠われている。

四十一は、作者自身の営農が必ずしも順調に行っていない（それは金銭的に全く余裕のない生活を詠った歌が多いことで窺われる)、物心両面の苦しさの上に、移住地全般のことまで考え行動しなければならず、心身共に余

裕のない生活を続けてあたら大切な時を過ごしてしまうのか、という嘆息である。

そうかと思うと、公けのことにもじっとしておられない性格は、村の青年の精神的向上や団結のためには、まずスポーツを通じるのが一番だと考えつくと、矢も楯もたまらぬ気持が起って（「思ひ漲りきほひ立ち」）、グランド拡張工事の推進を区長たちに謀るのである四十二。

このような、貧乏で多忙を極める時期に推されてコーヒー組合の理事に就任する四十三。このことにつき行方正治郎は「……どちらかというと訥弁の岩波氏ー略ーは目立たぬ存在であったに係わらず、常に村政の重要ポストを司どって居り、産業組合の非常時にはその人格を買われて専務理事の重責を負って立ったー略ーと記している（前出行方文）。

一九二九年から始まる世界経済大恐慌を最大の原因として、ブラジルのコーヒー産業はどん底景気に陥るのだが、アリアンサ移住地のコーヒー栽培者の苦境も例外ではなかったのだ。これから盛果期に入ろうとする樹齢にあって、生活建設の期待のすべてがコーヒーに寄せられていたのが、一挙に空しくなったのだ。こんな時期に岩波菊治は組合専務理事を引き受ける。公けのために身を粉にすることを厭わぬと言っても、施す術があったろうとも思われない。岩波自身も五千本余のコーヒー樹所有者であった。　不景気の中では村費（日本人会々費）も中々集まらない。無理はない点もあるが横着を決めこむ

者もあったのだろう。岩波は率先して「徴税委員」といういかめしい役職を日本人会に設けるのだ。批判の声も当然起ったのであった。アリアンサ移住地はその成り立ちからして日本で土地を購入し、直接移住して来た者が多かった。中には「高等官、学者、軍人出等の所謂偉い人達が多く、日本人会（ありあんさ会と称した）の総会でもあると、それこそ喧々諤々の論客が論じ来り論じ去るという有様ー略ー（前出行方文）」であったので、口よりも実行力を得手とした岩波は、これほどまでだったとはと今更のように驚くのだ四十五。このように、へらず口を叩く人物は多いが、若い連中となると、何を考え、何を行動の対象としたいのか一向に分らない者ばかりだ。時には面と向って罵倒してやりたい憤り、いらだちを覚える。一体、移住地の将来についてどう考えているのか、というのが四十七である。

このような移住地内の現状とどん底景気の中にいると、ブラジルの新天地に理想的な村を建設する一員たろうとしてやって来た望みは、いつ達成することができるのか、という切実な思いにかられる四十六。このままでは駄目なのではないか、という弱気も頭をもたげようとしたのではなるまいか。コーヒーを焼いた霜と価格の下落は、コーヒー栽培者のすべてに手痛い挫折感を与えたのであった。

こうして村人の心が荒れている時期に、自分に海外での農業に夢を与え、開拓精神を吹きこんでくれた、心の

支えとも言うべき師が移住地を訪れたのである（４８）。師は言うまでもなく力行会々長の永田稠である。永田会長の現時点での発言或いは講話が、或いは村人の気持をもう一度、理想の移住地建設に奮い立たせるのではないかと岩波は期待した四十八。そして、その期待が一番大きかったのは他ならぬ岩波菊治自身であったろう。

四十九　心とがりてありたる時に我に関る根もなき噂
　話をききぬ
五十　びしょぬれになりて戻り来しが一と息に飲みし
　ピンガは咽喉に泌みわたる

既に見て来たように、理想の村を作るということにひたむきだった岩波菊治の言動に対して批判的な論も起っていたのであるが、それまではまだ「主観的に過ぎる」といった程度であったものが、遂に悪意をもった虚構の噂（どんなものであったかは明らかでないのだが）まで流されるようになったのだった四十九。

どこの植民地、集団地にも起ったことだが、〃指導者〃ぶりたい位置を岩波の〃正論〃におびやかされることを嫌った者もあったろうし、頭角を現わそうとするものをねたみ、落し入れることを好む性格の者も少なからずいたのではあるまいか。「わが事を貶せし記事」と三〇年度作品二十四で詠っているから、〃岩波批判〃はかなり底深いものだった、とも想像される。

「根もなき」と言っているのをみると、岩波という人間の品性に関わるほどの悪質の噂だったのだろう。他者に対して悪意を抱くことなど、生涯を通じてなかっただろうと信じられるほどの人間であったから、噂はこの上ない屈辱であったと思われる。

五十　は移民の重い労働とピンガの関わりを、ストレートに詠出している。ピンガは労働の疲れへの処方箋だけではなく、精神の疲れへの対処薬でもあったのだ。コーヒー園のコロノ労働時代から開拓時代の重い労働の疲れを、その頃手に入る唯一の〝酒〟だったピンガで男たちは癒した。幾らか金にゆとりができると、ピンガはキントやカルトーラ入りで買われ、炊事場か食事場（サーラ）の片隅の台に乗せておかれた。

夕方、畑から帰ると、男達は手を洗うか洗わぬかのうちに、蛇口から器に注いであふるのだった。だがピンガはその強いアルコール含有度のために健康をそこなうことも多く、そこから家庭の不幸が生まれることもあったし、泥酔に陥り易いところから狂暴性をあふり殺傷事件を引き起すこともあったのである。

（註　キント～五〇リットル、カルトーラ一〇〇リットル程度）

一九三二年　三十四歳

鋭心は失せしにあらね……

①この国に慌しくすぎし年片は遂に空しさものとこそ思へ

②富み足りて我ら在らむと願はねど稍ゆとりある生活となりたし

③行く末を思へば果敢し安らかに老をたのしむ日のありやなしや

④鋭心は失せしにあらね直らざる世の不景気は身に応ふなり

⑤珈琲の値はいつにならば騰るならむ心に悼み幾年か経ぬ

一九三二年は渡伯七年である。コロノ生活での精神的〝落ちこみ〟こそ経験しなかったものの、原始林開拓の仕事は、労働の重さ厳しさでは、コロノ以上のものがあった。日本では考えることも出来ない「新しい理想の村作り」を心に描いて、可能な限りの奮闘を続けてみたが、ことは志とちがった、というのがいまの現実であった。心身を粉にしての努力も、結局は虚しかったと認めなければならないという深い失望感が①には詠まれている。

このあたりば、岩波菊治の、アリアンサという移住地

とそこでの生活への心の転機、ということができるのではあるまいか。それほどに「遂に空しさものとこそ思へ」という嘆息は深い。

大金を懐にして衣食住に贅沢をすることを望むのではない、ただもう少し物心ともにゆとりある日々でありたい、というのが②で、ブラジルでの案に相違した長い貧窮の生活を脱したい切実な思いが伝わる。そしてこの思いは直接に老年になっての生活の不安にまでつながって行くのだが、不安もただの不安ではない。未来へのどうしようもない、頼りなく心もとない思いで、殆ど自信の喪失ともいえるほどのものだ③。歳三十四にしてのこの感懐はやや異常ともいえようが、それほどこの時代の作者の心身ともの疲れは深かったのかも知れない。

「鋭心は失せしにあらね」と未だ残る自らの気鋭をふり返ってみても、一九二九年から始まった世界大恐慌の影響を受けたブラジルの不景気はいつ拭い去られるものか、一介の農夫には予想のつくことではない。これが「身にこたえる」不安をかもす④。

コーヒーの値が騰ってさえくれれば、この窮状を抜けられるのだがと、心にそれを切に待ち望みながら、もう何年も経ってしまったのだ⑤。

⑥ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永久に思はむ

⑦年毎に衰へまさむ父ははと思ふは寂し遠く住みつつ

ブラジルでの生活が苦しければ苦しいほど、後にして来た故郷への思慕が強まるのは、移民に共通したものであった。

既に触れたように、作者は永住の気持でブラジルへ渡ったのであったと想像されるから、ふるさとへの恋々たる念いは一応断った筈であるが、事志とちがった開拓生活は押えようのない古里思慕をつのらせるのである。

永住の気持と言っても、それは故里をもはや心で断ち切って再びはみるつもりはない、とするのではなかったし、功成り名遂げて訪い行くという気特まで捨てたものではなかったのだが、⑥の「永久（とわ）に思わむ」は、それは生涯果たすことの出来ない故郷訪問、という予感の如きものを心の底に漂わせての表現のように受けとられる。作者が逝去した頃はかなり故郷を訪ねる者がいる時代になっていたが、事実はその予感の通りになったのである。

この歌は、サンパウロ市創設四百年を祝って日系コロニアが市へ寄贈した「日本館」庭園の一隅に、歌誌「椰子樹」同人が一九五五年に建立した歌碑に刻まれた一首であり、岩波菊治の作品の中で最も親しまれているものである。

この歌の評価について、短歌の上で誰よりも岩波と近接した関係にあった武本由夫は「歌集」編纂後記の「ブラジル歌壇の父、故岩波菊治先生」の中で、

あたかも、先生一代の傑作又は代表作であるかのよう

に言うのがあった。たしかに先生はこの歌を愛唱し、その故に私達は、イビラプエーラの日本館敷地内に建立した歌碑にもこの歌を刻んだのであったが、代表的作品というわけではない。この事は、これまで私が何回か自信作を挙げることをうながした時、その都度先生は「まずまずこの程度が俺のギリギリのところだ」と謙虚な態度で、挙げた自信作何首かの中に、この「ふるさと」の歌を一度も加えたことはなかった。

と書いている。

そしてまた「一日頃先生が愛唱した歌への無意識的な讃仰から、世人に岩波菊治の文学上の業跡の頂点に『ふるさと』の歌をおかせるような危険をおかしてはならないと考える」とも言っている。

文学的に評価した場合に、「ふるさと」の歌が岩波菊治作品の頂点に位置するものではないという武本由夫の論の根拠はこの後記では触れられていない。「心にしみて永久に」という言葉には、たしかに一種の感傷性或いは甘まやかさ〃が感じられて作品を軽くしている、ととられかねないが、「永久に思はむ」に前記のごとき故郷訪問を生涯果し得ないという予感の如きものを感取すれば、自ら評価はちがって来るであろう。それはとにかく、この作品の内容と韻きは、岩波菊治の代表歌ではなくても、移民の心を代って詠った作品とは言えるのではないか。

ブラジルでの生活が、当初の期待とはかけ離れたものになって苦しい日々が続くと、きっと成功して訪ねて来

るから、という言葉を残して郷里に置いた老境にある父母のことが思われてならないのだ。年毎に衰えていくのを思っても、力づけてやれるようなブラジル生活の報告を書けない現実がある。今更のように越えて来た幾万キロメートルの海の距離を思って心の萎えるという歌が⑦。

⑧大霜に枯れしカフェーの細枝のかくろふまでに蘖（ヒコバエ）伸びぬ

⑨脂濃き料理に慣れつたまさかは茶漬の飯もうましと思ふ

⑩雨期あけし空のさやけさ宵早く南十字の星昇りそむ

大霜が降るとコーヒー樹の地上部分は殆ど枯れたような姿になるが、根本の方は生きているのが普通で、やがてひこばえがたくましい勢いで伸びて来て栽培農家に希望を与える。実の安値は相変らずだが、収穫が期待できる樹の回復はやはり心強い。何程かの収入が期待できるし、値上りが起らないとは限らないからだ⑧。

ブラジルの料理では豚の脂肪を煮沸して採る油を多く使う。主食の米も豆（フェイジョン）もこの油を入れて炊くのである。元来あっさりした味わいのものを好む日本人は、初めはなかなか慣れないが、次第にそれでなくではもの足りなくなる。暑さと厳しい労働で流す汗により塩分を多く失うから、油こい食事でなくては体がもたないからだとよく言われた。だが、そうはいってもたま

さか用意させて食う茶漬け飯は、やはりうまかったのだ⑨。

ブラジルの気象はだいたい雨季と乾季に大別される。雨季明けとなる頃は曇りも遠退いて空がさやかになる。そうして南十字星が夕刻の早くから、はっきり見え始める⑩。南十字星は、如何にも故国を遠く南半球に住むのだという感懐を、移民たちに起させるものだった。

一九三三～三四年　三十五、六歳

村建つる思ひに燃えて……

①時ならぬ秋の終りの雨を繁み落ちし珈琲の実は黒く黴びぬ

②捗らぬ珈琲採取に時たちて二番花咲く九月となりぬ

③我が畑にはじめて生りし珈琲は皆とり入れぬ百俵あまりあり

コーヒーの実は赤く熟れた時点でもぎ取って乾燥させるのが良品質のものを得る理想的な採収なのだが、労働力不足のために大部分は黒くなってから地上に落して掻き集めることになる。また黒くなったものは自然に土に落ちるのが多いから、雨が続くとこれらは黴が生えるほどになる。こうなると当然品質が落ちるのだが、施す手

はない①。家族の手だけでの採収作業は中々捗らず、まだ終らないうちに樹には二番花が蕾を持つ季節になった②。誰もが手一杯に仕事を広げているから、こういうことは毎年繰り返されたのである。計画通りには農作業のすべてが進まないのだ。

近年の栽培法では、定植して三年目にもなるとかなりな量の果をつけるが、往時は四年目頃からぼつぼつなり始めたのであった。作者が自分の土地へコーヒーを植えつけたのは移住後三年目辺りであるから、この年樹齢は五年くらいになっている筈であるが、霜害なども受けているから「初なり」が遅れたのかも知れない。だが、ともかく百俵の収穫があったのである。感慨なきを得なかっただろう。これが、話に聞いて来たような好相場であってくれれば、という思いも当然湧いたと思われる③。

④伽排を先売りしたるそこばくの金は忽ちつかひ果しぬ

⑤蚕を飼ひてミシン購はむという妻の願ひはあはれ三年越しなる

⑥村建つる思ひに燃えて来りしがあはれ空しく七年は経し

⑦現し身の心づかれかふるさとの夢をぞ見つれ三夜つづけて

⑧畑墾く世すぎの業のはげしきにわが顔いたく老けたりと思ふ

収穫をようやく終えて一息つく格好にはなったが、実はそのコーヒーは、まだ採収しないうちから一部分の量は売ってしまっていたのである。そうして手にした金は、焼石に水の如くに使ってしまっていたのだ④。コーヒーに限らず、綿やとうもろこしなども、生活費や営農費の枯渇のために、農家はまだそれが畑にあるうちに、精選会社や仲買商に先売りすることが多かった。いわゆる青田売」である。こういう場合の売買条件はきまって売り手に不利なものであった。それは承知で農家は金にかえねばならなかったのだ。

コーヒーの相場は底が知れないほど落ちて行くようだから、蚕でも飼って苦境を凌がねばならないか、と考えたのは一九三〇年のことであった（一九三〇年作品⑫）。当時妻は蚕を飼ってミシンを買いたい、と言っていたのだったが、その妻の願いも一向に実現しないままに、もう三年が過ぎたのである⑤。新しい仕事を始めるには、金も時間も余裕がなかったのであろう。

新しい村を建設するという望みは何時遂げられるのかと嘆いたのは一九三一年であったが八十九、ここでは空しく、為すなくて七年も過ごしてしまったと詠っている⑥。現実の生活が心身ともに苦しければ苦しいほど、未だ若い無垢の心で、これの実現は殆ど絶望に等しいと悟らねばならない〝大業〟の達成を夢みたことが、苦く自らをさいなむ思いになったのではなかろうか。

三晩つづけて見た故郷に関わる夢も⑦、決して楽しい

ものではなかったであろう。混沌として得体のわからない重苦しい夢だったのは、心疲れから来たものだったかと作者は思う。

こうして、自分の容貌がひどく老けていることに或る時気づくのである。これも、開拓という自ら選んだ生業の激しさのためなのだとふり返る（８）。

⑨酢味噌和へのアスパラガスを食うべつつ独活の香りには如かじと思う

⑩幾年ぶりに出で来し町にアイスクリームすする一ときを楽しと言はめ

⑪革命戦いつ果つるべくと思はえず村の物資は乏しくなりぬ

アスパラガスは開拓時代の植民地や集団地では殆ど見ることのない野菜だったが、アリアンサなどの移住地では、コロノ移民とは入植者の多くの〝出自〟が異なっていたから、アスパラガスのような一種しゃれた作物の早くからの持ち込みがあったのかも知れない。それを作者は珍らしがって酢味噌和えで食べながら、故郷でよく食べた独活の香には及ばないな、とふるさとの味を懐しんでいるのである⑨。後年、作者はモジ・ダス・クルーゼスに移ってから、アスパラガスを栽培した。それの歌も作っている。

何年間も町に出ない、というのは幾ら多忙であったと

は言え農家の主としては一寸珍しいが、それほど作者は農作業に追われていたのだろう。一つは移住地の売店でたいてい用は足せたのかも知れない。またアイスクリームをなめることなどは、もっと長い年月の間なかったのであろう。今、子供のようにそれを嬉しがる気持がふときざしているのである⑩。だが、哀しと言はめ」という表現には、「この程度のことすらも（アイスクリームをなめる）楽しいといえることなのか」と、己れの心をふり返らないではいられない翳りが感じられる。

⑪の革命戦」は、「一九三二年にサンパウロ州の政治勢力が起した反ゼツリオ・バルガス蜂起（護憲革命）のことであろう。政府軍に圧迫された革命軍が、州の内奥地で貨物自動車や馬、食糧などを徴発する事態なども発生、物資の流れも阻害され、住民の生活必需品が不足することも生じたのであった。アリアンサ移住地にも、その影響は及んだのである。

一九三五年　三十七歳

父が吹きこみしレコードは……

①家近き滝に水車を設（しつ）らへて我が食料（くひしろ）の米撞かんとす

③珈琲の値は少しよくなりしかば欲しと思ひし馬買ひにけり

③久しく思ひ願ひし風呂場建て雨期も安けく夜毎ゆあみす

岩波菊治の所有地内に水流があったことは前出行方の追悼文にもあるが、小さな滝もあってなかなか風趣もあったのであろう。手先の器用な作者は、ここでもそれを発揮して自分で水車を作り、畠で収穫した米を掃こうというのである①。②③の作品と共に、幾らか生活と、そして心に余裕の出来たことを思わせる。何といっても、収入の面で大きくあてにしていたコーヒーの値が、長いどん底からやっと上向いたのが、心と生活にゆとりを持たせる原因であった。

開拓途上の生活にとって、馬一匹を所有することは大きな躍進といえた。この「馬」がカヴァロと呼ばれる普通種であるかブーロ（驢馬）という種類のものであったか明らかでないが（いずれも耕転用、乗用に使用）、とにかく馬は鋤や荷車を引き、町へ買物に行くときは乗用と運搬用を兼ねたから、労働力の計り知れない増強であり、一家にとっては農村生活における一つの〝革命〟とさえ言えた。馬一匹を買うのは容易なことではなかったのだ②。

風呂場を建てるのも余裕の現れである。ドラム缶か大きな桶を手に入れて上部三分の一くらいを切り取り、残

りの部分を風呂桶とするおおむね露天風呂であった。風呂場ができたから、雨の多い季節でも露天風呂でのように雨にうたれる心配はない。毎晩のうのうと湯浴みができるのである③。

④家建つる仕事に日々は過しつつ我が性慾は久しく起らず

⑤肉類を食へば腹病む妻がため塩からき一罐の鰮（イワシ）を購ふ

⑥移り来て十年を経つる我が妻が汽車に乗ることも遂になかりき

岩波菊治にはかなり早くから夫婦の営みにかかわる作品がみられる。当時の移民の短歌作品の中では稀有のものであったと思われる。「戯作」めいたものとしては皆無ではないが、真正面から詠ったものは殆どなかった。④はひとり男の家建てという重労働で体力を消耗し、もう長い間妻と共寝しても性慾が起らないと言っている。三十七歳という年齢を思えば、男にとりこれは淋しい現象といってもよいであろう。

獣類の肉を食えば腹痛を起すというのはどんな病気か不明だが、とにかく口がしびれるほどに塩のからい鰯の罐詰を妻のために買うのである⑤。内陸地の開拓生活では鮮魚（まして海のもの）は殆ど手に入らなかった。塩鰯が唯一の手に入る魚類であった。

一九三五年は、ふり返れば正に渡伯まる十年に当る。五年十年で帰国できることを信じて来た者にとっても、永住を覚悟で移住した者にとっても、当初の希望（理想）と現実の生活との懸隔は、深い感慨を起こさせないではおかない。十年という節目だからなおさらなのだ。その十年のあいだ、妻は汽車に乗ってどこかへ出掛けるということが遂になかったのである⑥。この十年間、夫である自分と共に畑の労働をし、家事と子育てに専念して、どこに出掛けるということもできなかった妻が哀れに思われて来るのだ。だが、多くの移民妻がそうであった。汽車に乗るといえば、病んで近隣のより大きな町の医師に診察して貰う時くらいのものであったのだ。

⑦遠くより望めばあたかも桃の花の赤きに似たりイペの盛りは

⑧父が吹きこみしレコードはいたく声ひくし聞きゐつつ遂に涙ながしぬ

⑨いつの日に帰りゆくべき故郷か父は八十路に近づき給ふ

⑩帰りゆきてつひに住みつかむ故郷と思ふにあらねただに恋ひこふ

⑪ふるさとの険しき世相は新しく来し青年の心理にまのあたり見ゆ

ブラジルの自然の風物の中に、少しでも日本のものに

似たのがあると、それは移民たちが故郷を思うよすがとなった。ブラジルには存在しないほととぎすやもずを岩波菊治が恰も存在するものの如く詠んでいるのは同じ心理によるものであろうし、人間に普遍の心情でもあるだろう。

⑦で詠われているイペーは通稀「紫イペー」のことであろう。薄い色のものが遠目には桃の花に似ているように見えたのだ。これと同じく木綿（パイネイラ）の花は紅がより淡いため桜の花とそっくりに見えることもあった。

⑧⑨は故郷の老いた父を思う歌。後からの移住者かブラジル訪問者かが持参した、父の声を吹き込んだ蓄音機のレコードには如何なる言葉があったのだろうか。いつの日に帰って行って会うことができるのか、考えることもできない父はもう八十歳に近い老齢である。そして今、レコードから流れでるその声は、ひどく低くかすれている。子は耐え難くなって遂に涙を流すのだ。こぼすのではない、溢れさせるのである。

永住と新しい理想の村の建設を志して渡航した自分は、故郷に帰って行くことがあっても、そこに住みつこうとは夢々思っていないが（志を失っている訳ではないので）、恋いこう気特はどうしようもない、というのが⑩で「恋ひこふ」は切実だ。

岩波菊治が移住してから十年の時代と言えば、日本の不景気は深刻の度を加え、あまつきえ満蒙支などへの進

出で、国際的孤立化が進み、国内でも世相が険悪なものを孕んで行った時期である。その情勢の影響をまともに受けたような感じを持つ青年が、故郷から新しく移住地にやって来たのだ。荒れた心と虚無的な態度を示す青年をみて、ふるさとの様子が案じられるのである⑪。

試みに一九三五年に至る数年間の、日本の国に起った重大な幾つかの出来ごとを記してみると◎三一年九月一八日～柳条溝における満州鉄道爆破事件で「満州事変」起る。◎三二年二月二八日～上海事変始まる、三月一日～満州国建国宣言、五月二五日～陸海軍少壮将校の犬養毅首相射殺（五・二五事件）。◎三三年三月二七日～国際連盟脱退詔書発布などがあり、政財界要人の暗殺や未遂が頻発し、三六年の二・二六事件へと暗い国情はうねって行くのであるが、これらの国内・国際情勢は伯字新聞や邦字新聞によって移民社会に伝えられ、移民連は一喜一憂、大きく精神的に動揺し影響を受けたのである。

そういう祖国から来た一青年は挙動にも気持にも何か不気味なものを漂わせていたのであった。作者はその青年の姿の向うにふるさとの険しくなっているらしい状況をみるのである。

一九三六～三七年　三十八～九歳

行末ののぞみ失ひ……

①この村を統べゆくは遂に産業組合の力によりてのみ全（まった）かるべし

②疲れかへりて夜は廃人の如く眠る日々のつとめのかくてつづかむ

作者は一九三一年に産業組合の理事に推されて就任した。一九三六年は既に七年目である。不景気のどん底での組合経営は心身を消耗しても足りぬものがあっただろう。しかし移住地（村）の経済生活、精神生活を支えて行くのは一人は万人のために、万人は一人のために」という協同組合精神以外にはない。状況が苦しければ苦しいだけ、組合精神は緊要なのだ。

もちろん自分はそう信じ努めているのだが、組合員の気持、村の空気はそう単純ではない。組合と組合精神の必要は理屈では分かっていても、日常生活が苦しくなると、組合員農家の問には組織をかえって怨ずる気特も動いて来る。作者は「遂に産業組合の力によるほか、村を一つの協力体にまとめる術はない」と観ずるのだが、事実は志とたがうのである。「全かるべし」は肯定の言葉ではあるが、そうはいかない嘆きがひそんでいるとみるべきであろう①。

②「日々のつとめ」と言っているのは組合の理事の仕事のことであろう。昼間は耕作の労働で疲れ、夜は夜で組合のことであれこれ要務をこなさなければならない。疲れ果てて帰宅すれば廃人のように前後不覚に眠る日が続くのである。「かくてつづかむ」は、このような苦しい日常が長くつづくに違いない、と半ば暗澹とした想いにあるのだ。

このような日夜の厳しい働きで疲れが昂じた故か、作者はこの頃から病気がちになり、遂に数ヵ月も病院生活を送ることになる。

③森林黄熱病という疫病はやりて我が村のすこやけき人ら次つぎたほれぬ

④うつそみの病やしなふと鈴蛇の干物を焼きまたスープにし日毎くらふ

⑤いのちありて三月ぶりに家にかへるを得し嬉しさは今宵なかなか眠れず

⑥三月あまり病みし治療代はこの年の伽排のすべてにても足らはざるべし

⑦行末ののぞみ失ひ或るときは再移住といふことも思ひき

⑧一途に村を建つるときほひしが今にして思へば空しさに似つ

岩波菊治の一移民としての生涯と心の軌跡をその短歌

によって辿ろうとする時、この辺りの作品は重要な意味を持つように思われる。

それは十数年という短からぬ年月をかけて、純粋に、新しい理想的な村の建設に情熱を燃やして努力を傾けたことや、達成への無二の支えとしようとした産業組合への期待が、「今ふり返ってみると空しいことだった（空しさに似つ）」と思わざるを得ない心の状態に陥ったことが察しられるからである。胸に掲げつづけた灯が、ここに至って消えようとしていることへの、いやおうのない自覚であり、手痛い挫折感である⑧。アリアンサという移住地での己が将来に望みを失い、時には「再移住」ということをも考えるようになったのである⑦。

ここで言っている「再移住」とは、ブラジルの中で他の地方へ移る、ということではないだろう。五年前には満州国初建国があり、日本では農村の次、三男問題の対策として、また国防と、満州における経済的地盤の確立のための満州移住が高らかに謳われていた。ブラジルでの将来に希望を失った心に、ブラジル移住の前に描いたような夢が、満州の広漠なる大地に架けられるのも無理からぬことであった。

一九三七年の十一月、ゼツリオ・ヴァルガスは独裁政権を樹立、以後ブラジルのナショナリズムが昂揚されて行くのだが、日本移民は祖国の国粋主義・軍国主義の影響を強く受けながら、ブラジルのナショナリズム下の制約に怯え苦しむという状態になり、満州や海南島への”

再移住〟論や「日本人はアジアへ帰れ」論が唱えられる時代に移って行ったのである。岩波菊治の「行末の」の歌は、日伯両国のこのような状況と無縁ではなかったろう。

作者の病いが「森林黄熱病」であったか否かは不明だが、壮健な村人たちが多く床についたのであろう③。自分の畑の仕事も、産組の仕事もぎりぎりの多忙さの中で、三ヵ月間も家を離れて治病しなければならなくなったのであるが、精をつけるためには蛇の干物を焼いて食べるか、粉にして飲むのがいちばん、とはよく言われたことであり、移民連はそれを実行した。スープにして吸うこともあったのである④。

病はかなり重く、一時はこのまま再起できないのではないかとの不安を抱くほどであったようだ。それがやっと恢復へのめどがつくまでになって（「いのちありて」）三月ぶりに家に帰って来たのであるが、生き永らえ得た悦びと興奮のために、その夜はなかなか寝つかれない⑤。当然のことだが、己れに万一のことが起ったら、病みがちの妻と幼い者たちは一体どうなるか、という不安が暗くのしかかって来ていたであろうから、再生したという思いの悦びは強い。

だがいったん恢復のめどがついてみると、すぐ迫って来るのは三ヵ月間の仕事の遅れと治療代支払いへの不安である。まだ幾らかかったかは分らないが、多分今年収穫するコーヒーを全部売った金でも足りないだろうと、とつおいつ作者は考えるのだ⑥。一年分の働きのすべて

が治療代として消える訳で、一家にとって容易なちぬ打撃である。

⑨行李の底にしまひしままの布蚊帳は幾夏つひに吊らですごしぬ

⑩珈琲の花のにはへる埴道のゆるきのぼりを馬走らする

⑪うすうすと霧ながらふる牧の中我をみとめてわが馬いななく

⑫穂に出でし牧の草原押しなびけ野分と思ふ風吹きにけり

多忙で厳しい明け暮れの中での、ふと心ゆるむ一瞬の歌といおうか。⑪の「我をみとめてわが馬いななく」には「共に生きるもの」同士のいのちの交流が感じ取られる。

「野分」は秋に吹く強い風のことであるから、眼前の牧の穂草を押しなびかせて吹いて行く風に、作者はふるさと信濃の秋の風光を顕たせているのだ（「野分と思ふ」）⑫。

一九三八年　四十歳

指導精神既に矢へる……

①うらさぶる心たもちて日は経つつ時にむらむらと兆す
　怒はや
②インテリ階級と呼ばれし人ら相つぎて村を去りゆくも
　時の流れか
③指導精神を既に矢へる移住地事務所の理事に向ひて何
　を頼まむや
④売るといはば捨て値のごときわが畑を持ちこたへむも
　易からなくに
⑤幾十万本の古き珈琲を伐り捨てし跡にひろびろと棉植
　えにけり
⑥朽ちそめし納屋の椰子壁かたぶきて糸瓜の蔓が這ひま
　つはりぬ

①の「うらさぶる」は「心さびしく」または「心が荒んだ状態で」の意だから、生活のこと、村のことなどが気にかかり、心淋しい状態で日々を過ごしている時に、急に何かに向かって怒りが兆して来るというのである。怒りは、精魂を傾けて農業に富んでも酬われないことへのものか、或いは移住地や産業組合の在り方へのものであったろうか。恐らく二つのものが重なり合って、作者の胸に蓄積されつつあったのだと思われる。移住地への

怒りは、③の作品で真っ向からぶちつけられている。移住地造成当初から、高尚な言辞を並べて来ていた責任者たちには、もはや理想も指導意欲も何もないではないか、期待すべきものは皆無であると激しく言っている。

而も、学歴もあり、日本での社会的地位が普通の移民よりも高く、移住地を造成して行く中心勢力とみられていた人々が、次々と他地方へ移って行き始めたのである②。「時の流れか」と嘆じているが、嘆いてすむことではなかった。岩波菊治にとっては「新しい理想の村」造りの道程が音を立てて崩れ去って行き始めたと感じられた筈である。

遂に作者も己れの折角心血を注いで作りあげた畑を売ることを考え始めたのである④。手放すといえば捨て値のようなことになるだろうが、それかと言って、このまま経営を続けるのも、容易なことではない、と考えざるを得ない状況なのである。そうして己れの周辺を見れば、何十万本と植えられていたコーヒー樹が伐り払われて、一望の棉畑と化しているのである⑤。

永年作物であり、ブラジル農業の根幹の位置にあったコーヒーは、移住地の造成と入植者それぞれにとっても栽培物の中心に据えられていたものであった。それが一年作物の綿にとって代られたのである。コーヒーの不況と霜害の急場を救うものとして棉作は急激に広がり、また経済的な潤いも与えたが、村作りの土台となる栽培物とは岩波菊治には考えられなかったであろう。一望の棉

畑も心を励ますものとはならなかった。

②の「時の流れか」はもう少し考察しておく必要を感じる。移住四年の一九二九年度作品⑳の「いささかも肥料はせねど畑つ物なべてみのれりうましこの国」と讃美の言葉を惜しまなかったブラジルの土、「生まれし村の広さの土地三十町歩」（一九二八年度作品⑧⑨）も、実は肥沃は無尽蔵ではなかったのだ。テーラ・ロッシャと称されるモジアナや北パラナの一部の地帯の肥沃土に比べると、アリアンサ移住地の所在したサンパウロ州西部地帯は砂質土壌が多く、地力の衰え方は速かだったのだ。

一九三八年辺りは開墾してから十年以上経っている。地力の衰えは既に年々の作物の上に現われ始めていたと想像される。開拓の時期の早いところほど、地力の衰退は進んでいるので、多くの植民地においても、他に新しい原生林や借地を見つけて移って行く者が増え始めていた。同時に、生長した子供達の教育とか、もう少し”文化的〃な生活を願うとかの理由によって、都市部或いはその周辺への移動も始まっていた。いわば「植民地の崩壊」が起る時代であったのだ。

岩波菊治としても、この趨勢は人一倍感じ取っていた筈で、あながち「インテリの指導者階級の意気地なさ」とは言い切れないものがあったであろう。一般的に言って、合理的に十分な施肥を行って「土を作る」という考え方（思想）を農業者が持たない時代だったし、例え持っていたとしても「村の広さの土地」に対しては実行は殆ど不

可能な状況にあった。日本の農村出の多い移民でありながら、土を作るという思想が薄かったのは不思議ともいえる現象なのであるが。

⑥は移住地全体の無気力化と、作者自身の生活周辺の精気の喪失を窺わせるような作で、開拓十余年、早くも椰子の木を割つて壁とした納屋が壊えようとしている風景である。

⑦いのち生きしさきはひは思へ時になほ負債殖えゆくことを嘆かふ

③病みあとの心よわれるすべなさは一途におもふ故国にかへる日を

⑨先生の忌日は明日と思ひ居りアララギ二月号がやうやく届きぬ

⑳先生の野分の軸を借り来り今日の忌日にかけておろがむ

⑪貧しかる生活に耐へて幾とせか果敢なき歌を詠みて来にけり

⑫アララギの中にしありて疑はず廿年ちかく歌よみて来ぬ

⑬歌を作すよろこびありて斯くのごと貧しさ業に耐へて来にけり

三ヵ月に及ぶ療養生活は、その年収穫のコーヒー全部を売ってもなお足らないほどの費用を要した。命のたす

かったことは何物にも代えられぬ幸いと思わねばならないが、それでも負債が次第に増えて行くことを嘆かう気持は、幸いと思うべきであるとする気持ちを押しつぶすほどのものであった⑦。

病いによる心弱り、畑仕事の遅れや増える借金への恐れ、などでどうしようもなく落ちこんだ気持は、一途にふるさとを恋い、そこへ帰って行く日のことを思わせるのであった。この時点に至って、岩波菊治は村作りの理想も開拓精神も、もはや投げ捨てていたとみるべきかも知れない。そうして、しきりに短歌に関わることを詠うのである。

⑧の「先生」は島木赤彦。この頃の日伯間の郵便物は二カ月くらいはかかったから、やっと着いた歌誌「アララギ」を手にして、ああ明日は先生の忌日なのだと気がつくのである。そうして早速、赤彦の野分を詠った歌を書いた一巻の軸を友人から借りて来て、忌日に掛けて拝するのである⑩。

こうした機会にふり返ってみると、ブラジル生活十数年の間、相も変らぬ経済的な苦しさに耐えて、これという特長もない、あってもなくてもいいような歌を（果敢なき）を作り続けてという感慨も湧くのである⑪。しかし、そうは言っても作歌の営みは、やはり自分にとっては最大の喜びを生むものであり、これがあったればこそ、貧しい生活（業＝なり）にも耐えることができた、と思うのだ⑬。

この文の初めに、岩波の生涯を評価するのに「一生を歌に徹して生きた」とか「清貧に甘んじた」というような讃辞があるが、私は賛成ではないと書いた。しかし、短歌を成す悦びが、生活の上に生起する苦痛を或る時は横へ押しやり、忘れさせたことも事実であったろう。己れには短歌という創作の世界があると思うことが、日々の支えになることもあったであろう。

⑫の「アララギの中にしありて疑わず」というのは、短歌創作の大宗として、「アララギ」が唱導する「写生主義」に拠ったのは正しい選択だった、と言っているのだ。これは終生変らぬ信念であった。他に強要することはなかったが、「写生」の信念が揺ぐことはなかったのだ。

「岩波菊治歌集」の年譜には「昭和二年（二九二七年）『アララギ』の同人に推さる」とあるが、これは明らかに誤りである。一九三九年一月発行「椰子樹」（第二号）に池田重二が「歌友を語る」で岩波菊治について書き「昨年正月からアララギ準同人になった云々」としているが、この第二号は一九三八年十二月の印刷となっているから、池田の文章は一九三八年に書かれたとみるべきであり、その昨年といえば一九三七年である。「アララギ」入会が二十歳、ブラジル移住が一九二五年で二十七歳であるから「昭和二年同人」は、その間の年数からいって早過ぎて無理と思われるのである。池田重二の文章にある記述が正しいであろう。池田の文章が書かれた時期は岩波生

存中の而も壮年活躍期である。年譜の作られた死後数年という時期（一九五八～九年）とを参考として考えてもそう言うことができる。なお「アララギ同人」に関する本人の作品は見当たらない。

「アララギ」の如く、歴史も古く〝巨大組織〟化した結社誌は別格としても、どんな結社歌誌においても同人に推される、ということは並大抵ではなく、組織の中枢にある自他ともに認める実力者歌人たちの評価認定が必要であったのだ。岩波菊治が直接の師とした島木赤彦がなお久しく「アララギ」の中心人物であったとしたら事情は異なったかも知れないが、康彦は岩波が移住した年の翌一九二六年に逝去している。

ブラジルで一九三八年一〇月に創刊された短歌専門誌「椰子樹」でも、戦後の或る時期までは「同人制」をとり、普通会員が同人に推されるのは作歌者たちにとって大いに誇り得ることであり〝欣喜雀躍〟したのである。

⑭棉売りてふところゆたかなる人々が町に出で来て酒酌みてをり

⑮酒くみていたくゑらげる人々の言ふことは只ビッショの話のみ

「新しい理想の村作り」に挫折した作者の周囲には〝棉景気〟があった。日本人農家で綿を栽培する者が増えた原因には、コーヒーの甚だしい不況と一九三二年の「向

う三ヵ年植付禁止令」、霜害等があるが、一九三七～四二年の間は、その殆ど四〇％が棉作に携わるようになり、コーヒー栽培者を数で大きく抜いている（両者を栽培するものも勿論あった）。

⑭⑮は、棉を売って金を掴んだ者が町に出て酒（恐らくピンガであろう）を酌みかわしながら傍若無人に談笑しているのだが、話していることと言えばビッショ（二五の動物にそれぞれ番号を付したものに賭け、公式宝くじで出る番号と合致した者に金が払われる。ブラジル全土で盛んに行われる賭け）という賭け事で儲けた損した、という下卑たことばかりだと、その様子を蔑みながら見ているところである。同胞とは言いながら、その下品さに作者は嫌悪感を抱くのである。

岩波一家がアリアンサ移住地に見切りをつけて去るのは、「歌集」の年譜の通り一九三八年だが、その時期は明らかでない。またいよいよ去るに当っての短歌作品も見当たらない。

一九三八年といえば、この年の十月に現在も刊行の続いているブラジル唯一の短歌専門誌「椰子樹」が創刊されているが、この創刊号の「椰子樹投稿規定」をみると、作品選者になった岩波菊治の宛名はカンピーナス市郵函二八〇番となっている。投稿規定の締切日は十一月十日であるから、既にカンピーナース近辺に移転していたことがわかる。

「歌集」の作品の並べ方などの編集方針がどうであった

のか、今となっては調べようもないが、時間的にはかなり作品が前後入りまじっているような感じを受ける。また年譜にもかなり不正確なところがある（大正十五年と昭和元年が同じ一九二六年であることなどが失念されているのも一例で混乱を招く）。

⑯モジの野に萌えし早蕨太くして食せばうましも柔かなりき（モジ行）

⑰山沢を分け入りゆけば此処にまた日本の民が野菜作れり

⑱もろもろの草木ひとときに芽ぶくきまはこの国にして見ることもなし

⑲草原にバロン落ちしが一むらの炎となりて忽ち燃えぬ

カンピーナス移転は誰の世話で行われたのだろうか。力行会関係者でもこの地方に住んでいて、手引きしたのだろうか。⑯にはモジ・ダス・クルーゼスの名が出て来るが、移転前にこの地方を視察することがあったのかも知れない。⑰も恐らくモジ地方でのことであろう。サンパウロ州の奥地では当時は珍らしかった野菜専門の幾つかの日本人農家をみて、優しさが湧いたのであろう。サンパウロ市近郊の野菜果樹栽培農業の姿には、日本の山村に似た趣きもあったのだった。

⑱⑲にはブラジルの自然、風物への静かな観照がある。

⑳あら草の繁みに生ひし原墾き植ゑしトマトは青々と伸ぶ

二十一　トマト売りてゆたかにならば蝕ひし歯をぞ治さむ我も吾妻も

二十二　牧の中の低き湿地に囲なして我が食ひ料の野菜つちかふ

二十三　永かりし妻が眼病の癒えしとき幾とせぶりに身ごもりにけり

二十四　われらどち創めし村を暫しだに離れて住まへば恋しくもあるか

⑳から二十四までの五首はカンピーナス移転後の作品とみていいであろう。カンピーナスへ移ってまず栽培したのはトマトだったのだろうが、それで幾らか余裕ができたら夫婦の虫歯を治療しようと言っている二十一。妻は歯のほかに、アリアンサ時代から目を悪くしていた。「歌集」の編集者武本由夫は、アリアンサを離れた理由の一つは、妻の眼病治療のためであったといわれている、と編纂後記で述べているが、カンピーナス市は「眼医者の良いのが多くいる」との噂が高かったからそう言うこともあっただろう。そして眼病が癒えたとき、何年目かに身ごもったのだ二十三。移転が、幾らか妻の心身に精気を取り戻させたのかも知れない。

だがしかし、理想に燃えて開拓に取り組んだアリアン

サ移住地を、心から消し去ってしまうことはできない。たったこの間離れて来たに過ぎないのに、もう恋しく思われるのだ。アリアンサはやはり、岩波菊治にとってはブラジルにおける故郷でもあったのだ二十四。

二十五　海の魚の刺身食しつつ酒をのむかかるおごりさへ久しぶりなる

二十六　生活のことには触れず歌作り今日の一日は安らけくあり

二十七　日の本に帰りしが如き思ひあり林泉(しま)めぐりつつ倦くこともなし

二十八　酒を飲むを罪悪の如く思ひしは我が若き日の感傷なりき

一九三八年十月に歌誌「椰子樹」は創刊されたと書いたが、短歌専門誌を出そうという機運はかなり早くからサンパウロ市に住む若い作歌者の問で起っていた。

一九三〇年代の前半は、日本移民が数的に一番多く入って来た時代であり、その中には日本の短歌結社に所属して、かなり修練を経ている者もまじっていた。日本人社会の〝文運〟興隆の時代と言ってよく、短歌ばかりでなく俳句、川柳、自由詩、小説など競って日本字新聞に発表されるようになり、集団地ではあらゆるジャンルの文芸を含む小誌が謄写版刷りで発行されてもいた。

日本の結社誌に拠っていたと言う当時の作歌者をあげ

ると、小田切剣（清水美貴雄）＝窪田空穂・松村英一系「国民文学」、瀬崎涛声＝前田夕暮系「詩歌」、阿部青杜＝若山牧水系「創作」、酒井繁一＝窪田空穂系「槻の木」等がある。また横浜正金銀行リオ・デ・デャネイロ支店長経木文也は山下陸奥主宰「一路」の同人であり、それらの作品も新聞に現われるようになっていた。

そうしたところへ、一九三七年十一月にサンパウロ駐在日本国（当時帝国）総領事として赴任した坂根準三（「明星」系）が、坂根嵯峨、花瀬群涛、桜井薫、水島十三子の四つのペンネームをもって短歌を発表するようになり、在サンパウロ市の作歌者との接触が始まったため、歌誌創刊の機運は一挙に勢いづいたのであった。

「椰子樹」の創刊に至る道程でも創刊の後も、坂根準三と椎木文也は、ブラジルを去るまで経済的精神的支えの役目を果したのである。

日伯新聞歌壇の選者で、既にこの頃はブラジル短歌界の中心的存在となっていた岩波菊治も、もちろんこの機運の中にあった。相変らず農業生活は経済的にも時間的にも余裕はなかったが、それでもカンピーナスというサンパウロ市に近い地理的条件のために、少々の無理をすれば、若手作歌者たちとの接触は可能であった。その点ではアリアンサ時代とは比べものにならない便利さであったのだ。

二十五、二十六、二十七は「椰子樹」創刊の前頃の作品だが作者は既に存在したサンパウロ短歌会のメンバーと

共に、サント・アンドレー市郊外にあった三好綱一の「日本荘」へ吟行していて、その記念写真が創刊号に掲載されている。海の魚の刺身を食べ酒を飲むような集りがそこではあったのかも知れない。アリアンサの生活ではとても望めなかったことで、一つの「おごり」とさえ作者には思われたのだ二十五。また歌会では、生活のことには心を遣らないようにして、一日を作歌三昧にふけったのである二十六。日本荘には林泉が作られ松やつつじ、椿などが繁り、「雀の宿」と名づけた四阿も建てられ、囲炉裏には自在鉤が下がっていた。どこかで滝の音もしていた。林泉のたたずまいは日本のそれとはとうてい比ぶべくもないが、作者の郷愁の幾分かを癒してくれたのである二十七。

二十八は同じ吟行の時の作品とは限るまい。この頃の作者は、かなり酒（といっても多くはピンガだが）に親しむようになっていたが、或る時ふと、うぶで純朴だった時代を思い出したのであろう。「追悼号」石戸羊我の「岩波氏を偲ぶ」には岩波菊治が「僕は日本内地で伝道をしようと思った事もあった」と言ったとあるから、真剣なキリスト者たろうとし酒も煙草も、たしなむのは罪悪と思っていたのであろう。そのことを今は「若き日の感傷に過ぎなかった」と思うのだ。人間の心の美醜、その社会の複雑微妙な相を見てしまった今は、己れの若き日の純朴な志向が、一片の感傷だった、と思われて来るのである二十八。

なお余談だが、この日本荘吟行記念写真には聖州新報社主香山六郎もまじっている。そういう時代であった。

岩波菊治のアリアンサ移住地退去に至る事情の幾つかを、短歌作品の上で探って来たが、「歌集」編集者で岩波と最も近かった武本由夫のこれに関する見解を紹介しておきたい。

『ー略ー昭和十二年、十数年住み馴れたアリアンサを出てカンピーナス方面に移転した（註、十二年は十三年の誤り）。その主なる理由は、表面的には、それまでの過労のため、幾分衰弱気味であった自身の保養と、夫人の眼病治療のためであったと言われている。しかし、私は今以て、それを主目的とは考えていない。ここに先生が折にふれて語った言葉から想像するところを書いてみると、第一にアリアンサ村が、先生の理想とするような村として成長しなかったことに対する失望、第二に先生と前後して入植した文化程度の高い人々が殆ど事業に失敗して、次々と離村し寂蓼に堪えかねたこと、第三に短歌制作上の行き詰り打開と、短歌を普及する為。私は以上の四つの理由を数えて、先生の離村決意の原因と見ている。

歌人総領事坂根嵯峨（準三）の赴任あり、阿部青杜の出聖あり、次いで歌誌「椰子樹」発行の機運あり、と言ったような当時の中央歌界の活気ある状態を思いあわす時、私は特に第三のものが、最も大きく先生の心をゆすぶり、出アを決意させたのではないかと、考えている。

ー略ー出ア以来転々と居を移したために、常人をはる

かに抜く精農ぶりにもかかわらず、経済的基盤が確立せず、アリアンサ時代に比較して不如意の時代が績いた。モジに土地を購入して落着いて後、ようやく、果樹栽培の上に、花卉、疏菜栽培の上に、篤農家としての先生の手腕が発揮された。経済的にも、やや余裕を生じ、四人の子らも成人して、和楽に富んだ老後が約束されるかに見えた。又先生が口癖のように言っていた全伯歌行脚の実現も期待できる時代を迎えたが、終に寿命はそれを許さず、一九五二年十一月二十三日、胃潰瘍のため急逝したのであったー略ー』

岩波菊治を純粋に師と仰いだ者の中でも、一番関係が密接であり（アリアンサ時代からそれは始まっている）、特にモジ時代は、岩波の病気或いは農事繁忙時は新聞雑誌の選歌を、〝名代〟で行ったこともあると語っていた武本由夫であるだけに、考察はかなり妥当なものであると受止めることが出来るが、ただ理由第三の「短歌制作上の行詰り打開と短歌普及」を最大のものとする、というのはいささか〝深読み〟のきらいがありはしないか。

もちろん、既に記したように、短歌だけでなく〝移民文芸〟興隆の機運に満ちた時代であったし、「椰子樹」創刊の動きのなかに彼自身もあったのだから、自己の作品世界の新たな展開も短歌の普及向上への意欲も湧いたであろうが、それはあくまでも彼の精神生活の上でのことではなかったか。実生活の上での第一の選択肢ではな

かったのではないか。

私は、岩波菊治は、歌人である前に、農人たろうとした人だと思っている。新しい村作りは、彼にとっては一つの信仰に近いものであったのだが、それがアリアンサでは完全に裏切られたのであった。武本由夫が言っているように、岩波菊治はいうところの篤農家型の人間であったから、ブラジル内陸地帯のどちらかといえば粗放な農業形態に未来図を描くことができなくなり、大都市近辺の集約農業に新生面を拓こうとしたのではなかったろうか。「全伯短歌行脚」といっても、それは余暇を得て、同好者を訪ねて励まし、共に作品の向上を図る、といった意味のことであったのではないか、と思うのだ。終生添削料と言ったものを受けることはしなかったし、短歌を生活の資にすることなど、彼にあっては論外のことであった。　農人たろうとしての骨身を削る実践があったが、「理想の村」作りは一片の夢に過ぎないことを十数年を掛けて知らねばならなかった、底知れぬ挫折感が「脱アリアンサ」を決意させたのであろう。

アリアンサを去って終焉の地となったモジ・ダス・クルーゼスに落ちつくまでに、岩波一家はカンピーナス、ロッシンニア、スザノと転々と居を移している。「歌集年譜」はその跡をたどってはいるが、移転の年にかなり誤りがあるので資料によって訂正しておくことにする。

一九三八年に移ったカンピーナス市近辺（シャパドン地区）には、まる二年とは住まなかったようで、一九四

〇年二月発行の「椰子樹」では、選者岩波への投稿宛名はロッシンニア郵函一七番となっている。雑誌印刷の事情等を考えると、一九三九年後半にはここへ移っていることになる（「年譜」にはロッシンニア移転なし）。

スザノ北部地区移転一九四四年七月（「年譜」では一九四三年）。これについては岩波自身が「林泉」第二号（一九四五年一月発行）に「去る七月初旬、スザノ駅移転」と書いている短歌作品前書きからの推定。

モジ・ダス・クルーゼスのカッペーラ区移転一九四六年三月（「年譜」では一九四四年）。これを推定する資料としては「林泉」第三号に岩波自身が書いた「酒座漫吟」があり、それには「昭和二〇年（一九四五年）六月十日に小田切剣と清谷益次が来て即席漫吟歌会を催しこれに八巻培夫（スザノ在住）が加わった」と記している。私の記憶でも、小田切剣に誘われて訪ねたのはスザノであり、これが人家かと疑われるほどの小屋に住んでいた。

右の記述からみても、モジ移転が一九四四年でないことは明らかである。また同じ「林泉」に「昨年三月モジ、カペーラへスザノから移転」と記しているので、一九四五年六月にはまだスザノにいたのが明らかなのだから、「昨年三月」は一九四六年のそれと推定できる。

註、「林泉」は戦争のため第十一号で廃刊を余儀なくされた「椰子樹」が、戦後の一九四七年に復刊するまでの約七年間、モジ在住の作歌者数人が中心となって謄写版

印刷で秘密出版した歌誌。「椰子樹」の廃刊から復刊までのつなぎの役を果たし、第三号まで発行されている。

ついでに記しておくと、ロッシンニア居住時代にも私は小田切剣と共に訪れている。牧場か荒れ地の、背後は低湿地になっている傾斜に家はあり、至極粗末なものであった。この家は後年カンピーナス市地帯を汽車で通る折には窓から望むことができたが、今はサンパウロ州地図にはロッシンニア町名はない。

岩波のロッシンニア時代については「追悼号」に瀬崎涛声の文「カンピーナス時代の岩波氏」がある。

「ー略ーその頃、岩波氏はロッシンニアに移っていて、隣人と脱柵する家畜のことについてもつれ合い、面白くない日々を送っているということも聞いた。ー略ー手土産を持って久しぶりに岩波氏が訪ねて来てくれた。その時は大東亜戦争も大分進んでいて、伯国でも日本人に対して可なりの圧迫を加えて投獄などもしていたが、ロッシンニアに住んで居た岩波氏も家宅捜索を受けて書籍や歌稿一切を取り上げられ、果ては獄にまで投ぜられた、ということであった。ー略ー家は、今でも汽車の窓から見える。裏側を石で築いて作られた古いコロニアの独立家屋で、裏にはタンボールの風呂桶が据えられてあった。ー略ー家から四、五百米離れたトマテ畑につれて行ってくれた。畑は山裾の狭い窪地で、砂の勝った肥料気のない土地であった。トマテは未だカンテイロにあっ

て、苗には元気がなかった。パウリスタ線の汽車に乗ってロッシンニヤを通る度毎に、あの石垣の上の古家を眺めやるのであるが、サッコで屋根をした風呂場がないだけで昔と変りはない。しかしもう岩波氏は亡いのである。」

右の文によって、岩波菊治が官憲の捜査を受け、命の次くらいに大切な書籍、作歌ノートなどを掛収されたのがロッシンニア時代であったことがわかる。野中の荒れ家が捜索の対象となったのは、不仲の隣人の密告でもあったのだろうか。生涯の最も暗い時代の姿が右の文では描かれているが、ロッシンニア在住は比較的に長かったのである。

一九三九～四〇年　四十一～二歳

壁にかけて仰ぐ……

①歌も詠まで貨殖の道にもはらならば今より生活豊けからむか

②才能を恃むにあらずこつこつと歌詠みて我や二十年となりぬ

③二十年歩み来りしこの道の尚はるかなる嘆きをぞ持つ

④一段組みの選歌に載らむ事のみを秘かに願ひ歌はげみ来し

⑤一夜さに五つ六つの歌作り心たひらかに在りといふ
べく
⑥心待ちに待つらん人を思ひつつ柵子樹の選歌いく夜
つづけぬ
⑦壁にかけて仰ぐ赤彦先生の短冊の縁蝕ひにけり

戦前から「歌人には貧乏人が多い（貧乏人ばかり）」というのは通り相場になっていた。農業に携わっている者も多くはたしかな経済的基盤を築くには至っていなかったし、都市生活者は年齢も若く、概ね低給料の生活者であった。岩披菊治はそのうちの最たるものとみられた時期もあったのである。圏外の人からみれば、短歌などの、金儲けとは絶対につながらない遊びごとにウツツをぬかしているからそうなるのだと見られることもなくはなかったのだった。岩波自身もそのことは承知していた。世人が言うが如くに、歌にかかわることなどはしないで、金をため得ることに専心していたら、自分一家の生活は現在よりも豊かであったろうか、と自問しているのである①。そうも言えるようだし、そうかと言って生業を歌のためにおろそかにした覚えはないではないか、と反撲もしているのだ。たしかに歌に関わることで費した時間は相当なもので、これを金儲けにつながることに利用していたら、という反省も、現状が現状であるだけに噛みしめなければならなかったのである。だが、このような思いを経験したのはこの作者一人とは限らない。短歌に

関わった時間を、せめてブラジル語の勉強に使っていたら、今頃はもう少し……という悔いを抱いた作歌者は多かったと想像される。

②は、特に自分に、短歌の上での特別な才能があると思ったこともなく、ただ地道に作りつづけただけなのだが、それがもう二十年にもなるという感慨（岩波が一九一八年、二十歳で「アララギ」に入会して島木赤彦に師事したことは既に記した）。そうして二十年間、こつこつと短歌を作る「道」を歩み緯けて来たが、この「道」はどこまで行っても、その深み高みに到りつくことのできそうにないものであって、その遠さ（はるかなる）に嘆くばかりであると言っている③。淡々と詠まれてはいるが深沈たる心情がにじみ出ていて、後輩たちの心を打つ作品であった。なおこの時代までは、短歌の創作を人間鍛練の「道」と観ずる態度の作者は多かった。いわゆる「短歌道」である。

④の「一段組み」というのは結社雑誌の「その他大勢」の域を抜きん出て作品一首が一行に組んで印刷される水準に達したことを指す（作品水準が劣るものは二、三行にわけて載せられる扱いを受ける）。その一段組みの扱いを受ける水準に達したと認められることだけをひそかに念願として、作歌に励んで来たのが今はかなったのである。前出池田重二の文にある如く、一九三七年に「アララギ」の準同人に推されたのだとすれば、その頃から一段組み扱いはされていたのであろう。この歌は追懐して

のものかも知れない。
短歌のこと生活のこと、あれこれ考えればきりがないが、夜、創作に没頭できるときは最も心が平静であった。一夜のうちに五、六首も作ることができるというのは、気持が短歌の制作に集中できる状態にあるからである。だがしかし、「在りといふべく」には心底からの平安ではあり得ない翳りが自ら出ているとみるべきであろう。それほど当時の作者には心の平安がなかったのだ。創作に向かう時だけが僅かに平安であり得たのだった。
短歌に関わることは自作品創作だけではない。創刊された「椰子樹」同人・会員の投稿作品の選と短評と、新聞歌壇の選もあった。自らがその作品には「るい骨」する人であっただけに、それぞれの作歌の苦心には理解が深い。自作品が選を受けて新聞雑誌に発表されるのを待ち設ける気拝が十分にわかるので、畑仕事で疲れた心身を励まして、幾夜もつづけて選歌をするのである⑥。
岩波菊治は、ブラジル移住に際して師島木赤彦からその作品の短冊や色紙を幾枚か贈られたらしい。アリアンサ移住地の開拓時代にも常に壁にかけて眺め、心を遣っていた。眺めると言うよりも「仰ぐ」という心の方が強かったことがこの作品⑦でわかる。短冊を掛けるのは土壁ばかりであったから、染みも虫食いも急速に進むのである。かけがえなく、或る時は心の支えともなった師の短冊色紙が傷ついて行くのは耐え難いほどの思いであったのだ。

⑧雑草を分けてそこばくの蕎麦刈りぬ二三度は蕎麦を打つに足るべし
⑨食料に余れる野菜売上代にて子ろの学用品を買はしむ
⑩金欲しさ願ひは今の吾よりも妻は一途に望みゐるらし
⑪移り来て野菜乏しき明暮れは南瓜の蔓も煮て食うぶなる
⑫妻子率て海に遊ばむゆとりすらなくて在り経ぬ業に追はれつつ
⑳朝々の寒さ到りぬボルドー液に荒れし我が手に皹（ひび）きれにけり
⑭欧州戦乱の影響は遂に化学肥料の暴騰となりて我らに及ぼす
⑮五十ミルの古着の服を恥づるなく身にまとひつつ三とせ過ぐしし

カンピーナス、ロッシンニア時代の作品であろう。いわゆる生活詠だが、岩波菊治の生活詠はけれん味がいささかもなく、生活の実態がそのまま表出されている。

信州人岩波と蕎麦は切っても切れぬものであったようで、アリアンサ入植ごろの歌にも蕎麦が出て来る。新しく移った地でも蕎麦は蒔かねばならぬものと決まっていたのだ。主作に手間をとられて、蕎麦を植えた畑は雑草に覆われた状態になっていて、草を分けなければ刈り取

れないのだが、それでも二、三度は打つに足るものが収穫できたのだ⑧。

いつしか子供も学齢に達し、学用品も買わねばならない。おかずにして食べた残りを周辺の住民にでも売ったのだろう。その金で学用品を買うことができたのである⑨。野菜の残りを売ってやっと子の学用品が買えるというのだから、赤貧洗うが如しであって、子供の成長をみるにつけても、妻の金の欲しい気持は募るのである。日々の生活と畑作りのために、金の欲しさは夫も変りないが、妻の方がより直接的に、身を切るような欲しさなのだろうと思いやるのである（１０）。

南瓜の蔓は、イタリアやポルトガルからの移民は普通の蔬菜として食べる習慣があったが、日本人は日本での生活では経験がなかったのではないか。しかし、移って来て間がなく、野菜も十分にはとれない時代には、野生の南瓜の蔓が食事毎のおかずになった⑪。

金のゆとりなく、生業蔬菜作りに寸暇もない生活では、何年経っても妻子をつれて海をみにゆくこともできない（１２）。この時代は渡伯後十四、五年経っているのだが、海をみるというのは内陸地の開拓に従った者にとっては一つの憧れにも等しかった。それは、日本において、山国に育った者と海近く生活した者とを問わない、念願だったとも言える。移民は、意識するしない、に関わらず、移住に際して数十日をかけて渡った海を、故郷・故国と己れをつなぐ唯一の道と、心の底にたたみ込んで思

いつづけていた。海をみるのは、その道を目にすることにはかならなかったのである。

だが、十四、五年間海をみることができなかったのは、岩波夫妻ばかりではない。内陸地で農業に携わった者の多くが、海に憧れながら、遂に生涯みることもなく、ブラジルの赤土に骨を埋めなければならなかった。サンパウロ市周辺の地は海にそれほど遠い訳ではないが、それでも、それだけのゆとりがなかったのだ。

内陸地の農業では、直接水を扱うことは少ないし、寒いと言ってもそう長く績く訳ではないから、手にひびが切れることは少ない。だが蔬菜栽培では潅水、消毒と毎日が水びたしと言ってもいい。寒い季節にはひびが切れることも珍しくはない⑬。

一九三九年九月、ドイツ軍のポーランド侵攻が始まり、直ちに英国の対独宣戦布告があって、ヨーロッパは一挙に大戦必至の様相を呈して来た。このため、化学肥料の殆どを輸入に頼っていたブラジルの農業者は、忽ち品不足を見越しての価格暴騰に会わねばならなかった。サンパウロ市近郊といわれる地帯の土壌はもともと肥沃度が低く、而も多くが作り荒した後を借地するのであったから、肥料が不足しては息の根を止められるに等しい。欧州戦乱は対岸の火ではなかったのである⑭。

サンパウロ市に近いところに移った岩波は既に述べたように短歌関係その他で、人に会う機会が多くなった。それでアリアンサ時代のように仕事着のままでどこへで

も出かけるということができなくなったのであろう。五十ミルの古着を買ったのだが、古着だと言って恥かしく思うこともなく三年が過ぎたのである⑮。当時の短歌仲間といえば坂根総領事や阿部青杜などは別格として、概ね若く貧しかったから、古着の世話になったのは何も岩波だけではなかったのではないか。サンパウロ市のルス、ソロカバナ二駅の周辺は古着商売の店が軒並みあって繁盛していた。日本人経営の旅館などでも田舎出の客が古着を買うのを世話したのであった。だが古着は古着である。恥じはしないが、みじめな思いが湧かないでもない。

⑯この国の藜（あかざ）は葉ぶり小さくて丈さへ低く
　実を持ちにけり

⑰ふるさとの方言はおはかた使はねど稀々にして口に
　出づることあり

⑱キロ十一ミルの値は言はず塩鱈を焼けば恩はゆ故郷
　信濃を

⑲十五年過ぎし月日はうからからと交（かた）みに疎く
　なりにけるかも

⑳いついつと帰る日知らぬ故郷の信濃の国の山川を恋
　ふ

⑯の「この国のあかざは葉ぶりが小さい…」というのは、故郷信濃のそれは葉の姿（葉ぶり）が大きく丈も伸び伸びとしていることとの対照で言っている訳で、眼底

にはふるさとのあかざの茂る風景がある。しかし、ブラジルの藜も土が沃えていれば二メートル以上にも伸び、穂状の花房は藤の花のよう豊かに垂れ下がることがある。

ブラジルの日本人集団地は、北は北海道、南は沖縄までの出身者の寄り集りであるから言葉は次第に混じり合って来る。そこにはなるべく国訛りは使うまいとする気持も働くが、ひょっとした調子で思わず口に出るのである⑰。そうしていつの間にか〝コロニア語〟と呼ばれるものが拡がるのであった。

一九四〇年当時の「十一ミル」が、今日の価値でいかほどのものか調べるのは容易ではない。鱈はブラジルではバカリアウで、現在ではなかなか庶民の口に入らない副食物だが原生林開拓時代からこの時代までは、干し肉（カルネ・セッカ）と共に、比較的手に入れ易い食品であった。当時の最低給料は二二〇ミル程度だった筈だから、十一ミルは最低給料の二〇分の一ということになる。それはとにかく、十一ミルが安いか高いか、見当はつかないが、塩鮭を焼くと冬の信濃が思われるのである⑱。「値は言わず」という表現は、たまたま買ったものが安くはなかった、という気持がこめられているようだ。鱈は俳句の季語では「冬」の部に入るから、作者はもちろん冬の信濃に思いをはせたのだろう。

⑲⑳も望郷歌。ブラジル日本移民八十数年、戦前移民のすべてが半世紀以上をこの国に住んでいる現在から思うと、十四、五年などはまだ〝新移民〟というところ

だが、既に故郷の家族、親類とは殆ど手紙のやりとりもないほどに疎遠になっているのだ。まずそのことが顧られるが、望郷の念までが薄くなっているのではない。それどころか、今となっては帰って行くあてもなくなったふるさとが、その山や川が、余計に恋しくなっているのである。「ふるさと」を詠うとき、岩波菊治の短歌には抑制がなかった、と思われるほどひたむきに恋しさを表出している。

二十一　小学校の皆勤賞に頂きし言海は三十とせ近くも離さず

二十二　わ行以下を欠きしままなる言海は三十年近く使ひ古しぬ

二十三　師走といふ実感は湧かず青々と伸び繁りたる夏草の原

「言海」は大槻文彦著の国語辞典。小学校の賞としては当時かなり価値あるものであったろう。「皆勤」というのはまず健康にめぐまれ而も勉強好きでなければなかなか達成できなかった。作者後年の風貌と性格とが二十一、二十二には窺われるようである。

ブラジルの十二月は暑い盛りに向う季節でとても日本の師走、正月といった気分にはなれない、というので、これは日本移民のすべてがこの季節を迎えると催した感慨である。

一九四一年　四十三歳

たはやすく相対死も……

①徳尾君武本君仲間君の歌がアララギに載れるを見れば我も励むべし

②トマトの忙しき業に明暮れてこの三月あまり歌詠まざりき

③三月あまり歌怠りてありつると今宵しみじみ思ひ嘆きぬ

④我が歌がアララギ叢書の一冊となり世に出でむこそ今の願ひぞ

⑤赤彦先生の教したしく蒙りしわが身の幸は一代おもはむ

短歌の「道」は、「アララギ」が唱導する「写生」以外にない、との信念をゆるぎなく持っていた岩波は、彼の周辺に対して「アララギ」への投稿を強くすすめた。その結果として幾人かの作品が常時「アララギ」に掲載されるようになり、作歌者たちの励みになったのであった。

徳尾君は徳尾渓舟（恒寿）、武本君は武本由夫、仲間君は仲間美登里（南米堂書店主、戦後の「南米時事」創刊者）である。これら三人の歌が掲載されるようになったのを見て、ああ、自分も作歌に励まねばならないぞと言っているのである①。トマト作りの生業の忙しさのた

めに、三ヵ月余も作歌に心を集中することができなかったのであるが②、忙しさのためとはいえ、作歌を怠ったことが、この宵はしみじみと嘆きとなって思われるのだ。もちろん、周囲の連中の作品が「アララギ」に載ったことが、余計に自らの怠りを責めるのである③。

何度も記すことだが、新しい理想の村を作るという希望も空しくなって、アリアンサ移住地を棄て去った岩波は、このことによってやはり心は深く傷ついていた。挫折感はなかなか消えなかっただろう。かっての壮大な希望は壊え去って今は似ても似つかぬその日暮らしのしがない蔬菜栽培に頼る日々である。これという期待も持てない日々の農作業の中での願いといえば、ただ一つ、自分の歌集が「アララギ叢書」の中に加えられて、一冊の本になることであった④。言うまでもなく、「アララギ」のような強大な短歌結社の叢書の一つに加えられて出版されるということは、作品の上で、結社の中でゆるぎない評価をかち得ることが前掟となる。同人であるからといって、皆が皆、叢書としての歌集がアララギ社から刊行して貰える訳ではなかったのであった。

そうであればこそ、実生活では非常に苦しいところに落ちこんでいた岩波菊治は、今ではその精神の拠りどころに等しい自分の短歌作品が、尊奉するアララギ社によって評価を認められ、証左として叢書に加えられることが、この時点でのただ一つの願いになったのである。それにしても思われるのは亡き師島木赤彦である。赤彦

によって岩波は短歌創作の精神を植えつけられ、方向を指し示されて生涯疑うことはなかった。今は心の拠りどころとさえなっている教えを受けたことは、自分の一生にとってなにものにも代え難い幸いだったとふり返るのだ⑤。

「今のただ一つの願い」であったアララギ叢書としての歌集刊行は、しかし岩波の生前も死後も叶えられることはなかった。このことの事情について武本由夫は「岩波菊治歌集」の「巻末記」で次のように述べている。

ー略ー岩波菊治歌集の刊行は、先生没後ただちに企てられたのであった。それは、先生の全作品を取りまとめ、日本のアララギ杜に送り、アララギ叢書の一つとし刊行して頂く、という考え方で、話が進められたのであった。

なぜ当地で刊行するということが企てられなかったか、というと、岩波先生は生前、私達にもしばしば「最後の望みは、自分の作品が、アララギ叢書の一つとして歌集になることだけだ」と言っておられ、そのことを歌にも作っておられたので、是非、先生の望みを実現させてあげたいとの念願からであった。

先生の死後まもなく、先生の同郷の幼友であり、矢張り作歌上の友人でもある坪内広代氏が訪日したので、アララギ社にそのことを交渉して頂いたが不調に終り、私たちは、ちょっと意外の感に打たれた。というのは、岩波先生は、只一人海外在住のアララギ同人であるから、

アララギとしては、重要視している人物に違いないと、合点していたのであった。又、先生の作歌活動というものは、実にアララギに忠実であって、短歌に関する言行はすべてアララギ絶対であった。ー略ーこんなにもアララギに打ち込んでいる先生の気持ちが、アララギ社の首脳部にわかっていない筈はないと思っていた。第三に、アララギ同人としては只一人海外在住者であり、アララギ歌風の普及に三十余年、孜々としてつとめ、多くの作歌者を養成したその功績に照らしても、先生の歌集が、アララギ叢書の中に加えられるのは当然であるという風に考えていたのである。

ところが、いざ交渉してみると「どっこい、まかりならぬ」というのである。これは、願い出た私たちの気持が充分に伝わらなかったのではないか、そんな筈があるわけがない、というので、その後椰子樹同人の池田重二君（前出）が訪日したので、同君に再交渉を頼んだのであった。池田君も熱心にアララギ社と交渉してくれて、ようやく「アララギ叢書には加えられないが、アララギ社の関係歌集として刊行してやろう」というところまで取りつけてくれた、しかし、その条件は、全歌稿の一首々々右に製作年月日を添えること。全歌稿中、土屋文明の選んだ作品だけで歌集を編む、というのであった。現存者なら、作品一首ずつに製作年月日を添えることも出来ようが、既に死亡した人の作品に誰が製作年月日を付け得るか、これは難題というものである。又、私たちとして

は、先生が生存中、何回も歌集を刊行していて、最後の一つをアララギ社にお願いするというのであれば、土屋選歌だけで編んで頂いてもよいと思う。しかし生涯に只一の歌集であるから、母国一流の歌人の目から見て、鑑賞にたえるところの秀れた作品ばかりでなく、芸術作品としては、多少劣るところがあっても、ブラジルという特異な国における移民としての生活感情の浸んでいる作品、生涯の曲り角、曲り角に当って作られた作品であり、何らかの意味で、菊治そのものの面影を伝える作品も載せたい、という願いがあったので、アララギ社が出した条件を呑むことが出来ず、結局、池田君の交渉も成立しなかったのであった。

私たちとしては、アララギ社の言分も解らないことはない。アララギといえば、日本最大、最高を自負する結社であるから、同人の末席であるとはいえ、ブラジル在住歌人の作品など、無条件でアララギ叢書の一つには出来ないであろう。総師土屋文明のめがねにかなった作品のみで歌集を編むというのが当然であろう。しかし、ブラジルに在住している私たちの考え方が自ら別であるのもやむを得ない。ー略ー故人としても、私たちとしても、アララギが只一つの目当てだったので、こんなことなら、むしろ、当地で刊行した方が良いということに傾いたのであった。ー後略ー。

武本由夫の記述にあるように、ブラジルでの歌集刊行を決めはしたものの、資料収集や経費の問題もあって、

歌集の完成は岩波死後七年を経た一九五九年になったのであった。

直接の師である島木赤彦がもし存命していたら、事情は変っていたかも知れないが、赤彦は岩波移住の翌年の三月二十七日、五十一歳で亡くなっている。「もし」という仮定が許されるならば、岩波が死んだ一九五二年に赤彦が健康で生きていたとすればまだ七十八歳である筈だから、なお「アララギ」に関与していて、岩波歌集刊行に力を貸し得たかも分らないのである。

⑥山の中の町としいへどわだつみの生の魚ありて我に食はしむ　（バストス行）

⑦バストスに二日居し間を蕎麦食ひて尚飽かずけり蕎麦好き吾は

⑧海のもの山のものなど沢にあれど吾は足る只蕎麦だに食へば

⑨たはやすく相対死もなし得むと一途なる君はたかぶりていふ

⑩午前二時すでに過ぎしが話やまず夫婦の愛情などを語りて

⑪ひたすらに吾を信じて師と頼む愛憐しき人に心寄りゆく　（某女に）

⑫傘さして夜更けの街を佳き人と共にし行けば心揺らぐも

サンパウロ市の近辺に移って来てからの岩波は、生業の忙しさと貧しさは相も変らずでありながらも、アリアンサ移住地時代のような人間関係の煩わしさからは開放されるところがあったようだ。心を許す短歌仲間も比較的近く住んでいたし、できるだけそれらとの交流に努めたようでもある。

一九三八年の十月に専門歌誌「椰子樹」の創刊もあって、コロニアの短歌界は成熟の時期に入ろうとしていて、戦前短歌の最後の輝きのような時代とも言えた。地方歌会も生まれる機運が強く、短歌作者の拡がりという点からみれば、第二次大戦前夜とも言うべきこの時代が最も大きかったのである（戦後は、都市部への作者の集中が始まり、地方歌会は衰亡して行く）。

岩波が小田切剣と共にバストスを訪れたのは一九四一年八月で、この両人を迎えて「バストス短歌会」が二日に発足している。

余談めくが、小用切剣は当時、アドリアチカ保険会社の日本人部を担当していて地方を旅行する機会が多かったから、岩波誘い出しに一役買ったのではないかと想像する。とにかく小田切剣は誘い出し上手で、私なども彼に誘い出されてロシンニア、スザノ両時代の岩波を訪ねている。

バストスは日本人の一大集団地であったから、日本食の材料も豊富だったのだろう。当時の生活では、食膳に上ることも少なかった海の魚の料理も、蕎麦もふんだん

に岩波らのために用意されていたのである。心をこめたもてなしに、手放しで喜んでいるのが⑥⑦⑧の歌である。

⑨⑩⑪⑫は一種の「相聞歌」であって、既に壮年期にあった岩波としては珍らしい作品である。

⑨は、バストスで会った一女性（⑪に某女に、とある）が岩波に対って、先生となら相対死にも私にはできますと、心を昂らせて易々と言ってのけたことを詠っている。「相対死に」は言うまでもなく情死、心中のことで、「穏やかならぬ」言葉である。歌会も終って、短歌論から人生論、夫婦論、或いは恋愛論にまで話題は及んだのだろうが⑩、日頃、作歌の上で尊敬し慕ってやまない師に対い合って、心ゆくばかり語り合うことを得る喜びに昂奮して、一人の女性作歌者がこともなげに言い放ったのだ。

驚くと共に、木石ならぬ壮年の岩波が、いたく心を動かされたこもは想像できる。そうして、相手を「愛憐（いと）しい」と感じ始め、心が強く惹きつけられるのである。この気持は、歌会の後の宴と交歓の時も過ぎて、雨の落ちる深夜の街を（恐らく相合傘で）その女性を送って行く道すがらもなおつづいていて、自らの心が女性を愛憐しむことで動揺するほどになっていることを知るのである⑫。

「バストス行　その他」十四首は「椰子樹」第十一号（戦前の最終号、一九四一年十月発行）に掲載されている。しかし⑨の如く相手の言動を詠うものはあるが、⑪⑫のような自らの心の揺れを表現したものは含まれていない。

やはり、世間を、就中、妻の心を憚る思いが岩波にはあったからであろう。

「某女」とは、当時バストスに住んでいた葛西妙子（本名喜美・故人）である。東京府立高女を中退し、産婆の資格を持って移住、バストスでは産婆を業としていた。いわば当時の女性としては知識層に属し、性格の強さを示す短歌を多く発表し、作歌水準も「椰子樹」の中では第一線にあるとされていた。

岩波と葛西が初めて会ったのは、一九四〇年四月六日夜の坂根準三総領事送別会の折であるが、作歌上の師弟としての心の交流は長かったのである。

バストス歌会に岩波を迎えた時の蔦西の歌には次の如きものがある。

海の幸山の幸とはゆかなくに心のたけを並べ参らす

親しみて先生と語らふ時の間の今のうつつをたぬしと言はむ

午前二時過ぎたる夜頃先生に送られし縁ぞ忘らえなくに

真向ひて静かに箸を取らせ給ふ和めるみ顔親しく仰げり

葛西妙子は短歌仲間の間で「ブラジル歌壇の与謝野晶子」とひそかにアダ名をつけられていた。激しい気性を正直に出した作品と容貌とに、幾らか似ていないことも

ないところがあったためであるが、「追悼号」に書いた「思いやり深い岩波先生」は、岩波、葛西両人の風貌や性格の一端をよく物語っているので抄出する。

ー略ー私が先生に初めてお目にかかったのは、十三年前、坂根嵯峨氏の送別歌会に遥々上聖した夜であった。その懇談会の席上で先生は「葛西さん、貴女は歌を見、また手紙を通じて、兼々想像していた通りの人でしたよ」と仰言った。バストスへ帰ってからも度々お手紙を頂き、アララギや土屋文明先生の短歌入門を送って下さった時は、余りの嬉しさに夢中になり、夕飯の支度をしながら読んで居た為、御飯を黒焦げにして了って主人からさんざん叱られた。ー略ーパラナ短歌大会にお伴した時、御持参の大きな絹のレンソを、埃を被る私を見兼ねてお貸し下さったので、どの位助かったか知れないのに、不注意にも飛行機に忘れて来た。又旅行中は先生が弟子である私の重い鞄を持って下さって、その時はど女に生まれた冥加を感じた事はない。その上に私が人一倍の愚図だものだから先生は「何の事はない、女役者を一人連れて歩いているようなもんだ」と、おこぼしになった。戦前、私の二人の子供が自炊していた頃の話であるが、ある早朝、戸を叩く音がするので、寝ぼけ眼で飛び起きて扉を開けて見ると、薄暗い中に汚い服を着た大男が、ぬうっと立って居て、「僕は岩波です」と言ったそうである。余り唐突だったので判断がつかず、てっきり子供達は乞食

がやって来たのだと思い込んで驚いたそうだ。子供達の考えでは、伯国一の短歌の先生なら厳しい容貌と立派な服装をして居るものと思うのも無理のない話である。世の俗人のように一切辺幅をお飾りにならなかった岩波先生は正にこうした御方であった。ー後略ー。

このバストス歌会当時、岩波菊治四十三歳、葛西妙子は二歳上の四十五歳、短歌の師弟関係以外の男と女の感情が生じても何ら不思議はない。

一体に、コロニアの作歌者の間で往時からよく言われるし「歌につながる縁（えにし）」という言葉と想いは、一種独特な心の交流から来たものであった。会ったこともない同士で、〝血縁的〟な心の接近があり、新聞雑誌に現われる作品と名前だけで強い仲間意識が醸成された。作品の上で、一歩先を歩む者は憧れの対象にさえなったのである。これは俳句川柳などの短詩型の世界でもそうなのではないかと思うのだが、移民という、真に心を許し合えるものを周囲に見出すことの難しい境涯が生む、或る種の孤絶感から来ているのではないかと考えられる。心の支え合いの場と相手をそこに見出したのではなかったろうか。

この傾向が露わなものになると、圏外のものからは〝特種部落〟視されることにもなりかねなかったのであった。

⑬そこばくの蒔きし大豆は我が家の味噌を作りてなほ余るべし

⑭準教員の講習了へしのみにして教員生活を遂にせざりき

幾らか心足りている生活の歌⑬と、淡い苦さを含む回想である⑭。

一九四二年　歌集収載作品なし

一九四三年　歌集収載作品なし

「岩波菊治歌集」には一九四二、四三両年の作品は一首も収録されていない。この間、一首の歌も作らなかった(できなかった)とは殆ど信じられないようなことであるが、このことについては、一九五四年五月発行の「椰子樹」第三十七号に、岩波の遺稿として「嵯峨氏の思い出」が掲載されており、その中の「感想」に次の文があり、事情を明かにしている。

註「嵯峨成」は坂根準三総領事のペンネーム。

それにしても、数十年続けて来、貧しく厳しい農耕生活の中で、或る場合には殆ど唯一の心の支えとまでしていた作歌を断念するに至ったのは、戦時下で敵国人扱いを受け、書籍・文書類を押収され、収監までされたことが、如何に深刻な精神的打撃を与えるものであったかを

思わせるのである。

感　想　（文、かな使いはそのまま）

去ぬる一九四二年四月、受難週間、突如として理由なく収監せられ、生まれて始めて牢獄の苦を味はひ、剰つさへ幾年間のアララギ、歌稿など没収され、殊に未発表の歌の百数十首、諸先生の色紙、短冊なども押収されて如何になりとや知らず、それや之にて歌を作らむにも全然拠りどころなく、従って二十年の作歌生活も遂に棄ててしまった。殆ど二年間全然作歌の気分にもなれずでありたが、南米堂主人（註・仲間美登里）の恵与になるアララギ、渓舟君（註・徳尾）より椰子樹一揃など得て、漸く幾分歌心も湧き、其の後折々心に浮び来し歌を新しき歌帳にしるすこととなれり。未発表の数十首の歌はどんなものなりや、今思い出す事も叶はず残念至極なれど、之も世界戦争の影響と諦むる致し方なし。

一九四三年八月。没収品　歌道小見、氷魚（写本）、柿蔭は木（柿陰集の誤りか）、太虚集、アララギ約六十冊、短冊（赤彦、茂吉、憲吉、千樫、百穂、白秋、虚子）。

官憲に跨み込まれた一九四二年四月は岩波のロシンニア在住時代で日本の太平洋戦争突入から五ヵ月を経た時期である。文中の〝受難週間〟というのは、キリスト者であった岩波がこのような事件に巻きこまれたことを、自ら〝受難〟と受けとめこの宗教語を使用したものとの

想像も可能だが、実際にも〝受難週間〟での出来事であったかも知れない。

一九四四年　ー四十六歳ー

デマ多き葡字紙は読むに……

①押収されて遂に戻らぬ歌書の類色紙短冊は惜しむに耐へず

②歌書の類作歌帳まで押収されて吾の作歌の拠りどころなし

③罪なくて我が同胞二十人あまり同じ獄舎につながれにけり

④罪なくて入りし獄の十日間が一生のうちの思出とならむ

⑤押収されし色紙短冊が芥の如ぐ焼かれつつあらむか今に戻らず

⑥歌道小見　柿蔭集成は色紙短冊が押収されて遂に返る時なし

⑦歌稿帳押収されしかば未発表の歌百首ばかり思ひ出されず

⑧押収されて一冊もなきアララギを二冊給ひぬかたじけなしや

⑨二とせを一つの歌も得作らで吾が在りしかいたく悔しも

多忙で厳しい明け暮れの中で、命を刻みつけるような思いで作った短歌を書き記した帳面や書籍が、枢軸国のキンタ・コルーナ（第五列、スパイ）の秘密文書かも分らない、というので横柄な警察官によって手当り次第に押収されてゆき、これからの創作の拠りどころがなくなったような思いに陥ったのであるが百首の歌と言えば大変な量である。到底いちいち思い出して新たに〝再生〟できるものではない②。無念とでも言うはかないのだが、返して貰える、という希望も持てず、大方いま頃は警察の裏庭ででも塵芥のように焼かれているのであろうかと、心魂の一部が欠け落ちたような思いがするのだ⑤。二ヵ年の間、一首の歌も作れなかった、作る気特になれなかった、というのは、落胆の深さがどんなものだりたかを物語っている。

このような状況に陥っているのを伝え聞いた短歌の仲間の誰かが、「アララギ」を二冊送って来た。ありふれた言い方だが、荒蓼たる不毛の地に独り佇つときに、やさしく雨が降って来た、とでもいったら、その折の岩波の気持に幾らか近いものになるだろうか、仲間の好意が、ただただ有難かったのだ⑧。そうして、二年間を、歌を一首も作らず過ぎさせてしまったことが悔しまれて来るのである⑨。

このような経過を辿って、歌を作る意欲が蘇ったのであろうか。一九四四年になると堰を切ったように多作になり、歌集に収載されているものだけでこの年は九十八

首を数える。

⑩提督山本の遺骸東京に着けるちふ葡字紙よみつつまことと思へず

⑪デマ多き葡字紙は読むに堪へずしてただに信ず母国の海外放送

⑫窮極の勝利は信じ疑はねど日軍全滅の報は悔しも

⑬サイパンに果てし女子童を思へば口惜し胸はふたぐも

⑭五十万噸の艦もろともに荒海の藻屑となしぬ米兵二万幾千

⑮同盟枢軸といふ言葉すら獄の中に在りて覚えき

⑯頭の上を日に幾度か過ぐる飛行機の或る一機に宋美齢が乗りていしとぞ

ハワイ・真珠湾奇襲の成功以来、緒戦の勝利で太平洋南方海域にまで、広がりに広がっていた日本軍の最前線はソロモン海戦、珊瑚海々戦、グワダルカナル島攻防の敗戦などを経て急速に後退を余儀なくされる状況となる。

そんな時期に、山本五十六連合艦隊司令長官の搭乗していた飛行機がソロモン諸島で行方不明になったという報が東京ラジオで伝えられ、移民たちの心に暗い影を投じた。伯字新聞は米軍機による撃墜と明らかに報じたのであったが日本海空軍の絶対的優勢を信じていた（信じこまされていた）移民たちは、この出来事を信じること

ができず、連合軍が流すデマ宣伝だと思おうとした。岩波もその一人であった⑩。邦字新聞がなくなり、戦況を知ろうとするには東京ラジオの報道が唯一の頼りであったが、たまには、よく理解できないながらもブラジルの新聞を買って読んでみるのだった。しかし、そこにあるのは惨憺たる負け戦を続けて後退する日本軍のことだけで、少しも日本人の心を明るくするものは見つからない。こんなものを読んでも気持が暗くなるだけだ、今はただ、これまで通りに、日本の海外放送が伝える日本軍優勢の報道を信じようとするのである⑪。

そのような時期、先に北ではアッツ島、キスカ島の日本守備兵の全滅が伝えられ、今また南太平洋戦線の最後の拠点ともいわれたサイパン島も陥落するのである⑫。東京放送も日本軍の全体的な戦線の後退や、これらの島々の日本軍の壊滅、特にサイパン島における日本人住民の悲惨な死を覆いかくすことはできなかった⑬。

註　山本五十六大将の戦死は一九四三年四月一八日と認定されている。遺体が発見収容されるまでにはかなり時間の経過があった。サイパン島日本軍全滅は一九四四年七月六日。

⑭は、どの海戦の日本側報道を言っているのかわからない。壊滅的な打撃を蒙っても大戦果を謳いつづけた「大本営報道」であったから、岩波はその一つを聴いて快哉を叫んだのであろう。南太平洋の戦いが不利になり始

めた頃から、ブラジルの日本人の間では不穏な動きが起り始めるが（一九四四年四月の〝敵性産業〟であるとの理由によるハッカ精製工場、養蚕食の焼打ち、破壊事件とその裏付となる〝理論〟の普及等）、岩波が聴いたのは一九四四年二月二十三日の東京放送「カナリア郡島内トラック島で日本軍は多大な犠牲を払い、敵に大損害を与えた」か、或いは同六月十九日のマリアナ沖海戦で日本海軍が残存空母の大半を失なった際の「大本営報道」かを聴いて詠んだものであろう。

第二次世界戦争が始まる前から、連合国側、枢軸国側という言葉は新聞やラジオによく現れるようになった。ブラジルの新聞雑誌を目にすることの稀な農村住まいでは、これらを意味する「アリアード」「エイショ」という言葉をみることも聞くこともなかったが、スパイ容疑で投獄きれて、初めて聞き覚えたのだ⑮。そんな言葉さえ知らなかった自分がスパイの疑いで捕えられたことへの、苦笑のようなものがこの歌には感じられる。「宋美齢」はいうまでもなく、日本の敵だった中華民国の蒋介石総統夫人。国際政治の舞台でも活躍した人で、戦時中の或る時期、ブラジルを訪れたこともあったから、きょう頭の上を飛んだ飛行機のどの一つかに宋美齢が乗っていたのだよ、という噂も流れたのだろう⑯。敵国の総統夫人であるから、無関心ではおられなかったのである。

⑰四人の子を育て来し吾が妻はわれよりも早く老いづくならむ
⑱金儲けは遂につたなき吾なるか足らふ時なく年々を経る
⑲貧しさは己堪ふべししかすがに妻子らに卑屈なる思あらすな
⑳二十年近き年月この国に暮したりしか今に貧しさ
二十一　朝けよりがみがみと子を叱りゐる妻の声きけば吾もいらだつ
二十二　余裕ある生活といふも少なくて二十年吾に副ひ来し妻か
二十三　今の今うからの内の一人だに病まば如何にして治療費を得む
二十四　着飾りてルア行く人よ誰も彼も皆富みたりてあるがに見ゆる（ルア＝街路）
二十五　人に劣る吾が働きと思はねど何故常に斯くは貧しき
二十六　様々の皮肉聞きつつ頭下げて仲買人より金を前借す

いずれも貧窮生活の中で、妻を思い子を思う歌。ブラジル生活も、もはや二十年、貧しさからいつまでも脱することができないことへの嘆きが⑱の「金儲けは遂につたなき吾」、二十五の「人に劣る働きと思わねど」と詠わせ、自分は自業自得として貧に耐えることもせねばならない

が、妻や子供らには、世間に対して卑屈な思いはさせたくない、と血を吐くような思いを表出しているのが⑲である。このような状態の中でいま家族の一人でもが病気したら、治療費はどう工面したらよいのか、と暗い不安にかられるのだ二十三。

そうして、たまたま町へ来てみると、すべての人が美しく装って歩いていて、富んでいるように見えるのである二十四。農産物仲買商人を訪れて、出荷物に対する前借りを申し込むと、「この前貸した時は、随分返済が伸びたからな…」或いは「文芸などにご熱心な様子ですが、幾らか金になるのですか」などといった皮肉も聞かされるのだった二十六。

移民の中で、いつまでも余裕ある生活に辿りつくことができなかったのは何も岩波菊治だけではない。しかし彼の場合は、自他共に認めた篤農型の働き手であっただけに、何か運命的なものさえ感じさせずにはおかない。アリアンサを去ってから、モジ・ダス・クルーゼスに落ちつくまでの七～八年のうちに、カンピーナス、ロッシンニア、スザノと、目まぐるしく移り動いているのは異常でさえあるだろう。

サンパウロ市近郊と称せられる地帯の土地は、新しく耕土を作り上げるまではろくな生産は望めないのだが、内陸地の肥料いらずの農耕の経験しかない岩波はこの事情への深い認識なしに移って来たのではなかったろうか。そのために農業の成績が上がらず、焦りを増大したのが

目まぐるしい転住の原因であったろうか。

二十七　棉実油の暗き灯影に書を読む石油切れたるこの幾夜さを

二十八　うす暗き棉の油の灯をともし夕餉食ひ本読むはいたく侘しも

二十九　自給自足とたはやすく言へど仲々に行ひ難しトマテ専業農家は

三十　燻炭と厩肥を主とし施してトマテ生産費低下を目論む

三十一　物皆がいたく値上りし時にして吾が作るトマテ許りが安し

三十二　フェイジョンに黍の粉かけて日毎食す慣れては旨し米高ければ

三十三　古着買ひて三年すぐしき出来合ひのこの服を着て幾年かまた

三十四　吾も妻も身よりがなくてこの国に年月古りぬ時に寂しも

三十五　軒低き草家の壁はくづれ居りここに暫く住みつかむとす

三十六　一年の食ひ料に足る米ありて一俵二百ミルの値に驚かず

三十七　村人のおほかたは苺作りつつゆたけく在りと聞くは羨しも

三十八　見るかげもなく荒れ果てし草家に堪へて住み

なむ暫くの間

三十九　畑中の荒れし草家を寂しがり夕べとなれば泣く幼あはれ

四十　子らも吾も飯旨くして日をすぐすかかるをせめて幸ひとせむ

二十七、二十八の綿実油は、綿の種子をしぼって採る油（OLEO DE ALGODAO）のことで、多く食用に用いられた。「石油が切れた」と言うのは、多忙のため買いに行けなかったのか、それとも買う金がなかったのか。一九四四年頃と言えばアルコールを用いての蛍光灯のように白く冴えた明るい光を出すいわゆるガス・ランプと呼ぶものがかなり普及していたのではないかと思うのだが、岩波の家族は所有していなかったのだろう。棉実油はちょうど仏前に点す灯明の油のように、布切れの芯を伝わせて火を点じたのだろうが、石油ほどの明るさでは燃えなかったのだろう。とにかく、薄暗い灯影で書を読み、飯を食うのは大変にわびしいものだったのだ。

ロッシンニア時代の岩波の主作物はトマトであった。生産資材もなるべき自給自足であるべきだ、と言う論もよく聞かされるしそれが理想的だとは解っているが、この小面積のトマテ専門の経営でも、実行となると難しい二十九。三十では生産費を安上りにしようと種々試みていることが詠われており、岩波も努力を惜しんではいないのだ。しかし皮肉なことには、農業経営費も生活必需

品の値段もどんどん勝ってゆくのに、自分が作っているトマトだけが、何者かに意地悪をされているかのように、安値でしか要れないのである三十一。

三十二では、米の値が高いので、フェイジョンにともろこしの粉をまぶして食っているという歌で、慣れてみるとこれも結構うまいものだと詠っているのだが、次に出て来る三十六の歌との関連で、どうも理解できない。後者は食うだけの米は十分に持っていて、二百ミルの高値も平気だといっている。同じ一九四四年であっても時期がかなりちがうのだろうか。

三十七、三十八、三十九はロッシンニアからスザノ駅北部シャカラ・マレンゴに移った頃の作品である。当時のスザノは苺（モランゴ）の栽培が盛んであったようで、日本人農業者特有の細やかな栽培への当り方で優秀品を生産、市場での声価も高く、懐具合も暖かかったのだろう。ロッシンニアでの営農でも格別に窮況を打開できなかった岩波には、ここでの苺栽培者が羨ましかったのだ。

ロッシンニアの家も、牧場の低湿地に近い荒れ屋だったが、このスザノの土壁の家も、半ば傾いたものであった。先に一寸触れたように、私は小田切剣に誘われて一九四五年六月十日（「林泉」第三号の岩波の文章による）に、ここに岩波を訪ねたことがあるが、三十八にあるように「全く見るかげもなく荒れ果てし草屋」であった。ここを選んだのはロッシンニアでの事情に、何か移転を急

がねばならないものがあったのではないかと想像される。スザノのここも長く落ちつけるような条件の地とは私には思われなかった。三十八で「暫くの間」といっているのには、この頃の岩波の気持ちを窺わせるものがある。余りにも荒れた周囲の光景とその中にぽつんとある荒家が幼いものには寂しくて、夕方になると必ず泣き出すのであった三十九。なおここに一首、この草家にかかわる歌がある。「戦場の兵を思へば荒れ果てしこの草家も尚し堪ふべし」（スザノへ移る）。どんな生活の中でも、戦時下の日本が心を離れることはなかったのだ。

そんな中にあっても、子供らにも自分にもご飯はうまいのである。今は割合に家族も揃って健康で、貧しくはあっても、これは幸いと思わねばならないことなのであった（４０）。

四十一　この国のみ冬といへど稀々に二三朝ほど霜が降るのみ

四十二　砂蚤の袋を除りし蹠がいたくも痒し夜の小床に

四十三　パンを焼きて尚暁に間があれば珈琲を沸かしアララギを読む

四十四　パイネーラの架（けわた）が散りばう木の下に厩肥の山を切り替へており

四十五　ガソリンが乏しくなりしこの国に木炭自動車が目立ちて殖えぬ

「砂蚤」は日本人の造語であろうか。通常ブラジルでは「ピッショ・デ・ペー」と呼んだ。

コロニアの文芸作品にも素材としてかなり出て来る。人間や家畜の四肢の爪と肉の間や足裏に喰い込み、皮膚下に入ってから雌の「卵袋」が成長するのだが、よく成長したものは白い独楽のような形になる。これを完全にとり除くには縫針の先端などを使ってその部分の皮膚を押し広げなければならないので、〝作業〟には痛みが伴う。完全に取り除いた跡はぽっくりと穴があいて肉が露出しているから、うっかりするとそこが化膿する。中途半端な除き方をすると化膿することが多いのだった。それの予防にはよく石油がぬりつけられたのであった。この蚤が肉に食い込んでいる間も取り除いた後もひどく痒いので、夜の寝床の上で、暗いカンテラの光を頼りに〝作業〟や〝治療〟を行うのである。砂蚤が幼児の手足に食い込むと、ことはなかなか面倒であった四十二。

岩波が家庭内のことにも細かく心を配り、労を惜しまない性格だったことにはすでに触れた。パン焼きもコーヒー沸かしも普通は主婦の仕事だが、岩波は進んで自分でやったらしい。

いがみ合うことはよくあっても妻をいたわる気持は深かったのだ。そうしてそれらを終って、畑に出る時刻にまだ間があると、「アララギ」をむさぼり読んだのである四十三。

戦争が何年も続くと、ブラジルには外国からの輸入に

依存しているガソリンが不足し始め、間に合せの木炭を焚いて走る自動車が目立つほどに増えた。ガソリン不足はまた一般国民の生活の上にも徐々に影響を及ぼして来るのである。

四十六　利己的なりと我ら蔑みし人が金を残し或る者は易々と故国に帰りぬ
四十七　村の為社会の為と気負ひつつ一途に過ぎき壮年の時を

己れのことばかり良かれと考えて、理想も志も持たない人間だと自分ら（理想に燃えていた）が軽蔑していた者が、いつの間にか金を儲けてその中の何人かは、いとも易々と故郷へ帰っていったではないか、というのが四十六で、「易々と故国に帰りぬ」には強い羨望がこめられているだろう。人を羨む気持に気づくのは、自分が他者に対して或る一つの事柄で劣っていることを自覚することだ。そこから卑下の心も生じ遂には卑下の心を持つことに対しての自己嫌悪さえも抱くことになる。

四十七は四十六につづく思い。新しい理想の村を作るのだとか、地域社会のために尽すのだとか心に気負って、ひたすら努めてあたら壮年時代を過ぎきてしまった。いったい岩波菊治という己れは何者であり、何を成し遂げたのかという苦い反省と口惜しさがここにはある。既に移住二十年、「身を粉にする」という言葉そのままに努

力した結果が、綿実油の灯りで本を読む荒れ放題の草家での生活なのである。だが、二十年は愚か、移民としての全生涯を貧窮のうちに過ぎた者は岩波菊治だけではなかったのが厳とした事実である。

四十八　故郷を常恋ひ居れど遂にかも帰り住む日のありと思へず

四十九　アルメロンの苦きを食めば思ひ出づふるさと信濃の蕗味噌の味を

ふるさとを、常に恋しく思って暮しているが、このように貧窮から脱し得ない自分は、そこに帰ってゆく日は遂に来ないだろうと嘆き、アルメロンという野菜のほろにがい味から故郷信濃の蕗味噌の、似たところのある味を思い出すのだ四十八、四十九。ブラジル住まい二十年にして今なお荒れた風光の中のあばら屋暮しは無性に故郷恋しさを募らせた。

一九四五年　四十七歳

性欲に悩むことなく……

①次々に奏づる連合国々歌にうち交りサイレンの音しきりに聞ゆ　（五月七日）

②かくまでにもろくドイツが敗るるとは思はざりき欧州戦局終るのラジオ聞きつつ

③チャーチルがバッキンガム宮殿より放送する声は意味は判ねど誇らかに聞ゆ
④興亡の瀬戸際に立つ祖国思へば安閑として我等在る秋にあらず
⑤ソ聯遂に火蓋切りぬと伝ふれど敢て驚かず二百万の皇軍あれば　（八月九日）
⑥満州里にソ連侵入せりと伝ふれど英米に対するゼスチュアに過ぎんか
⑦老兵のわが弟も召きれてぞいづべの海に戦ひ居らむ

太平洋戦争の五年間に、ブラジルの短歌作者は、この戦いをどう受けとめ、どう短歌に詠んでいたかは興味ある問題だが、残念ながら残されて活字になっている作品は甚だ少ない。それは戦時下で日本語新聞が発行禁止になって、情報を得る手だての殆どが失なわれ僅かに性能のいいラジオ所有者のみが東京ラジオの報道を聴き得るに過ぎなかったという状況が大きな原因であったと思われるが、一つには、短歌のような短詩型文芸で「時局」或いは「社会」事象を素材として表現するのは無理であって結局は行き詰まる。という論理で、そうした性格の作品を歓迎しない風潮がかなり強くあって、そういう方面での作品化の伸展を阻んだのも事実であった。いわゆる時局詠、社会詠を拒む態度である。

そうした中で、岩波菊治は比較的に時局詠を多く残している方である。「アララギ」の唱えた「写生」を、ひど

く狭く捉えた考え方が、当時先進的立場にいるとされた作歌者たちの中にはあったのだが、これは岩波の考え方でも指導の結果でもなかった。

一九四五年五月七日（ブラジル）は第二次大戦でドイツが降伏した日である。岩波が連合国側国歌や対ドイツ戦の勝利を告げるサイレンをどこで聞いたのか明らかでないが①、②では欧州戦局が終ったのをラジオで聴きながら、こうまでもろく日本の同盟国であるドイツが降伏するとは思わなかったと言っているから連合国側の歌もサイレンもラジオで聴取したのであろう。そうして英国の宰相ウィンストン・チャーチルかバッキンガム宮殿で対独勝利宣言（らしいもの）を放送しているのを、英語だから意味は汲めないが何か誇らしげな調子だ、ドイツの敗戦は事実かも知れないと感じるのである③。

ドイツが欧州の戦いで放れれば、枢軸国として残るのは日本だけとなる（イタリアの無条件降伏は一九四三年九月）。いよいよ全世界を相手に日本は戦わねばならない。正に興亡の瀬戸際に、祖国は立っているのだ。それを思えば、自分らブラジルにある者も、のんきに手を拱いている時ではない、と矢も楯もたまらない気持になるのだった④。しかし敵国となっているブラジルの中にいて、移民に何ができたろうか。祖国の最後の勝利を祈るほかはなかったのだ。

私にもドイツの敗戦を詠った次の二首がある。

街に満ちてさわげる中を日本人われドイツ降伏の

ニュース聴きて帰りぬ
ドイツ敗るれど関わりはなしと思えども街歩むわれの
卑屈ならむとす
いよいよ瀬戸際に追い詰められた形の日本に対して、「日ソ不可侵条約」が存在するからまずは大丈夫だろうと思っていたソビエト連邦が、八月九日（日本では八日）対日宣戦を布告した。当時満州には、日本陸軍で最強といわれた関東軍がソ連に備えて展開しているということだったし、戦況は思わしくないらしいとしても、まだ無傷の二百万の陸軍があると稱せられていたのを岩波も聞いていたのであろう。驚くことはない、忽ち制圧してくれるだろうと言い⑤、既に満州国までソ連軍は侵入したというが、英国、米国に対する機嫌とりの見せかけのそぶりに過ぎないのではないかと希望的観測をするのである⑥。しかし事実が岩波の願ったようには推移しなかったことは多くの記録にとどめられている通りである。
ブラジルに居住する者にとって、戦争に徴用されているであろう肉親はいちばん気にかかることだった。もはや「老兵」と呼ばれる年齢の弟が、どこの海で敵と対略しているのだろうか、果してまだ生きているのだろうか、と案じるのだが、そのことは当然、働き手を失っている故郷の家族の上にも思いが及ぶのである⑦。
⑧性欲に悩むことなく古の聖の如く在らむ日は何時
⑨わが妻と離れて寝る夜も久しくて時に遣りどなき思

ひにいらだつ

⑩垂居らぬ草屋の中に帰り来て茶漬を喰らふ幼子と共に

⑪妻居らぬ夜の厨に火も焚かず腸詰大根卸にて冷や飯を食ふ

⑫あたふたと我と交り隣家に寝に行く妻よ既に幾月

戦後になると、日本の場合と同じようにコロニアの短歌作品にもセックスを素材としたものも現われては来るが、岩波の作品には例外的に多いように思われる。このスザノ時代の一家の営農または生活はどういう形になっていたのか不明だが、或いは誰かとの共同経営にでもなっていたのだろうか。そうでないと、妻が隣家に、恐らく留守番か家政婦的な形でか、夜になると寝に行くような生活は考えられない。モジへ移ってからは、井上という一家と共同経営になっていたから、そういうことは始終あったらしいが、スザノ時代は何も記録にないし、私も聞いたことがない。

それはとにかく、妻が隣家へ行って寝ることが長く続いていて、幼い子と共にうそ寒い夜を過ごすことが⑨⑩⑪では詠われている。⑨は、妻との夜の生活のない日が長くつづいて、いわゆる欲求不満でいらだっている歌だし、⑩⑪は食事をあたためることも億劫で、あり合せのものですます味けなさである。

しかし、たまには性の交りも行われる。とは言え、隣

家へ寝に行かねばならない妻であるから、「あたふた」という格好でそれは終ってしまうのだ。こんな場合、心急く妻の方があたふたと交わる〃主役〃であったかも知れない。夫の方は、こんなことがもう幾月も続いていると不満をうちにこもらせて妻を見送ったのであろう。あからさまなセックスの歌でありながら、微妙なユーモアさえ感じさせる秀れた作である。

⑧は、このような性から来る煩悩に苦しむことなく、伝えられるいにしえの聖者のように清浄無垢な存在になる日はあるのだろうか、といっているのだが、このことは作者の煩悩の強さを物語る以外の何者でもないだろう。

⑬今の生活に関りもなき書ながら読みふける徒然草伊勢物語土佐日記など

⑭土地買はむ金の工面にまだきより夜半にいたるまで歩みつかれぬ

余裕ある生活にはやく到りたいと齷齪（あくせく）しているが、それとは全く関わりを持たない古典を読みふけることもあった⑬。本を読む時間があるのなら、草の一本も抜け、というような言葉や目は、開拓時代の植民地などで、読書好きや多少でも文芸などに関わりのある者に対して向けられたものである。岩波のこの作品はそういうことと関連してのものではないだろうが、「今の生活に関りもなき書」と言っているのには、やはり何かのこだわりが感じられる。

アリアンサを去ってからの、カンピーナス、ロッシンニア、スザノ時代はすべて借地農であったから、何はともあれ、自分の土地を持ちたい、それでなければ確りした営農もできないと切実に思うのであるが、しかし土地を買うだけの余裕ができている訳ではない。見当をつけては金借りに行くのだが、おいそれと応じてくれる者はいない。足を棒にして早朝より夜半まであれこれ訪問して疲れてしまったのだ⑭。

借金が成功したのか否かは不明だが、翌年岩波はモジ郊外カペーラ街道四キロメートルの場所に共同ながら土地を購入することになる。

ここまで書いて、この年の一、二の作品に気づいた。

我が妻を母とぞ呼びてしたひよる母なきこれの幼児あはれ

歌詠みの我等四人の中にして井上君一人歌詠まずけり

がそれで、妻が久しく夜は隣家に寝に行くと詠っているのは⑨⑫、隣家の妻女が幼い子（恐らく乳飲み子であろう）を残して亡くなったので、その子と添い寝をしてやるためであったのだろう。また次の歌の「井上君」は、モジへ移ってからの共営者だった井上という人と思われる。岩波、井上の共営は、このスザノ時代に決まったことなのではあるまいか。

⑮現し世に在りて親しくみ教を受けし幸は永久に思はむ

⑯この国に過ぎし二十年よ顧みて何を残せる只若干の歌のみ

⑰二十年我にたぐひて来し妻が一つの歌も作ることなし

幾度も既にみて来たところだが、島木赤彦に短歌創作の指導を直接に受けた事実を岩波は何物にも代え難い己れの幸福とした⑮。農業による生活の不遇は、余計に岩波の短歌に拠ろうとする心を深めさせたと想像できるが、実際にブラジル生活二十年をかえりみて、そこにに残っているのは、そして自らもやや満足できる出来ばえの作品は、ほんの僅かに過ぎないという嘆きがある⑯。

このように、短歌に執して来た自分であるが、妻と言えば二十年をつれ添ってきて、たった一つの短歌を作ったこともない。自分がこれほど心を寄せているものに妻は全く関心を示さない、とそのことを淋しむのだ⑰。

前にも触れたように、私は小田切剣に誘われて、ロッシンニア時代とスザノ時代の二度、岩波菊治を訪ねている。岩波が「林泉」第三号に書いた「酒座漫吟」によるとスザノの方は一九四五年六月十日となっている。今からみると、日本降伏の二ヵ月はど前だがサルボ・コンヅット（旅行許可証）さえあると、日本人の旅行も不自由はなかった。

その夜、後から訪ねて来たスザノ在住の八巻培夫に前出「井上君」を加えて談笑し、また戯れ歌を詠んで深更に及んだのであったが、その時の幾首かが「歌集」に収載されている。

新妻と一夜さかりて居るからに寂しくあらめ火に寄る
益次

新婚の清谷益次さもあらばあれ我が古妻もまた捨て難し

累々として尽きぬ縁の彼の君と疾くとく婚へ小田切君よ

寒々と夜は更けにけり土間ぬちに燃ゆる焚火を囲み歌詠む

私にもまたその折のことを詠んだ次の歌がある。

戦いの世となりてより会わざりし先生にまみゆやさしかり今も（岩波菊治氏）

戦いの世となりかたみ経て来にし道を憶えばしみじみと見（まみ）ゆ

なおこの年の岩波作品には

安らかに老を養はむところもとあちこちの土地探し巡りぬ

金の工面遂に出来ねば諦めて土地購入契約破棄と定めぬ

があり、落ちついた生活を求めて土地を持とうとしなが

ら、容易に金の工面ができず、諦めたことが詠われている。

一九四六年　四十八歳

老い母のなほながらへて…

①勝敗は言ふべきに非ず思ひみよ幾百万の遺家族と母国の現実を

②信念をいふはた易しさもあらばあれ今は信ずべし敗戦母国の現実を

③敗戦をよろこぶものにあらねども只現実を認識するのみ

④誤れる信念を持てるテロリストが惜しき幾人の人を殺めぬ

⑤終戦の詔すら疑ひてデマ言ひふらす輩なほあり

⑥戦争犯罪人と誰をさして言ふか国民のすべてが負ふべき責任ならずや

⑦聞き慣れて長戸の名さへひさしきに原子弾のテストとなりて遂に沈みき

⑧戦のかかる結末も見ることなく疾く逝きしこそ寧ろ清しと言はむ（山本提督）

⑨老い母のなほながらへて在すや否やたどきも知らに幾年か経し

太平洋戦争が日本の敗北で終った後、ブラジルの日系社会（以下、コロニア）では、日本の降伏を信じる者（認識派・負け組）と、日本の敗戦は連合国が流すデマで、神国日本が放ける筈はない、実は勝っているのだとする者（信念派・勝ち組）とが生じ、そこから長く尾を引く深刻な混乱と勝ち組による多くの殺傷事件が発生したが、岩波は祖国が陥っている現実を早くから納得していた一人であった。一時は誇大な大本営放送を信じたこともあったが、農村住まいの情報の乏しさの中にあって、事情の推移への認識は確かであったと言っていいであろう。

①から⑤までは右記したコロニアの状況への憂慮を素材としている。祖国が勝っている負けているといって、言い争う時ではないだろう。その何れにしても、あれほど長く繕いた現代科学戦で、何百万という兵員が失なわれたであろうことは想像が可能なのだし、またそれだけの遺族も存在するのだ。この事だけでも考えてみるべきではないか、と訴えているのが①であり、日本人としての信念からも祖国の敗北は信じられない、と言うのはた易いことだが、それはそうとしても、もう敗れた祖国の現実を今は信じなくてはならないのではないか、と呼びかけている②。

日本の降伏を信じるよりほかはない、と或る場合は岩波も口外したことがあるのだろう。

そんな折りに彼に対して返って来たのは、お前は日本が負けたことを喜んでいる非国民なのか、という言葉と

目であったことも想像される。誰が祖国の敗戦を喜ぶことができるのか、自分はただただ事の成り行きを理解するだけなのだという、これは独語であろう③。

いわゆる「終戦の詔」は万国赤十字社のルートを経てコロニアにもたらされ、信念派の異常な動きを静めるために用いられようとしたが、信じようとする者は少なかったし、それを逆用しようとしての流言飛語もまた盛んとなったのであった⑤。

それにつけても、と岩波の想いは祖国へ飛ぶ。「戦争犯罪人」という聞いたこともない罪名をかぶせられて、国の枢要な地位にいたもの達が次々と裁かれている。而もそれが同じ日本人によっても言われているのはどういうことなのか。この戦争を起した罪ということでは国民のすべてに責任がある、と言うべきではないのか、と急に変ることの多い日本人の意識への批判が詠われている⑥。

長く「陸奥」と共に世界最精鋭の戦艦と謳われていた「長戸」が、終戦後に米軍による試験爆撃の標的にされて沈んだというニュースは何かで読んだ記憶があるが、「原子弾」というのはどうであろうか。いずれにしても、かつて日本人の誇りであったものが、試験爆撃の的となって沈められたことへの哀惜がここにはある⑦。

⑧太平洋戦争開始当時の連合艦隊司令長官だった山本五十六大将は、真珠湾攻撃の成功によって英雄視されるようになっていた。それが一九四三年四月、ソロモン島上空で戦死し、国民に戦争の前途への不吉な予感を抱か

せるものとなったのであったが、しかし放戦前に戦死したことで、無残な状態に陥った祖国を、山本提督はみないですんだのだ。提督にとって寧ろ幸福であり、提督を愛した国民にとっても一種の清々しさではないか、と言っているのだが、恐らく国民の誰もが感じたことではなかったろうか。

太平洋戦争が始まると、日本との郵便も絶たれた。ブラジルにいるものも、日本にいる者も、相互の消息を知ることはできなかった。⑨は老いた母がなお生きているか否かを知る方法（たどき）もなく幾年か過ぎてしまったことをいっている。

⑩二十年副（たぐ）ひて来つる古妻に尚厭かずして侍りゆくものを

⑪諍（いさかひ）を亦平和（たひらぎ）を繰り返しかくて老いゆかむ吾も吾妻も

⑫今日一日諍ひ居しが共に寝てほとに触るれば稍々（やや）になごみぬ

⑬酒煙草おのれ止めなば妻子らに少しはうまさ物食はせ得む

⑭おのづからまぐはうことも遠ぞきて漸く老の近づきにけむ（まぐわい＝性の交わり）

⑩⑫は夫婦間のセックスの機微を詠っている。相互の性の欲求が、生活に疲れてとげとげしくなっている男女

の間を或る時近づけることがある。性の欲求には、好き嫌いを越えた本然の引き合いがある、といったらいいだろうか。一日中、なにかと口争いをしていたのたが、枕を共にして、妻のほとに触れると、なにか心が和んできたというのである⑫。そうしてこのように争いと和み合いを繰り返しながら老いてゆく自分ら夫婦なのだろう、と或る平安のひと時に思うのだ⑪。だがしかし、性の欲求も次第に間遠くなって来ることに気づき、ああやっぱり老齢といえる年に近づいたのであろうか、という思いに到達する⑭。

このような詳いや、平らぎを繰り返しながら、己れも妻も年寄ってゆくのであろうと思い⑪、またしても今の貧しさに想いは帰って行くのだ。酒、煙草で費す金はささやかなもなのだが、それでもこの二つをやめたら、その金でもう少しは妻子らにましなもの、うまいものを食べさせ得るのだろうか、と反省する⑬。

⑮コスモスは秋の花ぞと思ひしがこの国にして時じくに咲く

⑯桃作り鶏飼ひて儲けなば家も建てかへむ離(はなれ)も作らむ

⑰この家にいぬるも今宵限りかや思ひぞ残らむこれの草家に

⑱万葉の歌読みつげば古はつまどうことも恣なりき

(恣＝ほしいまま)

⑲わが齢漸く老に入りゆかむ視力よわりをこの頃意識す

一九四六年三月、岩波はモジ市郊外カペーラ街道四キロの地点に移転した。スザノで隣家だった井上氏と共同での養鶏と桃栽培の既成園購入だったようで、井上氏が養鶏、岩波が桃と蔬菜を担当、スザノ時代と同様に妻は相変らず両家にふたまたかけたような生活だったらしい。

⑰はスザノで最後の夜の思いを詠ったものであるし、⑯は新しいモジでの未来を明るく想像した作である。

⑮では、日本では秋にしか咲かないコスモスがブラジルでは季節に関係なく咲くことに感動しているのであるが、共同ながら土地を購入して自前の営農になって幾らか気持が落ちついたのか、叙景歌の秀れたものを創るようになっている。

澄み徹る浅井の水に幾片（ひら）の桃の花びら散りて浮かべる

花盛り既に過ぎにし桃畑に音たてて降る時じくの雨

木洩れ陽の照りかげりする池の辺に稍季すぎし丹つつじの花

などが一例である。

⑱はセックスを比較的よく詠った岩波らしい作。万葉集を読んでいると、いにしえの世では、あちこちの女を訪ねて交わり（つまどい）をすることも、思うままであったようだと感じ入っているのである。

⑲は視力が弱くなったことで、己れも遂に老と呼ぶ齢に入りゆくことになったか、という感慨だ。

⑳貧しくて我が在るからに斯くの如き侮り言も堪へて
聞くべし

二十一　その頃は我ら若くして村を建て家を興すと只
一途なりき

二十二　十コントスの金持ちて年を越すこともこの国
に来てよりつひぞ無かりき

モジに移っても、忽ち生活が豊かになる訳ではない。貧しいと見くびって、周囲でとやかく言う者も絶えないのだ。だが実際に貧しくて、人並には行かないのだから、他者の侮りの言葉も黙って耐えねばならない⑳。

アリアンサ時代への追憶も頭を去ることはない。まだ若く気性も激しかったので、理想の村をブラジルに創設し、共に豊かな家を作って行くのだと気負って行動したのだったが、それも遠い過去と化した、と言う思いに耽ることもある二十一。

そして二十数年のブラジル生活でただの一度も十コントの金を持って年越しをすることはなかった、と己れの不甲斐なさを振り返るのだ二十二。

一九四七～四八年　四十九～五十歳

歌詠みて遂に終らむ……

①歌詠みの世に疎くして時折の吾の手落もゆるさせ給へ
（共営者に）

②暇ありて歌詠み居りと言ふらめど閑人ならず百姓我は

③僅かなる夕べの時の間を惜しみ歌作りまた人の歌選ぶ
も

④椰子樹誌を刷るを手伝ひつつ思ふ遠地の歌の友の誰彼
を

⑧歌詠みて遂に終らむ一生ぞと思ふに寂し末だ到り得ぬ

⑥一枚の畑を朝より鋤き終へて午後は伸々と歌会に来つ

⑦この年もいくばくの歌を詠みけむと下嘆きつつ年暮れ
んとす

⑧二三枚の選歌を為せば既に疲れ悲しきまでに根気失せ
たり

⑨百姓の歌詠み我が書ける歌字の拙きは言ふこと勿れ
（人々に）

⑩病み後の身はまだ疲れ易くして溜りし選歌も怠りて
をり

⑪乏しきは敢て歎かじせめてせめて心平らかに歌を詠
みたし

⑫いくばくの歌も作らですごししと暮近くなりて嘆く
去年の如くに

モジでの共同の農業経営が、相互間でどんな条件になっていたのかわからない。だが①の作品などから伝わって来るものは、資金などの面でかなり共営者、（井上氏）に負うところがあったのではないか、ということである。自分は一介の歌詠みで、農業に関係することであっても世の中の事情にうとく、何彼と行き届かない点がある。そのことは許してほしいと言っているのだが、そこには相手に対して何らかの負いめを感じているようなところがある。共営者の妻が死に、残された乳飲み子に母と呼ばれるほど慕われて、夜は妻が添い寝に行くほどに岩波側は尽くしているのだから、卑下するには当らないと思われるのだが、この歌には弱々しいものがにじんでいる。

この作品で、自らを「歌詠み」といっていることは注意すべきであるかも知れない。篤農家と人に言われ、自分でも「人に劣る働きとは思わないのに」（前出）、とかく結果は裏目に出る。自分は遂に秀れた農業者ではなく、一介の歌詠みに過ぎないのかも知れないと自分というものを見極めてしまったようなひびきがこの言葉には窺われるからだ。①は⑤の歌の想いにつながってゆく。自分は歌を詠出する以外には何も成し遂げ得ないで終る一生だろうかと思いながら、作る歌そのものが、願いつづけている高水準のものに、とうてい到達していないのは淋しい限りだというのである。

③で「人の歌選ぶも」と言っているのは歌誌「椰子樹」

への投稿歌のことであろう。戦争のため第十二号で廃刊となったこの専門誌は、一九四七年から再刊される。再刊といっても活字印刷にするには、まだ日本語印刷の事情がそこまで行っていなかったし、資金も乏しかったので、当時モジに居住していた武本由夫が発行の中心になって、謄写版刷りの原紙切りもしたのであった。コロニアの文学と関係深い古野菊生も当時モジに居住、再刊時の仲間に加わっていた。④で「刷るを手伝ひつつ」と言っているのは、岩波もその作業を手伝いに、宵の頃に出掛けたのであったろう。そうして、まる五年に近い戦争を挟んで歌友の誰彼は、いまどうしているのかと思いを馳せる。

⑥の歌会は日曜日にでも開かれたのであろう。午前中に、さし当って急がねばならなかった畑一枚を鋤き終って、心のびのびと会に出席したのである。

一九四七年、四八年の作には病気を詠ったものが多く目につく。⑧⑩もそれで、ただ二三枚の紙の投稿歌の選をするだけで疲れが襲って来る。自分でも哀れになるほど根気がなくなり、溜っている選歌作業もほったらかしになっている、という嘆きだ。

⑦⑫は、年末になって、今年もどれほどの数の歌を詠むことが出来たのか、去年も同じような嘆きをしたのだったがと、振り返る。そうして、今はもう貧しい境遇を嘆くことは止めよう。その代りにせめて、心を平安に

保って心ゆくばかりに歌を詠みたいと希求する（１１）。「せめて」の繰り返しは、切迫した心情の表白であろう。

⑬一包の砂糖送りしことすらにかくばかり喜べる故国の人々

⑭八十余り四年となりし老母が尚健やかに故国にまします

⑬まめであると一言書きて給ひつる故国なる母の文にし泣かゆ、

⑱近親の幾人が既に世に亡しと故郷なる兄が委さに告げ来し

⑰五たりの子ろを遺してみんなみの涯なる島に果てし吾が弟

⑱国のため戦ひ死にしことすらも或は言はむ犬死なりしと

敗戦後の生活物資の不足に苦しむ日本の国民、親戚に何らかの方法で援助の手巻きし伸べたい、という気持は、日本の敗戦を納得した者たちがいち早く抱いたものであった。

一九四六年の終りに近い頃、ドイツ移民たちがブラジル赤十字社の手を経て祖国救援連動を始めたことに触発されて、日系社会の有志の問で救援運動の方法が研究され始めた。その結果、ブラジル赤十字社の認可のもとに、米国サンフランシスコ市にある「日本難民救済金」また

は「友愛奉仕団」で物資を購入し「国際救済復興委員会(LARA)」に託して日本へ送る方法が執られることになり「日本戦災同胞救援会」が組織され、運動に入ったのは一九四七年六月であった。

岩波もこのケースで故郷の人々に一包ずつの砂糖を送ったのだろう。日本の砂糖不足はブラジルにも伝えられていたし、ブラジルからとして届けられた砂糖を伏し拝んだという話も、その頃はもう始まっていた日伯間の手紙の往復で知らされていた⑬。

こうして五年間も消息を知り得なかった八十四歳の老母が、まだ健康で生きていてくれたことを知るのである⑭。故郷の家族からの手紙には、覚束ない母の字で「まめでいる」とひと言だけ書き加えてあった。母の直筆は、家族たちの心づかいであったろう。恐らく岩波は、これをみて声を放って泣いたのではなかったか⑮。「文にし泣かゆ」はその情景を如実に物語っていると思う。

兄の手紙は詳しく戦中戦後の故郷の有様を知らせていた⑯。数人の親類の死の中には、五人の子供を遺して、南浜のどこかの島の守備兵として戦死した弟のことも記されていたのだ。

当然岩波は、極めて困窮した生活ではあっても、妻子を遺して死なねばならなかった弟の口惜しさ憐れさに比べれば、自分はまだ幸いではないか、と思ったのではあるまいか⑰。

戦争に敗れ、占領下の苦しい生活に直面すると、日本

人の多くは戦前の「一億総決起」から〝雪崩現象〟よろしく今度は「一億総懺悔」に転じた。敗戦と敗戦後の惨めな生活は、すべてが軍人が起した無謀な戦争の結果によるものだとする風潮が生じたが、その軍人の中には、兵であったというだけで、末端の一兵卒までが含められていた。死をまぬがれ、遠い戦地からやっとの思いで引揚げ故郷に辿りついた者が、面をあげて郷土の土を踏めないようなうな空気がそこにあった。

「尽忠報国」の死と讃えられたものが、弟をも含めて、あれは結局、犬死だったと言われているかも知れないことへのやり切れない憤りが⑱だ。

⑲胃の腑に滞りありて既に二夕月或いは深さ病ひそめる

⑳胃潰瘍か或は胃癌かと危みしが十二指腸潰瘍なりと聞きて安らぐ

二十一　ボルドー液に荒れし我が手の滑らかになりしを見れば病みて久しき

二十二　五十日あまり臥りしからだ尚だるし仕事にかかれば直ぐに汗出づ

二十三　しくしくと痛む下腹気にしつつしぐるる畑に桃の剪定す

頑健な体にしては、岩波は病むことが多かった方である。アリアンサ時代もそうだったし、サンパウロ市周辺

へ移ってからもそうで而もかなり重く、病臥の日数も多い。

⑲の「滞りあり」は、何となく胃に物が溜ったようですっきりしないことで、それがもう二ヵ月も続いている。軽くない病気でもそこに隠れているのではないかという不安で、当然不安は、よくて胃潰瘍、ひょっとしたら胃癌ではないか、という暗い思いを誘うのだが、医者の診断では十二指腸症で、たいしたことはない、と言われ、ほっとする⑳。しかし病臥生活は五十日余も続き、ボルドー液撒布で荒れていた手が滑らかになっているのに気がつく二十一。

一応病状も収まったようなので畑仕事を始めてみると、体はまだだるくすぐに汗をかいてしまうのだ二十二。この疲れ方はやはりただごとではないのではないか、下腹が時々しくしく痛むのもおかしい、と気にかけながら、しぐれに濡れて桃の剪定をし、病いで遅れた畑仕事を取り戻そうとするのである二十五。

二十六　宿命といふべくは苦し年長く副ひ来し妻と遂にそぐはず

二十七　妻のほかのをみなに触れしことなきは潔癖といふか或は意気地のなきか

岩波菊治の作品には、コロニアの短歌としては珍らしいくらいに夫婦間の交わりの機微や気持の相剋を詠った

ものが多い。敢えて言えば、肉体での愛が夫婦間の心の愛情ではなかったことを示す、一種の悲惨さを漂わすものさえある。

「追悼号」には若い時代の菊治、妻とめの〝夫婦像〟を追想した文が幾つかあるが、その中の一、二を紹介しておきたい。

穂屋野潔『ー略ー私なんかまるで弟扱いにされていたから「奥さん、結婚てどんな？」「そりゃ幸福よ！」「でも奥さんは見合の時、あの何だかこわい見たいだ、と言って、二人の席を抜け出してM先生に言ったそうじゃありませんか」「え～、あの人永い間黙っていて、それから、びっくりしたでしょう、と最初言ったまま又黙ってしまうんでしょう。妾なんだか怖くなってしまったんですのよ」「では今は？」「あんなブッ切ら棒のような人ですが、それ丈男らしくって頼りになりますわ。あの顔で歌なんかも作るんですものね。矢張り妾のベター・ハーフだったのよ」ー略ー渡伯途上の長崎から「ブラジルへ行ってきっと愛の殿堂を打ち建てて待っています」との奥さんの頼りを頂いたことがあったが：ー略ー。』

行方正治郎『ー略ー後年夫婦喧嘩の歌を発表した事から大分色々と話題を提供したような事もあったが、アリアンサ入植当時は新婚時代であった故もあろうが、有名な愛妻家であったようだ。人並み勝れた巨身に之は又人

並より小柄な奥さんとの対照はかなり人目についたものらしく「岩波さんは毎日畑に仕事にゆく時、奥さんを背負ってゆくんではないだろうか」などという噂をする者さえあった程である。ー略ー。』

だが二十六の「宿命といふべくは苦し」は、明らさまに妻との性格の相剋を、運命であったというにしても苦し過ぎる、と言っているであって、殆ど救い難い心と心の亀裂の表白以外のなにものでもあるまい。「妻と遂にそぐはず」とは、とうとう真の意味での心の触れ合いはなかった、という痛恨である。

二十七　は敢えて解釋するを要さぬ、地道な夫婦生活を続けた男性が抱く思いであろう。だがこのような率直な短歌はそう多くはない。

二十八　ジナジオの半ばに退かせ組合の事務員勤めさす長女うららを

二十九　共同生活といふは名のみにてことごとく君を恃みて安けし吾は（井上氏へ）

三十　働きの鈍き我らとさげすめる言にも耐へて生きゆく日々を

三十一　この国に二十とせあまり過ごししが顧みて我の何を遺しし

三十二　五十路に入りにしかなと思ほへば己いたはり生くべかりけり

三十三　住み古りしこの荒家を建て替へてすがしく住まん時は何日なりや

中学過程を中途で退学させ、地元の日系農業組合の事務員に長女を就職させたことが詠われている。一方では学費を出してやる十分なゆとりがないため、一方では月々決まった金を手にすることができるという切羽詰まった理由で子供を勤め人にしたのだ二十八。

二十九で詠われているように共同事業、共同生活とは言っても、すべてを共営者に頼ってのものであった。農業経営のぎりぎりのところでは、共営者はどの心労はなく気が楽だった（「安けし吾は」）とは言え、子供を学校へ通わすことには、共営者に対してやはりはばかられるものがあったのではないか。

しかし時には、あの一家はどうも働きがない、という周囲の言葉も聞こえて来る。現実に営農の結果が思わしくなく、貧から抜け出せないのであってみれば、蔑みの言葉も甘んじて受けねばならなかった。それにしても「生きゆく日々を」は重い表現である。この思いは三十一につながってゆく。移住後二十年余をふり返ってみると、これと言う遺したものは何もないということである。このような思いはなにも岩波ひとりに限らないが、ブラジル移住の「志」が人一倍高かっただけに、アリアンサ移住地を後にしてから十数年を経ている今も、挫折感は人並み以上に大きかったと察しられる。

自分もいつの間にか五十歳台に入った。顧みると若さを頼りに厳しい労働もやって来たが、もうそろそろ、心の面でも体の面でも自分というものをいたわりながら、生きなければならない時期に至ったという感慨が三十二であり、そういう自らに言い聞かせるような状態の中で、これほどの荒家を新しい家に建て替えて住むことのできるのはいつの日のことだろうかという焦りも生じて来るのであった　三十三。

一九四九年　五十一歳

我が歌集がアララギ叢書の……

①新しき代の動きつつある時に吾が歌も思想も既に古きか

②幾年かの空白ありしかばたは易く追随し難し母国歌壇の動きに

③新しきに即かむ意欲は動けども既に固定せしか我の歌境は

④作歌苦悩は敢て君達のみにあらず吾も同じく仲間の一人

⑤歌の道にも少し積極的にせよと言えど今の我が境遇はそれを許さず

⑥藤森君の歌集がアララギ叢書の一冊となり世に出でて既に版を重ねぬ

⑦我が歌集がアララギ叢書の一冊とならむを願ふは空しさ望みか

⑧なにがしかの歌を詠みしといふのみにて吾や空しく五十路に入りぬ

⑨五十年空しく生きて来し吾か只なにがしかの歌詠みしのみ

終戦後数年を経たこの頃になると、日本からかなりな数の短歌誌が来るようになっていたし、歌集や関係書も来るようになっていた。邦字新聞にも日本の歌壇の消息が時折掲載された。戦前のものとは比ぶべくもない粗末な紙に印刷された薄っぺラなものだったが、コロニアの短歌作者たちは、むさぼるようにこれを読んだ。

無条件降伏で終った戦争が、母国の短歌界や作品にどういう影響を残したか、爪跡を印したかということがコロニア作歌者たちの一定の作品水準にあるものにとっての最大関心事であった。コロニア短歌のマンネリ化が論じられることも生じていた。

コロニア短歌の名実共の中心的存在だった岩波が、これらの日本短歌界の動向、それに影響されての、まだ微かではあったとはいえ、コロニア短歌の変化して行こうとする傾向に無関心であり得た筈はない。否むしろ、日本の短歌の動向に直撃され、コロニア短歌の変ろうとする姿の最も先端にいたのは岩波自身であったかも知れないのだ。

「ブラジル日本移民七十年史」の「移民史的視点からみたコロニア文芸略史」によると、コロニアの短歌は一九五〇年頃から、写実傾向を基底としながらも「戦後世界の自由民主主義的な思想の影響を受けて多少の変化をみせている。自我の開放に焦点を合わせて、自由で理知的な平衡感覚に支えられた作品が現れて来た」とあるが、岩波もこの動きの外にあることは出来なかった。

ごく大雑把に言うと、コロニアの作歌者たちの目にうつった日本の短歌の変容とは、国家、政治、社会、経済、思想、生活などのあらゆる人間界の事象に対する、批判性、思索性のある作品を求める傾向、となるだろうか。

もちろん、戦前の作品にもこういう傾向のものがなかったという訳ではない。しかし戦争の時代を一つの区切りとして、日本の第一線級歌人の層が大きな転換期に入ったことは間違いないのではないか。年齢的にも転換の時代を迎えていたと言えるだろう。そういう転換期の、特に比較的若い世代の試みが、コロニアの作歌者たちの或る一部分を強烈に刺激したのであった。もう少し後になるが、塚本邦雄、岡井隆らを旗手とする「前衛短歌」の時代も準備されつつあったのだった。

①から④の作品は、こういう短歌界の事態に直面しての岩波の苦悩を如実に示したものといえよう。

①で言っている「新しき時代の動き」とは、単に短歌に関する問題だけではない。「思想」と言っているのは、日本という国と日本人というものに対する岩波の考え方、

また宿命としてそれにがんじがらめに関わり合いながら而も絶対的、実質的な距離によってそれと隔離されている己れとは何者なのかという省察などが籠められていると理解して間違いないであろう。短歌創作の上で、如何にそれらへ対処してゆくべきかという苦悩であった。

②は、六～七年の間隔（戦争前後の）を置いて、突然に目にした日本の短歌作品の変容を納得しそれに近づいて行くことの困難さを詠っているのだが、③では新しい動向に遅れをとらず、自らの作品にも新しい境地を拓こうという意欲はありながらも、それを如何に捉え、如何に表現するかという段になると、どこから手をつけていいか分らないのだ。自分の短歌の境地、素材を掴む範囲といったものは、既に固定してしまって、打開の余地はないのかと嘆息している。

短歌創作の上での苦悩は、自己を見つめるという性向の強いものはど深いものだ。岩波は「君たちは自分を一応師と呼んでくれている。幾らか先を歩いているとみてくれているのだろうが、苦しみは同じなのだよ」、と言っているのが④だ。

歌誌「椰子樹」とパウリスタ新聞歌壇の選者でありながら、岩波は作歌の指導ということでは確かに積極性を欠いているようなところがあった。それは戦前の「日伯新聞」の歌壇選者としても、同じようにみられていた。元来が大所高所から物を言うということを好む性格ではなかったから、作品評も良し悪しは言いながら一歩突き進

んでの「何故」と言うところまでは言わないことが多かったのだ。一つには、やはり農作業の繁忙と好転しない一家の経済状態から来る心の重さが指導に積極性を持たせなかったことは容易に想像できる。⑤でいっている「境遇」とはそれである。

⑥の「藤森君」は、戦前の或る時代に「アララギ」誌上で同じ水準で扱われていた同人仲間か、或いは故郷を同じくする歌人だったのだろう。その藤森の歌集が「アララギ叢書」の一つとして刊行され、それが好評を得て第二版まで出した、ということを「アララギ」誌上で知ったのだ。同時代に「アララギ」に名を連ねて作品を競い合った藤森と同様に、自分の歌集が「アララギ叢書」の一つに加えられて出版されることを願うのは、到底叶えられないことなのか、これもブラジルという遠い地に住み、而も戦時五～六年にも及ぶ「アララギ」との間の断絶が、自分の作品水準を藤森君らに比べて低くしてしまっているのではないか、という不安感である。

既に事情を記述した通り、岩波の生涯の望みは、遂に死後になっても叶えられることはなかったのである。

⑧⑨は、繰り返して詠われている想いで、五十年の生涯で残し得たのは、自ら許し得るのはほんの僅かに過ぎないという状態の短歌作品群だけだ、と言っている。五十歳という節目に到ってみると、五十年かけてたった、という想いはより深かったことが想像される。

⑩カローサを御しっつ封切りて拾ひ読む今着きしアララギ三月号を

日本から届く書籍雑誌類は、包みをとくのももどかしく先ず目を通すのだった。まして生涯を拠るに等しい歌誌である。しかしカローサ（馬に引かせる荷車）を卸しながら、というのはハタ目にも異様で怠けているように見られてしまう。「貧乏でヒマもないクセに」という嘲りは、こんな姿に向けられたのかも知れない。

⑪口汚く罵り合へる妻も吾も互みに老けて耐（こら）へ性のなき

⑫声あらげ妻を罵り怒れども遂にして我の和むにあらず

⑬夫婦の諍ひもあらはに歌に作る吾を哀れと人は言ふべし

⑭白髪いたく殖えし吾妻よ日毎々々くり返す気苦労は思はぬにあらず

⑮妻の居らぬ夕餉を子らと食すことの侘びしさにも慣れて一年ちかし

夫婦が、声を荒らくし、普通なら聞くに耐えないほどの言葉を使って罵り合う、というのはどういう状況下のことであったろうか。日々の労働の疲れと、いつまでたっても抜け出すことのできない〝貧〟が、双方の心

をとげとげしくしていたことは想像できる。心身の疲れが理性を失わせ、我慢するという気持を（耐へ性）なくしていたのであろう。或いは妻は、言ってはならない夫の働きのなさをずけずけと言い放ち、また理想の挫折にまで言い及んだかも知れないのだ。夫は夫で、日頃溜めていた不満をこまごまとぶちつけたのであろう。「互みに老けて」という表現はこの場合は重要である。「老ける」は年をとるということだが、もう一つ年寄りじみるという意味もある。この歌の場合、「貧乏暮しのために両人とも年よりは老けてみえるようにならてしまって」という気持、とみるのが妥当ではあるまいか。五十歳をようやく越えたところで、「年をとってしまって」と自らをみるものだろうか、と思うからだ。

それにしても罵り合ったすぐ後での「耐へ性のなき」という反省はいたましい⑪。

罵り怒り狂ってみても、決して心が和むことのないのは初めからわかっていてのことなのであった⑫。

註、「あらげ」は正しくは「あららげ」）

⑬は、如何にも岩波という人間のよく出た作品と言えるようだ。前にも触れたように岩波は、たいていの人間はつとめて外には洩らすまいとする夫婦間のことを歌に詠むだけでなく、明らさまに活字にして来ているのだが、愛情の窺えるものならいざ知らず、恥としなければならない不和までを歌にし発表する、このような行為の「吾」を人は憐れむべき人間だというだろうとここでは言って

いる。事実そのような岩波批判もどこかでは囁やかれていたのだった。それを承知でこの歌は作られているのだが、岩波菊治にあっては、素材は何であれ、自己への誠実こそが歌のいのちであったのだ。

争いを繰り返しつつも、齢にしては白髪がひどく目立つようになった妻への憐憫の情が湧かぬ訳ではない。日々の苦労はわかっていても、今はどうにもならない状況に一家はあるのだよ、というのが⑭の歌。⑮の「妻の居らぬ夕餉」というのは、共同経営（といっても一九四七～四八年二十五　にある如く共営者に多くを頼ってのものだったらしいが）の事情で妻は共営者の家の仕事に時間を割くことが多く、岩波がとる夕食は殆ど子供相手の侘しいものであった。それがもう一年近く続いて、幾らか慣れて来たのである。そして侘しさに慣れて来たそのことがまた侘しい。

⑯あくせくと只働きて在る吾を痴呆の如しと時に自嘲す

⑰なりふりに構わぬ吾を哀れがり人は賜ひぬワイシャツをネクタイを

⑱午前三時に起きて鶏舎に点燈ししばしまどろめば直ぐに夜の明となる

⑲笑ふことまた唄ふこともなき日々を繰り返し来て既にいく年

⑳桃の木の下蔭にして芽ぶきたる二三本の独活を酢味

噌にして食ふ

例え一首の短歌であっても、己れの一瞬の心の動きを捉え、それを表現することには悦びを伴う。この自己を捉え得たという悦びを味わうことが出来ればこそ、一生をかけてもこの一短詩型にかかずらうのだ。しかしそれは一方においては、己れの心の微かなるところまで切り開いて極めねばならない、という苦しみを伴うものでもある。自己の心を鋭く省みる性格の強い作歌者ほど、人間の心の深みまで下りて行けるのであり、深い味わいの歌がそこから生まれて来る、と言えるであろう。もちろん、そこに至るためには、性格を持つだけではなく、表現への闘いが必要なのであるが。

自らを「痴呆の如し」と観じなければならない、というのは、人一倍の理性を持つものにとって如何に苦しいことであろうか⑯。そうして、それに、既に何年という間、作者の日々には、心を放って笑うことも、ましてや歌を唄うこともなかったというのだ⑲。この時代の岩波の生活を思い描くのは苦しみを伴う。そんな明け暮れの中で、独活を酢味噌にして食べたのは、どんなに慰められるごとであったろうか⑳。またしても作者は、信濃の独活の酢味噌あえを目に浮かべたことであろう。

二十一　若き日よりあくがれてゐし大空に今在りといへど只雲の上（リオ路）

二十二　二十余年前若き移民にて着きたりしリオの港を空より俯瞰す

二十三　二時間余り只雲の中を飛び来しがああ眼の下に見るリオの港

二十四　ニテロイ通いの渡船がのろのろと走る見ゆ高度五百米のわが機上より

二十五　波の穂の白きも既に見え難き昏れ行く海の上を飛びゆく

二十六　空を行かば十日足らずにて日本に着くといへど誰も彼もが叶ふことにあらず

この年岩波は飛行機に乗った時の歌十九首の連作を残している。当時はまだ誰も彼もが旅行に飛行機を利用するということはなかったのだが、この時彼は共営者の再婚相手の見当をつけることを頼まれて、リオ経由ベロ・オリゾンテまでいったのであった。もちろん短歌仲間の誰も飛行機の経験はなかったから、連作は新鮮な印象を与えた。

若かりし日、妻を携えて初めてブラジルの土を踏んだリオ港を、今大空から見下ろすのだ。

二十一、二十二、二十三からは心の昂りがそのまま伝わって来る。二十六で詠われているのは、往時は五十日、六十日の船旅でやっと着いたブラジルから、空路だったら十日足らずで日本へ行ける、というが、容易でないのはその航空賃である。計らずも今、飛行機に乗るという

経験をしているが、到底自分の力で実現できることではないという思いである。

一九五〇年　五十二歳

通俗雑誌今宵読みゐて……

①スタンドは身動きもならぬ程に人満てりそのおはかたは我ら日本人

②スタート台に立てるわれ等の飛魚のその日焼けせし達しき体躯

③古橋と橋爪が並びてトップ切る五十米も遅れし伯人選手ら

④メンマストに高くひるがへる旭日旗仰げばしばし湧き来る涙

敗戦後の困窮の極みにあった日本に、いち早く明るい気分をもたらしたものは、スポーツ界の水泳における強力選手の輩出であった。戦前の日本の水泳競技は〝世界の水泳王国〟と呼ばれて長年にわたりアメリカその他を押さえていた。その伝統が生きていて、食料も不足するような状況の中から、競泳で世界的水準の記録を生む選手が現われ始め、一九四九年の全米水上競技に特に招かれた古橋、橋爪らが次々と世界新記録を樹立して日本国民を狂喜させ、世界のスポーツ界を驚かせたのであった。

これらの相次ぐ快挙は自信を喪失していた自体国民に初めて光明を取り戻させたとさえ稱せられたのである。

戦後の日系コロニアの沈滞した空気に活力を建らせるためには、華々しい活躍を見せ始めている日本水上選手団をブラジルに招いて、その強さを見せて貰うに如くものはあるまい、という発案が、当時のサンパウロ州のパジリア体育局長の賛同を得て実現することになったのであった。パジリア局長は、戦前の日本陸上選手団が来伯した頃は自らも選手として日伯対抗競技で活躍した人で、日本人に対する理解の深い人物であった。

日本水上選手団五名は一九五〇年三月四日に州賓待遇でサンパウロに迎えられた。日伯国交のまだ回復していないこの時期での選手団の招待は、戦後日系社会に生じた混乱の沈静化を計りたいとするサンパウロ州当局の思いやりと、日本移民のブラジルの産業に対する貢献への評価が背後にあったと思われる。

選手団はこれらの期待にそむかぬ競技成績を挙げ幾つかの世界新記録を樹立した。岩波もサンパウロ市のパカエンブー競技場へ選手を見に来たのだ。①～④はその時の情景と作者の心情がそのまま出ている。戦争を挟んでほぼ十年間に亘り、公けに日の丸をみることのできなかった移民達は、この時涙を抑えようとはしなかったのだ。「フジヤマのトビウオ」は、ブラジル人の間でも通用する名稀となったのであったが、一方では、あれが日常の食物にも窮していると言われる日本の青年の体格であ

る筈はない。アメリカが送って来た別のアジア人であろう、といった風説も流された。選手たちが「日本は勝った」といわないのはその故だ、という訳であった。

⑤天皇誕生の日といふ言葉なじめざり天長節と言ひ慣れし我ら

⑥通俗雑誌今宵読みゐて知り得たるアプレゲールといふ言葉一つ

祖国の敗戦は納得しながらも、皇室に関連する用語までが易々と変えられてゆくのには、やはりついてゆけない感情のしこりがあったのだ。天皇の「人間宣言」は比較的容易に納得できても、天皇制が残されたのであれば「天長節」「地久節」という呼び方のどこが悪いか、という思いであった⑤。

「アプレゲール（アプレ、〝戦後派〟）」とは第二次大戦後の、これまでの思想、道徳、習慣にとらわれないで行動する傾向、或いはその人をいう言葉で、椰揄的な気持を含ませて使われることが多かったのだが、岩波はこの言葉を安っぽい日本の通俗雑誌を読んでいて知ったのである。雑誌を読みながら、そこに現われる祖国の社会、人間行動の変貌への、他国に移住している者としての驚きもここにはこめられているだろう⑥。

同時にこの⑥は、岩波短歌の変貌の一例とみることができるであろう。日本の戦後短歌の影響を受けてのもの

であるが、これまでの岩波短歌にはみられなかった表現手法の変化が、「いふ言葉一つ」には感じられるのだ。独断を承知で敢て言えば、〝アララギ的〟をはみ出した素材の捉え方と言葉の用い方の〝自在性〟ということになるであろうか。

⑦うつらうつら呆けし如く眠りをり年の始めの今日一日を

⑧五千本の瓜の手入れに追はれゐて元旦一日を休みたるのみ

⑨天皇の誕生日と申すこの佳き古りし我が家に電灯点る

⑩この国に移り来て二十幾年間明るき電灯の生活せざりき

⑪古き家の土間の片隅に幕を張りて我が宵々の臥床とぞなる

⑫妻子らに鶏の世話は任せおきて我は日毎なす鶏舎の設備

⑦⑧⑪⑫に見る疲れと多忙な明け暮れの中で、家に電気が引かれる。⑩にあるように、ブラジル生活二十数年にして、初めて電灯の明るさの下で生活ができることになったのである。而もその日が「天皇誕生の日」というめでたい日に当ったことに、作者は何かわが家の吉兆のようなものを感じたのではなかったろうか。

「人間宣言」があろうと、その誕生日の名辞が変ろうと、戦争の責任を問われ続けている人であろうとも、移民の大方にとって天皇はやはり心の拠りどころとする尊貴なお方であった。だから天皇誕生の日は「佳き日」であったのだ。

⑬独り子が兵に徹されてこの一年常に仕事に追はれつつ過ぎき

⑭傾きし齢を思へば子らがため五十二歳にて生命保険に入る

⑮昼の間は何か書かむと思ひつつ夜になればただ疲れて眠る

「独り子」はここではたった一人の男の子ということだ。作者の理想の実現はもろくも挫折し、現実には心身共に余裕のない生活がつづいていても、ブラジル生まれの子は兵に徴集されるまでに成長しているのである。一人前の農作業ができるまでになった男の子の入隊は、労働力の半分を失ったに等しい打撃を与えた。多忙は輪をかけることになったのだが、永住を志しての移住ではあっても郷国思慕の情の強かった岩波にとって、ブラジル兵士となる息子をみるのは、仕奉に追われることへの不安以外にも、重い感慨に陥らせるものではなかったか。

⑭の歌が作られた一九五〇年は今から四十三年前だが、この頃はまだ移民の〝高齢化〟は現在ほどは進んでい

なかったから、作者の五十二歳という年齢は当時としては高齢といわれる層に近づいていたのだろうか。日本移民には比較的長寿の者が多いことがわかった現今では、五十歳そこそこを「傾きし齢」と痛感することは自他ともに少ないのではないかと思われるのだが、岩波には、自分の長からぬ命への、予感のようなものがあったのではないか、とも考えられる。

それにしても、農業での働きだけでは、己れなき後の妻子の生活を支える経済的な余裕を得ることは難しいという思いから、命との引きかえではじめて金の得られる生命保険に加入したというのは、普通の「万一のために」というのとは意味が重い。だが、不幸にしてこの作者の予感は事実となったのである。

初めにも書いたが、岩波自身が名づけたモジの住居「桃蔭山房」は、名前が美しいだけで全くのあばら屋であり、家を早く新築し、そこで歌会を開きたい、というのが岩波の久しい念願の一つであった。それが生前には実現せず、皮肉なことには（というか、予期通りというか）、死後になってこの生命保険の金が家の新築の費用の大きな部分をまかなうことになったのであった。

⑮の「何か」は、やはり短歌に関する文章かその指導のためのものであったろうが、夜になると忽ち眠くなって書く意欲も失われるのである。岩波に文章が少ないのは、農耕での疲れが深かったからであった。生涯の心残りであったろう。

⑯よろこびてまた励まして手紙かくアララギに載りし
開沼さん品山君らに
⑰若き君らに負けじと思ひ或時は既に硬化せし我とも
意気地なく思う
⑱十年ぶりに我が歌三首アララギに載りたりその間の
永き空白
⑲荒壁に懸けて栄えねど額にして朝夕に仰ぐ土屋先生
の色紙
⑳赤彦先生と茂吉先生の軸を並べ掛けて朝夕に仰ぐ我
のよろこび

「アララギ短歌」を最上とした岩波は、ブラジルの歌人たちをその主張に則って指導しようとした。会員になることとそれへの投稿をすすめた。後輩の作品が次第に「アララギ」に載るようになるのが岩波の喜びであり、一層励まして手紙を書くのを怠らなかった⑯。そうして自らも、弟子たちに負けまいと意欲をかき立てるのだが、時にはもはや自分の頭脳は柔軟性をなくし、新しい時代の作品は生めないのではないか、というような弱い心になる、と、嘆くのが⑰である。

それにしても、戦争の五年間を挟んだとしても、十年間も「アララギ」に岩波の作品が載らなかったのは何故か。戦後になると、弟子たちの作品の方が早く載り始めたことが⑯⑰⑱からは想像されるのだが、とにかくこの永い空白は異常である。「載りたり」と言っているところ

をみると、投稿はしていたが、それが採用されなかった、いうことだろうか。だとすると岩波の落胆は深かったに違いない。而も採用されたのは僅かに三首であった。（戦争直前頃は五首発表組だった）。

「アララギ」の写生主義を絶対として信奉した岩披の気持は⑲⑳にそのまま現われている。土屋文明、島木赤彦、斉藤茂吉の色紙或いは掛け軸に掛かれた筆跡を、鑑賞するのではなく、仰ぐのである。仰ぐことに至上のよろこびを感じたのであった。

一九五一年　五十三歳
十年の後を恃みて……

①鶏の飼料の空袋もて作りたるゾボンをはきて鶏飼ふ妻子ら

②肥料代箱代運賃手数料など差引かば百ミルのトマテが幾千の手間賃か

③痩せやせていよいよ小ささ吾が妻が割合元気に鶏飼ひてゐる

④年毎に千羽の育雛つづけ来し妻は沁々と疲れをかこつ

労働着用の布地を買って縫うのではなく、飼料や肥料の空袋を洗ってズボンやシャツを作るのは、農家で普通

に行われたことであったが、やはり、如何にも間に合わせ的な感じは免れないのだ。そんな姿の妻子をふと憐れむ心が①である。

生産資材価格と動き易い生産物販売値の不均衡は、いつの時代にもブラジルの農業にはあった。一箱百ミルで売ってどれだけのものが手もとに残るのか、という嘆息と不安が②からは伝わって来る。字余りの大きい作品だが、それだけ気持が桔屈しているということであろう。

けっして円満な夫婦ではなかったとはいえ、もともと小柄な妻が過酷な労働にいよいよ痩せ細りながらも、てきぱきと行動している姿には哀憐の情と感謝の思いも湧くのだった③。

年々千羽の雛を入れる養鶏といえば、常住成鶏と雛とで二千羽くらいを飼っていることになる。五百羽も飼えば生活の安定は得られるとされた時代と余り遠くない頃だから、共同経営とはいえ、一応の規模であったと想像される。桃、野菜、トマテの栽培をも兼ねた経営であったから岩波一家にとっては、大きな労力を要求されるものであったろう。いつになく妻が、育雛という細心の注意が必要な労働を幾年も続けたことによって潜った疲れを、しみじみとかこつのだ④。

⑤三十年前しばらく力行会の飯食ひしゆかりにて吾も会員の一人と名乗る

⑥いつもいつも君に払わせて飲む故に少しは遠慮もし

なくてはならぬ
⑦十年の後を恃みて五種類のオリベイラの苗十五本植う

岩波菊治の「力行会」入会は一九二三年、二十五歳の時である。「力行会」は「キリスト教精神による新東地移住・開拓事業を行う」と謳った団体だから、岩波もキリスト教に入信していたが、ブラジル移住の直接の動機は当時の会長永田稠との出会にあるようだ。「飯食ひし」とあるから、会員としての研修のようなものを渡伯前に受けたのであろう。それから三十年経て、力行会出身者の誰かに出会ったか、その集会に顔を出すことがあったのだろう。

そこで「力行会員の一人」と名乗ったのである⑤。だが、この作品からは、力行会員として移住したものの誇りのようなものは些かも感じられない。「飯食ひし」「一人と名乗る」の語調には、何か自らを卑下する響きがある。

それは志が挫折してアリアンサを〝逃げ出した〟こと、その上に、三十年経った現在も、他者に頼る共同経営を脱し切れない貧しさにあることへの恥辱感といっていいものではなかりたろうか。

〝歌人貧乏〟というのは自他共に解す当時の通り相場であったが、仲間同士で酒を呑む機会があつても、その生活の苦しさを知っているために、なるべく岩波には酒代を負担させないという空気があった。⑥で詠われてい

る「君」とは誰かわからないが、ごく親しい飲み仲間で、いつも勘定を引き受けていたのだろう。相手をおごることは絶えてなく、また割り勘をも常に払わない自分だから、飲みたいだけ飲むという訳にはいかない。親しい相手ではあっても、その負担を軽くするために、遠慮して飲みたいのを我慢しなければならない、といっているのだ。

岩波には、人に接する時、何か恥らいの表情があったと私は記憶している。アリアンサ時代の、志に燃えていた一時期を除いて恥らい（恥ではない）を抱いた生涯ではなかったかと思うのだ。そのことは彼の表情を特徴づけていたように思われるし、またこれが一方では岩波の人間的魅力に、知らず知らずのうちになっていたのではないだろうか。

⑦の「オリベイラ」はオリーブ樹のこと。十年後には果実が経済生産になるということを心頼みとして、オリーブ樹を植えたのである。余裕のない生活にあっても、実にいろいろなことをこまめに試みる農人であったことが窺われる一首である。同時に、農業経営の安定化は永年作物に拠らねば、という考えがあったのかもしれないのだ。当然、一家の将来の安定した生活ということが考えられていたのである。

⑧ミシン買ふべく用意せし金は思ひがけなきわが薬代となり費ひ果しぬ

⑨病みあとの身をいたはりて居る日々よ今日は玉葱二連ほど編む

⑩時折寝台より降りゆきて火をつくらふ妻が懸けおきし苺ジャムの鍋

⑪心決めて病養ひ居るといへど畠の草は伸びて気になる

⑫五十日われ病みしかばこの年の夏の作物は休まねばならぬ

⑬かくの如病みてこやるもつづまりは重ね来し気遣ひと過労の為か

⑭恢復せしわが現身よ昨日の夜は夢にしあはれ精を洩しぬ

「ミシンを買いたい」というのは、確かアリアンサ時代からの妻の希望だった筈だが、それがなかなか実現に至らず、モジ時代になってそのために少しずつ蓄えていた金が、またしても岩波の病気で薬代として消えたのである⑧。⑨⑩⑪は病む日々の僅かな弱々しい行動と、結ばれてほどけない鬱々とした心情が詠われている。

だが⑫になると事は重大である。農作業の主力であるものが、二ヵ月近くも働けないとなると、夏作の栽培は一切できなくなり、当然のことながらこの季節の収入は大きく減少するのだ。家族間の心の焦りは計り知れないものになるのだった。こう見て来ると⑬で詠われている反省は痛々しい。「気遣い」の中には貧しさを脱し切れな

いことからの妻子に対する責任や共営者への卑下も含まれていたであろう。積み重ねた過労は言うまでもないことであった。

長く病み臥る身には性欲が湧くこともなかったのだが、回復期に向った或る夜、相手は誰とも知れないが艶やかな夢をみて、精を洩らしたのである⑭。体力の恢復を示す一事ではあったが、五十を越える齢に至っての夢精は深い侘しきを残したのではなかったろうか。それにしても、岩波の己れを視る目の率直さには打たれずにはおられない。この辺りに、岩波の人間性の魅力の一つはひそんでいたのであろうか。

⑮飛行機にて歌会に来よとパラナより旅費送り来ぬ恭けなけれ

⑯怠り居し選歌尽く整理して負債果てし如き安らぎ

⑰われらの歌をマンネリズムと評したる匿名批評も半ば肯定す

⑱新しき世に遅れたる吾が歌と批評されたり我も斯か思ふ

⑲四人の子と拙なき歌のそこばくを遺せるのみに老いづく吾か

⑳拘禁されし憤りも既に薄らげど今尚惜しむ没収されし先生達の短冊

二十一　文明選歌に吾と同じく名を並べし君ら十人の歌集「自生地」

戦後もこの頃になると、日系人の生活も落ちつき、経済的なゆとりもみられるようになった。文芸各分野も、ルネッサンスとも呼び得べき高揚期に入っていた。各地の短歌会も盛んであった。〃歌人貧乏〃　の定評が消え失せるほどではなかったとしても、皆で金を集めて岩波を飛行機で招待することくらいは出来るようになったのであった。こうした招待で岩波はロンドリーナやプレシデンテ・プルデンテなどを数回訪れている⑮。この、後輩や弟子たちに招かれて地方歌会に出席することほど、岩波に幸福感を起こさせたものはないのではないか。

農業労働で疲れた身で、新聞歌壇、歌誌「椰子樹」の投稿歌の選をし選評を書くことはかなりな精神的負担であった。そのために、怠る、というよりも滞りがちであったのだが、そのことが借金を払えないでいるのと同じような気掛りであった。それを済ました時の解放感が⑯では詠われている。

⑰にある匿名批評者は誰だったのか。だがここで言っているその文章はパウリスタ新聞の文芸欄に載ったものではなかったろうか。当時私はパウリスタ新聞編集部に席があったから、一部からその筆者として疑われている気配があったが、事実はそうではない。たまたま日本の新聞に、ブラジルの短歌について述べた文が載っているのをみつけ、文芸欄で紹介した記憶はあるのだが、その執筆者の本名については日本の新聞にも明記してなかったことを覚えている。それはさておき、批評された当人

の岩波はこの匿名批評の半分くらいには同感であったのだ。⑱では、はっきりとそのことを肯定している。もちろん、この批評文を転載すること自体には、私のコロニア短歌に対する当時の見方、考え方が存在していたのは確かあった。

⑲は、これまでにもしばしば詠われている感懐だが、⑳はかの終戦直前の時代に、枢軸国民として獄舎につながれたことを言っているので、その時の憤りそのものはもう薄らいだが、没収されてかえることのない「アララギ」の諸先生方の直筆短冊は諦め切れない、といっているのだ。

２１の歌集「自生地」は、一九五〇年に白玉書房から出たもので、十人とは近藤芳美、中島栄一、扇畑忠雄、金石淳彦、高安国世、宮本利男、狩野登美次、小市巳世司、樋口賢治、小暮政次で各二百首ずつを自選収録している。いずれも「アララギ」の中の若手で、アララギ短歌の戦後の一時期の、代表的存在とされていた歌人群であり、新鮮な感覚に溢れ評価も高い歌集であった。

コロニアの短歌作者たちが、戦後最も早く手に入れることのできた歌集であり、みな刺激されたのだったが、二十一　で言っているように戦前の　「アララギ」誌上で岩波と名前を並べていた（つまり「アララギ」での作品評価が同一水準として扱われていた）作者達であっただけに、複雑な思いに駆られたであろうと想像される。最近手に入れた戦争直前（一九四一年五月）の「アララギ」

によると、岩波は作品其の一欄で斉藤茂吉、土屋文明、岡麓、佐藤佐太郎、五味保義ら五十数名の中に含まれており、「自生地」の十人とは〝格〟が上に扱われている。「自生地」を見ての羨望と焦りは想像に難くない。

とかく移民は、事情は何であったろうとも、異国に移り住むことになった己れの現在の姿と、郷国において己れの周囲にあった者の現在の状況とを、比べて思うことを免れ得なかった。それは相手がほぼ同等の位置、状態にあった者であればあるほど、この比べて思う気持は強かった筈である。「錦衣帰郷」は、単に豊かになって故郷に帰るということではない。そのことによって、生れ故郷を去って見も知らぬ外国へ働きにいくという大それた行為を敢てした己れの考えと勇気が、決して間違ったものではなくて、日本にそのままいるかっての周囲の者たちよりも、一頭地を抜く存在となり得た己れの姿を郷里の人々に見て貰う、という気持ちが強かったのだ。

⑲にある如く「四人の子と拙なき歌そこばくを遺せるのみ」と観じなければならない状況にあった岩波は、「自生地」に名を連ねた作者群に羨望を禁じ得なかったのである。而も「自生地」の十人は年齢的には岩波よりも一回りもその上も若い面々であった。

二十二　呪はれし結婚なりきと妻が言ひて銀婚式も遂に祝はず

二十三　わが歌を殆ど読まぬわが妻が時に見当違ひの批評す

二十四　更年期過ぎたる妻がまぐはひをいたく苦しき義務とかこつ

二十五　このままに命果つるとも子供らは皆それぞれに生きて行くべし

「年譜」によると岩波夫妻の結婚は一九二四年だから、銀婚は一九四九年の筈だが、二十二は「歌集」の一九五一年の部に収載されている。この歌が作られた時の状況が如何なるものであったかは想像もできないが、夫婦として長く生き、子を成し、苦労を共にし、これからも共に生きてゆかねばならない者として、妻は決して声にしてはならないことを夫に向って言ったのである。貧しさと疲れから「口汚なく罵り合しうことは数限りなく起っていたのだが、「呪われた結婚だった」の一言は、夫にとどめを刺すに等しいものであった筈である。銀婚の年だからと言って祝う気持になれなかったのは当然のことだ。男としての、一家の責任者としての誇り、また争いながらも持ち続けていた信頼感も、このひとことで踏み躙られたのではなかったか。だが妻には妻の、我慢の限界を越えた何かへの憤りがあったのだろう、と言うはかはない二十二。

自分の作る短歌などは殆ど目を向けることをしないだろうと夫が思っていた妻が、あるとき批評のようなこと

を言ったのである。而も作者である夫からみればまるで見当違いのものだった、というので、これなどは争いの多かった夫婦仲での微笑ましい一光景というべきで、何か救われるような気がする二十三。

二十四は、岩波持前の率直さが遺憾なく現われた作品と言える。「まぐはひ」は性交渉のことだが、コロニアの短歌にもこの言葉を使った作品はほんの数えるほどしかないだろう。而も、女の更年期過ぎての性交渉の苦しさが言われているのだが、恐らく夫との間の気持の上での交流の欠落が、齢から来るもの以上に妻に肉体上の忌避感を生じさせていたのであるまいか。

この頃になると、或いは岩波は自らの死を想うことが多くなったのだろうか、何一つ子供たちのために遺してやったものはないが、若い生命なのだから、例え苦しい道程であろうとも、各自の未来を生きて行ってくれるだろう。今のこの生活の状況で、子らの一人々々の上を思い煩ってみても致し方はないのだという思いの歌が二十五であろう。

二十六　百姓の歌詠みわれの大きな手を率直に握る多羅間俊彦さん

二十七　明治大帝の血を享け給ふ俊彦氏と手を握り合ふも新しき世か

二十八　遂に敗れし戦なりき六年経て今日ぞ漸く講和条約結ぼる

作品二十六の「多羅問俊彦さん」は、日本初の〝宮様総理〟と呼ばれ、終戦処理内閣（鈴木貫太郎首相）の後を継いで一九四五年八月十七日に内閣総理大臣になった陸軍大将東久邇稔彦の息であるが、戦前のバウルー駐在領事故多羅問鉄輔に跡継ぎがなかったところから、未亡人との間に養子縁組みが成立、一九五一年四月リオ・デ・ジャネイロ着でサンパウロ州リンス市近くにあった多羅間耕地に移住して来たのであった。（現サンパウロ市）。

世が世であればやんごとなき宮家の王子で、日本にあってもとても一般庶民が手など差し出せる相手ではないが、どんな機会によるものか、岩波は親しく会うことができ、而もいとも率直に、何らためらう様子もなく自分の百姓仕事の大きな手を握ってくれたことに感激しているのである。日本人が尊崇してやまなかった明治大帝の血を享けている人とあっては、なおさらであったが、これも敗戦という祖国にとっての大転換の運命があったからこその事だ、と世の移りを思うのだ（２７）。

サンフランシスコ講和条約は一九五一年九月、米国サンフランシスコ市で調印され、この結果日本は終戦六年にしてようやく世界の国家群の中に復帰することができたのだった。二十八の「遂に敗れし戦なりきし」には、移民の自分達が、海外（而も敵国）にあって戦争の状況や推移の情報が得られぬままに、勝利を、日本の不敗を信じて苦しみに耐えたにもかかわらず空しく敗れたという

今もなお消えぬ悔しみの感慨がこめられており、同時に、「今日ぞ漸く」ではやっと国際社会の一員に加えられたことへ安堵感を洩らしているのである。「遂に敗れし」と「今日ぞ漸く」の間には、移民としての、また一個の日本国民としての、長い時間の、心の不安の流れがあったのだった。

一九五二年　五十四歳

花作りに転向なさむと……

①これの世に貧しく生きてかそかなる歌作り来し三十年余り

②只一つ歌詠むことを拠り所としこの国に生きて貧しかりし二十幾年

③アララギの中にし在りて疑はず三十年を在り経し幸

④土田さん赤彦先生土屋先生と良き師に就きし幸を思ふ

⑤今の位置を辛うじて保つのみにして常に苦しめど進歩なきわが歌

⑥わが妻に叱言いはれつつ購ひて本棚にあり万葉集私註七冊

岩波が「アララギ」に入会したのは一九一八年で二十歳の時であるがその前から作歌はしていたであろうから、一九五二年現在では三十数年短歌を作って来たことにな

る。いつもいつも貧しい生活で、詠んだ歌もかすかな力しか持たないものであったと言い①、一九二五年の移住も、すべてが事志とたがって、遂には短歌を作ることだけを心の拠りどころにして、二十幾年をブラジルで貧しいままで生きてしまった、という深い嘆息がここにはある②。

岩波の生涯の大方を知り、こうした作品を読むと、一種のやりきれなさを覚えるのだが、これが作者の心の真実であったのだ。

そうではありながらも、「アララギ」に加入して、その指標とする写生道を疑うことなく三十数年もひたむきに実践して来たこと、そうして土田耕平、島木赤彦、土屋文明等の直接の影響と指導を受け得たことを、この上もない幸いなことだったと追憶するのである③④。

⑤で言っている「今の位置」とは、「アララギ」における評価或いは扱われ方、ということなのか、それとも己れの作品への自らの評価水準ということなのか不明だが、これほど苦しんで作歌しても、進歩がみられないと自覚しなければならないのは、創作する者の苦痛である。岩波の歌は、字余りも多く概してごつごつした感触があり、いわゆる彫身鎖骨の跡はそれほど感じられないのだが、苦しみは把握した素材の真実と表現との間の距離をどう埋めるかにあったのだろう。一見単純な姿にみえる作品の背後にある、岩波の心の苦渋を思わせるものである。

⑥は土屋文明著の「万葉集私註」である。町の書店で

見出して、矢も楯もたまらず買ってしまったのだろう。貧しい者には日本の図書は常に高価であったから、妻が叱言を言うのも無理ではなかった。しかし、尊敬する師の大著七冊を揃えて本棚に並べて眺める満足感は、何ものにも代え難いものであった。

⑦わが送りし一万円を抱きつつ一夜いねしとふ八十七歳の母

⑧米寿の齢となりし母がゐますふるさと信濃を恋ふる久しく

⑨八十八の母よ一目だに逢ひたきに遂に行き難きか遠きふるさと

⑩わが歌をレコードに吹きこみて送りやるとても逢ひたき故国の老母に

⑪故里より送られしボール箱の包み解くああ梅干寒天数の子海苔昆布椎茸等々

終戦後のかなり久しい間、ブラジルに住む者は、敗戦によってもたらされた物資不足に苦しむ古里の肉親縁者に、自分の可能な範囲で物品や金を送り続けたのであった。生活が豊かとはいえない者も同じだった。岩波は前に砂糖を送った歌を作っているが、⑦では息子から送られて来た一万円の金を老母が一晩中抱いて寝たという報告の手紙を受け取ったことが詠われている。⑧⑨では、ただの一目だけでも会いたいと思う米寿の母がいる郷国

信濃を恋うこと久しいが、わが住むブラジルは余りにも遠く、遂に訪れることはできないのだろうと詠い、せめて声だけでもレコードに吹き込んで送って母を悦ばせよう、というのが⑩である。

レコードに吹き込んだのは恐らく「ふるさとの信濃の国の山川は」などの郷国思慕の歌であったろう。

一万円やレコードへのお返しとして肉親から「日本の食べ物そのもの」といえる品々が送られて束たのである⑪。字余り、破調も無視して食料品の名前を書き連ねているところに作者の感激が率直に出ている。ボール箱の包みを解く指はふるえていたことだろう。

⑫ぞろぞろと映画場に入りゆく大群の中に見失ふ丈低さ吾妻を

⑬たづさへて日本映画稀に見る老に入りたる我とわが妻

⑭鶏に餌をやり来てまた暫くミシン踏みぼろを継ぎてゐる妻

⑮千二百羽の雛を守りつつ育雛舎に夜毎泊りて火を焚く吾妻

⑯この幾日妻と物言はず在り経れば子等はひそひそと食卓につく

「口汚く罵り合」ってこらえ性のなくなった（一九四九年度⑪）夫婦にも、稀には相携えて映画をみに行くこと

もあった訳で、⑫⑬は重い作品群の中で読者にほっと安らぎの思いを起こさせるものである。「大群の中に見失ふ」には老いに入った（と自覚している）夫の、人一倍小柄な妻をいたわる気持が流れているのであろう。

⑭⑮は、共同経営の養鶏の諸作業を一手で引き受けている形の老い妻の姿を、克明に目で追っているのであり、目はやはり愛しみのまなざしであるだろう。

だが⑯になると、諍いの後で何日間も夫婦が〝無言の行〟を続けているために、その父母の間の険しい空気をひしひしと感じ取りている子供たちが、身を締めるようにそっと食卓につく姿が詠われている。夫婦双方の憤懣は幾日も解けることがなかったのである。業（ごう）とでも言うべき夫婦間の愛憎である。

⑰わが手相を委さに見て南仙子君は言ふ一生金運に恵まれませんよ

⑱歌詠みの菊治が作りたる茄子品評会一等に人選したり

⑲入賞せる我が茄子の前に立ち面映ゆくてそこそこに去る

⑳病みあとの己いたはりつつ採りたりしえぞ菊の種六リットルばかり

二十一　桃の木の下蔭に蕗ははびこれど蕗の茎一つ出でしことなし

二十二　手数かかる桃を作るよりも簡単なる柿栽培者

がより多く利益上げ居る
二十三　去年より尚儲けむときほひつつ植えしえぞ菊
一万本あまり
二十四　米二俵負ひたることも若き日の思ひ出として
今に自慢す
二十五　下肥を使はぬ農に在り慣れて地深く掘りて厠
を作る
二十六　花作りに転向なさむ下心先づ手始めにえぞ菊
作る

「一生金運に恵まれませんよ」と若い文芸仲間に言われた岩波は、それを肯定しながらもまだこの何ヵ月か後に自分の一生が終る、とは思っていなかっただろう⑰。心弱りをみせる作品はかなり作られているが、なお花作りに希望を見出そうとしているのであった二十三、二十六。

篤農型であった岩波は、何によらず手がければ必ず優良品を作る、というところがあった。

身についた農事への懇ろさがあったからだろう。この年のモジ市の農産展で茄子が一等に人選した。「歌を詠む」ということに対する自負のようなものも重いではないが、歌などのうのうと作っているから百姓がおろそかになるのだという批判も耳にしていたのだから、⑱には「そう世間ではいっているようだが、百姓の手腕も棄てたものではないんだよ」という気持も、一瞬起ったのかも知れない。だが、一等入選は俺だよと、その出展品の前

に立ちはだかってこれ見よがしにすることが出来ず、すぐ気恥しくなってあたふたと立ち去るところが、如何にもつつましやかな〝農人精神〟を持ち続けた岩波らしいところで、こうした姿には或る種の痛ましさとユーモラスとを感じるのである⑲。

⑳二十一、二十二、二十四などは、日常生活の中で、ふと拾ったようなささやかな感慨であり、岩波短歌の一つの特徴の〝滋味〟がこもっている。

二十五　の「下肥を使はぬ農」とは即ちブラジルの農業のことである。作者が思い出しているのは日本の「下肥を使う」農業のことであり、感慨は、ブラジルの農業に携わった長い歳月のことに及んでいるのだ。農業に携わる移民たちは常に、土を井戸のように深く掘って厠を作ったのであった。

二十七　肺病むと憚りもなく人に言ふこの程度では死ぬこともなからむ

二十八　喘息の如く夜半に咳きこみて苦しみし揚句の果に血を喀きにけり

二十九　去年の年病みてより疲れ易くなりわが体力も恃めなきかな

喀血後の診察で肺を病んでいることがわかったのだろうか。やはり心身ともの過労から来たものであろう。しかしまだ決定的なところまで肺の状態が進んでいた訳で

もなかったところから、人に健康の様子を尋ねられると、憚りも躊躇もなく、俺は肺病なんだよとわざと言い放ったのである。この程度のことでは死ぬこともあるまいという心頼みと、一つには兆して来る不安を押しかくそうとする意識しない強がりがあったのであろう。だが、肺病では死ななかったが、既に長く徴候らしきもののあった胃の潰瘍で、数ヵ月後に急死するのである。

二十九　は死を予感したような作と読めないこともない。去年の病いからこちら、従来とちがって疲れがすぐ来るようになり、己が体力に自信が持てなくなったのだ。

二十四　にあるような「米を二俵負ひたる」昔を自慢する気特は、もはやこの時はなくなっていたのではあるまいか。

三十　敗れたる狭き祖国に帰りゆきて住まはむとする人ら相次ぐ

三十一　永住帰国と勢ひて去にし人々が再渡航して来しとふ新聞の記事

三十二　日本の勝利信じて帰国する人未だ絶えず終戦七年の今も

三十三　大風呂敷をひろげて得意なる政治屋に軽々しく移民問題を扱はれ度くなし

「日本大勝利」という、ためにするデマを信じて愚かな行動に走る者は、殆ど終戦後の十年間も後を絶たなかっ

たのであった。その一つは、日本は大勝後の繁栄にあるのだから日の丸の下に帰って誰に遠慮もない生活を営むのだと、ブラジルで築いたものをすべて抛って帰国する者が相次いだことである三十、三十二。

そのように威勢よく永住すべく祖国に帰っていった者の中の多くが、日本の現実を目にして再びブラジルに再移住することも起こったのだった。ブラジル日本人移民史八十数年の中で、永久に消えることのない最も悲しむべく憎むべき愚行が繰り返された十年間であった。岩波の周辺にもそれは起っていたのだ。岩波も一時はそのデマを信じた時期もあったのだが、情報の伝わりにくい農村部住まいでありながら彼の目は冷静だった。

日伯の国交が旧に復すと、日本から色々な人士がやって来た。中には、ブラジルに根をおろし、着実な生業を続けている者を褒めそやし、日本にとっての海外移住の重要さと、さもそれの推進が、自己の政治信念であるかの如く広舌を振う政治家も含まれていた。移民としての辛酸をなめつくしている岩波は、そうした人士を許すことができなかった。「政治屋」という最も激しい軽蔑の言葉が、岩波の憤りを如実に語っている三十三。

晩年の叙景歌

一移民の心の跡を辿るということが、この一文の目的であったため、引用した短歌作品は、おおむね屈折した言葉と調べのものが多くなったが、叙景歌には静謐、簡朴なものが少なくない。

牧の棚に隣る草原に咲き垂れて
　　いたく優しきこまつなぎの花

再生林の山のなだりに朝日さし
　　クワレズマの花群落をなす

磯島に二分れせし海潮がまた相寄りて打ちてとどろく

対岸の島山裾の一部落夕べ灯せば近々と見ゆ

潮引きし渚に流れ入る川の清らかにして海より冷たし

イタペチの山の頂きに雲なびき
　　雨期明けし空澄みとほりたる

チバヂーの川瀬の音のこもらへる
　　木群にありて蝉一つ啼く

切花となして売りたるえぞ菊の
　　遅れ咲きたるは種を採るべし

白々と咲ける二本のアメイシャは
　　清しさすぎてむしろ寂しも

十字星既に没りゆきセンタールも地平に低し冷ゆる暁

池の水が落つるところに青々と
　　日本の芹が伸びてはびこる

袋透きて熟れ色見ゆる桃の実を山の小鳥が来ては啄む

妻とめの短歌

或る時は「呪はれし結婚なりき」とまで面と向って夫に言い（一九五一年二十二）、常に「口汚く罵り合う」ことの絶えなかった（一九四九年⑪）妻とめも、岩波の死後は短歌を作るようになった。死の翌年（一九五三年）からは全伯短歌大会にも出席するようになっていた。亡夫岩波の代理というような気持があったかも知れない。歌誌「椰子樹」への出詠は一九五四年から始まっている。

御仏の写真に我等は温気たつる珈琲をそなふ朝な朝な

今日も又想ひ浮ぶは新家に住まで逝きにし我が夫のこと
夫も吾も嘆きあひつつ悩む日の多かりしああ過ぎにし日々よ
新しき家建てたれど主人なく朝な夕なに嘆かふ我は

以上一九五四年

雨つづき文なす草の中にしてキヤボの木小さく果はみなかたし
奥地より帰り来し我子の骨片は足とおぼしき一部分のみ
桃畑のけずりし草を寄せ行けばたちまちにして大いなる山
我が夫も歌友もよみしこの浅井にごりしままに三年過ぎにき
我も又夫と有りせば老先の苦楽わかちて世にあるものを
娘が剪定なせし若木の晩熟桃蕾まばらに開きそめたり

以上一九五五年

今年こそはと気負い作りし胡瓜なるに市場に出せば捨値となりぬ
これからは兎を飼ひてすこやかになりたきものと思ふ明けくれ
茄子作りし季は日毎に茄子漬と茄子あげ食べて明かし

暮らしつ
老ひゆく身の今日の疲れをいたはりて昼まどろみぬしばしの間
夜明けに見し夢はレインコート着て坂下にたち居しかっての吾が夫なりし

以上一九五六年

夫逝かしめし悔恨は体重三十キロとなりて毎夜眠らざりし　夫よ許し給へ　一九五七年

我が亡夫の歌集を日本へ発つ友に託して遂に願ひかなひぬ

一九六〇年

一九五五年度作品の「奥地より帰り来し」はアリアンサ時代に死なせた長男の骨のことで、遺骨をモジの墓地に移したのであろう。一九五七年の「夫逝かしめし悔恨」は、読む者の心をえぐるほどに傷ましい。悔恨の思いの中には「呪はれし結婚なりき」と言い放ったことなども含まれていたと思われる。人並みより小柄な妻であったが、悔恨で夜も眠られず体重が三十キロにまで落ちてしまったのだ。「夫よ許し給へ」は岩波の魂魄にまで届く叫びであったろう。一九六〇年度作品「亡夫の歌集」は岩波の死後七年にしてやっと後輩たちの手で成った「岩波菊治歌集」のことである。

歌を作る素振りすらみせたことがなく、歌にかかずらう夫をいまわしくおもったこともあるであろう妻も夫の死後は、歌を作る以外には心を遣る術もなかったのかも知れない。「雨つづき」「桃畑の」「今年こそはと」「茄子作りし李は」などには「門前の小僧」では到り得ない把握と確かな表現力がみられる。また素朴さには夫と共通のものがある。ついでにつけ加えれば、夫の念願だった新しい家の建築は、その死後二年にして、生命保険の金に多くを頼って成ったのであった（一九五四年度「新しき家」）。とめの死は一九七六年四月二十三日であった。

脇坂一の「岩波先生を想う」の歌

アリアンサ時代、短歌を通じて岩波と師弟の関係にあった脇坂一は、一九五二年に最後に岩波に会った時のことを次のように詠んでいる。

何か恐しく二度三度師の手をとり彼の夜ピニェイロスの街に別れき

心優しきスフィンクスと想いつつ歌会の我が師仰ぎしものを

しみじみと生命惜しむと言いし師が一月の後死んでしまいぬ

ありあんさを出てゆく落伍者と酔いてののしり泣きて

いたりき師もなきましき
「ここ四五年に生活の基盤築かれよ」と吾が直言もうべないましき
「お目付脇坂の守へ」としゃれ給い忙しさ中を文賜わりき
シュルシュルとカリスのピンガ吸う如く呑みし吾が師の酒もなつかし
亡き先生へのひいきの引き倒しなど真っ平なり金も欲しく生命惜しかりし菊治とおもう

脇坂と岩波の最後の会いは、確かその年の全伯短歌大会の後のことであった。「何か恐しく」は、岩波の容貌に、ただごとでない疲れと衰えをみてとりたのであろう。「ありあんさを出てゆく」は、新しい村を建てるのだなどと大きなことを言っていながら、いち早く逃げ出すとは何事ぞ、と同じ志を以って入植した脇坂が泣きながら岩波を罵り、それを聞く岩波も黙って泣いていたことを詠っている。

「亡き先生への」は岩波の死後書かれた追悼文の多くが、「一生を歌に徹した」とか「清貧に甘んじて」と言うような美辞麗句を以って飾られていたことへの脇坂の激しい怒りである。岩波菊治の移民としての生きる苦しみは、そんなものではなかったのだと叫んでいるのである。

その脇坂も、やがてアリアンサを出て、西部パラナのアシス　シャトーブリアンに移り、この地方にはアリア

ンサ出が多いので心強いと知人への手紙に書いているが、一九八〇年にサンパウロ近郊某地方の息子の家で自死した。（事情も年月日も確かではない）。

終りに

移民が詠い残している短歌作品によって、その〝精神史〟のようなものを辿り得るならば、というのがこの文を起してみた目的であった。しかし、時と時代の流れに添って、移民ひとりひと句の心の跡を辿って学問的に体系づけるということは、私などの遠く及ぶところでないことは初めからわかっていた。

一つの方法として選んでみたのは、日本で青年期の大方を過ごし、その間短歌を作るということでも当時日本で最大の結社だった「アララギ」に属し、島木赤彦を直接の師として修練を重ねた岩波菊治のブラジルにおける生涯の「移民としての（或いは移民生活の投影の濃い）短歌作品」を辿ることであった。少なくとも短歌という表現形式と表現力を身につけて移民となった岩波は、ブラジル生活二十七年間（一九二五年渡航、一九五二年死去）の日々の思いとその背景の「時代」とを、誰よりも途切れることなく詠み遺しているのではないかと思ったからである。心身共に苦しかった生活の中で、短歌を詠む気力をも喪ったことがあるのだが、遂には唯一の心の支え

ともなったこの小詩型の作品は、単に岩波一個人だけでなく、移民の心の或る大きな一面をも記録する貴重なものたり得ているのではないか、という思いも消すことができないのだ。

移民の心の跡は、もちろん一筋ではない。戦前戦後を通じて約二十四万人の日本人がブラジル移民となっているが、この二十四万人には二十四万人の〝精神史〟があったのだ。だが短歌のような、生涯の己れの心の、その折々の波立ちを印し刻むことのできる詩型のみが、その短さ故に、一つの定型のリズムを持つが故に、必ずしも豊かな己れの言葉を持っていたとは思えない移民にも、心を刻み記す手だてを与えた、と言えるであろう。我々は、それらの幾人かの作品によって、他の二十幾万人の心の跡を推し測るよりはかに方法はないのだと思う。

岩波は、移住に当っての志が高く強かった故に、直面する現実との隔りの大きさを感じずにはいられなかった。これが焦燥をかき立てたのではないだろうか。アリアンサを出てからモジに落ち着くまでの移転の多さがそれを思わせる。

「歌集」巻末の「病状記」に妻とめは次のように記している。（句読点原文のまま）。

ー略ーそんなに悪いにもかかわらず、注射や薬を飲む合間には本を欠かさず見ておりました。本人もすでに最後の近づいたことを悟り、私達も駄目だと感づいた時に

は、すでに苦しみは軽くなっていて、ああ、人生とは、かくもはかないものか、そして何とあっけないもかと、しみじみ洩らしました。これが最期と自覚した瞬間、にこにこと笑顔を皆に向け、まず最初に井上様（共営者）に、色々と御厄介になったね、と、手をのべて固い握手をして、ーさようなら。と別れを告げ、次に家族の皆にも、それぞれ後はしっかりやるんだよ。と別れを告げ、歌人達にもしっかりやってくれるように伝えてくれ、みんなにくれぐれもよろしく、と言い残し、その間にも子供達の泣き叫ぶのを見て、ー大丈夫、泣くんじゃない。といたわり、息をひきとる瞬間、天にむかい手をあげてーハレルヤーと叫び静に永遠の眠りにつきました。ー略ー。

「人生とは、かくもはかないものか。そして何とあっけないものか。ハレルヤ」というのは岩波の最期の言語表現であった。もしももっと長命であったら、心豊かな移民と人生を肯定する歌を遺したかも知れないが、今で言えば末だ〃熟年〃の入口で倒れたのであるから残念（無念）のほども知られるのである。この最期の言語表現を、もし短歌にまとめる気力があったとしたら、如何なる五七五七七になっていたであろうか。

一九五四年、サンパウロ市創立四百年祭に際して、日系コロニアはこれを祝ってイビラプエーラ公園内に日本館及び日本庭園を建設して贈った。その庭園内の湖水を

背にした一画に、「椰子樹」同人を中心とした人々が一九五五年に岩波の歌碑を建立した。刻まれている歌は「ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永久に思はむ」である。また一九九二年には、岩波が居住したモジ郊外のカペーラ地区が住宅地として市に編入され、そこに岩波を讃える意味でその名を冠したRUA KIKUJI IWANAMI（岩波菊治通り）がモジ市議会の議決で生まれ、命名式が催された。

だがブラジル二十七年間の実生活では、岩波菊治は常に挫折を繰り返して終った人間であった。短歌作品を辿る限りでは、これは疑えないことのようである。

もし長生きをしていたら、どんな境地の歌を詠んだだろうか。それは誰にもわからない。

最後に、これは岩波菊治の人物論でもなくその作品論でもないことをつけ加えておく。

決して長かったとはいえないが、見事にも、移民としての生涯を短歌にかかわり「移民としての心情」をその作品に託したいちにんの〝精神遍歴〟へのアプローチを試みようとしたものである。

ブラジル語註解

（ア）○アラーラ・・・おうむ属の鳥、体大きく派手な色彩の羽毛を持つ
（イ）○イペー、イッペー・・・樹木名及びその花、花には黄と紫があり、黄はブラジルの国花
（カ）○カフェ・・・コーヒー（珈琲）　○カマラーダ・・・農場の日雇人　○カローサ・・牛・馬に引かせる運搬車
○カリス・・・小型コップ、足付き盃　○カンポ・・・野、原　○カンテイロ・・・苗床
（ケ）○ケイジョ・・・チーズ、乾酪
（コ）○コロニア・・契約耕作人の住居の集まり、植民地
○コロノ・・契約耕作人、小作人　○コジンニア・・炊事場
○コンデ・フルッタ・・・（フルッタ・デ・コンデ）果実の一種　○コロッテ・・・木製小型水櫓、普通横長楕円形　○コント・・・往時の貨幣単位、一千ミルレイス
（サ）○サペー、サッペー・・・茅、萱、ちがや　○サッコ・・・袋の総称、農産物出荷用布袋　○サンパウロ・・・州名、州都名
（シ）○シネマ・・キネマ、映画　○ジャクー・・・ブラジル産鶉鶏類の野鳥、鶏大
（ス）○スザンナ・・女性の名前　○スザノ・・・地名
（セ）○センセン・・小鳥の一種　○セルカ・・柵　○セルトン・・内奥地、田舎
（チ）○チコチコ・・・雀様の小鳥

(ト)○トッカーノ…鳥の一種、体長に近い大境が特徴
○トマテ…トマト
(ハ)○バルバチモン…・潅木名、タンニンを採る　○バイアノ…バイア州生まれの人　○パウダリオ…にんにくの匂いのする喬木、この木の生えている土地は肥沃とされた　○パイネーラ…・木綿、花の色は桜に似る　○パンノ・・布
(ヒ)○ピラシカーバ…地名　○ビッショ・・・・虫の総称、砂蚤、一種の賭博で二十五種の動物の番号または番号の組合せを当てる賭け事
(フ)○ブグレ…土人、原住民、軽蔑語（田舎者）○フェイジョン…豆類の総称、米と共にブラジルの主食、煮て油とニンニクでいため米飯とまぜて食べる○フォイセ…草木の伐採に使う大鉈
(ホ)○ボンディア・・・・午前中の挨拶語、好日
(マ)○マモン…パパイア　○マット…森林、繁み、叢○マンガ…マンゴー、果実の一種　○マンジョカ…・木藷、タピオカ
(ミ)○南リオ・グランデ…・リオ・グランデ・ド・スール州
(リ)○リオ・デ・ジャネイロ　州名、都市名、ブラジルの前首都
(ル)○ルア…街路　○ルビオン・ジュニオール…地名
(レ)○レンソ・・・・大型ハンカチ、手拭い
(ロ)○ロッシンニア…地名

岩波　菊治　ー短歌に辿るー移民の心の軌跡ー

一九九三年六月発行

著者　清谷　益次

発行所　サンパウロ人文科学研究所
Centro de Estudos Nipo-Brasileiros
Rua SaoJoaquim，381-3 and，01508-900
Sao Paulo　Brasil

印刷製本　トッパンプレス印刷出版会社
Rua Munlz de Souza，645
Sao Paulo Brasil